
超次元ゲームネプテューヌmk2+ LastGoddess

リアルではねぷ子タイプ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超次元ゲームネプテューヌmk2 + Last Goddess

【Nコード】

N0773W

【作者名】

リアルではねぶ子タイプ

【あらすじ】

ラストেশヨンに住む傭兵、フロム。日々弾薬費に悩まされながら生きていく中、とても面倒臭い相手に絡まれることに。どうしてこうなった……？

9/6：タイトルを変更。こんなタイトルだけど支配エンドじゃな

い……はず。

支配エンドより嫌なエンド臭してきた……。

フロムちゃんの色々。(前書き)

物語が進むにつれて増えるかもしれない増えないかもしれない設定部。

このゲームのシステムでガチタンをやるうとした結果がこれだよ！よく重火器持てるな、とかそういう突っ込みは受け入れられません。ゲームギョウ界補正です。

8/31：始まってすらいなのに大幅修正。ダメだこりゃ。

9/02：思いついたのでセットスキル（というかEXフィニッシュ）追加、フロムの武器についての設定追加。というかそんなEXフィニッシュみたいなことやるのか不明だけど……。

フロムちゃんの色々。

名前：フロム

イメージCV：相沢舞

カテゴリ：メーカー

身長：154cm

体重：42kg

スリーサイズ：B81 - W55 - H80

説明：毎日を生きるのに必死な自称傭兵。

金が貰えれば比較的なんでもやるらしい。本人曰く【それが傭兵。】
【ろまん】というものに目がなく、(いろんな意味で)強く感動・
興奮するものに関しては目の色が変わる。ネプギアはその【ろまん】
の塊らしい。(若干ブランとキャラが被った(ry))

容姿：髪は白く(染めているらしい)。地毛は不明)、まっすぐなセミシヨートに赤い瞳。

白のワンピースの上に赤黒いジャケットを羽織っている。さらに両肩と両手の甲、両膝には緑色の厚い装甲版のようなものが付いていてたまに女神のパチモンとか言われる。

本人曰く【一人旅は危険が多い】からつけているらしいが、どうみても効果なし。

武器：重火器(グレネードライフル・バズーカ)。Exスキルで出るその他の重火器は全てこの武器が変形したもの。SPスキルの武器は別途に持っている。質量保存の法則なんかなかった。

特徴：簡単に言えば重戦車化したユニ、またはブラン+ユニ÷2+

。初期MOVが2と最悪な上AGIやTECも最低ランク。逆にATKやVITは最高ランク。APは割と高めだがセットスキルが

基本的に単発。そもそもラッシュスキルを初期スキル以外に覚えな
い。

通常攻撃の射程が特殊でキャラ三人分ほど前方に小型円（バズーカ
は中型円）が射程。必死に近づく必要はないため低いMOVでもそ
れなりに戦える。アクション・ミレニアムメモリなどでMOVを
増やしテクニカルサポートなどでTECを補えば見事なガチタ…移
動砲台になる。

スキル：低MOVなのに近距離じゃないと使えないスキルばかり。
しかもほとんどのスキルの射程が通常攻撃以下なのでスキルで先制
攻撃はほぼ無理。（というかシステム上だれでも無理な気もする）
単発超威力ばかりなのでネプテューヌか彼女かネプギアの取り合い
になるかもしれない。

07 - MOONLIGHT：AP70・SP60 威力500 ガ
ードダメージ190

両手にレーザーブレードを装備し直進して両方一気に突き刺す技。
最初から覚えているスキルだが燃費が最悪。ガードブレイク時で余
裕がある際の決めぐらいだろうか。

NIOH：AP150・SP250 威力3000 ガードダメ
ージ1000

右腕に取り付けたパイルバンカーで敵を貫く。

見ての通りの極悪燃費と極悪火力である。

SP250なんてどう溜めればいいんだろう……

SP回収力死んでいるのに…

JIREN：AP100 自らのSP100回復

P・SPチャージ使えよ。

戦闘開始：さあ、お前の魂^{ソウル}を貰おうか！
戦闘開始（先制）：敵は浮足立っている。潰すぞ！
戦闘開始（バックアタック）：後手には後手なりのやり方がある！
自ターン：さて、どう動こう？
敵撃破：さようなら、縛られた命。私を超えることなど不可能だ！
勝利：撃ち負けはしないよ。当たるならね。
戦闘不能：じよ、冗談、じゃ……
戦闘不能復帰：へばり付いてこそその山猫！
アイテム使用：これ、使うよ！
07-MOONLIGHT発動：一瞬で、蜂の巣に、してやんよお！
NIOH発動：こういつのにこそ浪漫が詰まってるのさ！全部纏めてぶち抜く！

おまけボイス集

自己紹介：傭兵、フロムよ。よろしく。
誕生日を祝う：誕生日、か……。次もあるといいけどね。
メール着信：メール到着。何が書いて……。なんでもない。
電話着信：電話が来てるみたい。嫌な予感もありそうだけど、ね……。
褒める：ま、ありじゃない？あなた。
罵る：屑が、あんたには水底が似合いよ。
その他1：くつ、ダメだ、沈んでいく……！？ハッ、夢か……。
その他2：目的は既に果たしたわ……。ネプギアがね！！

EXファイニッシュ集

MLGST/HAM： 40：ミサイルを四発放つ。AP燃費が良かったため基本SP回収技。
M24/EN： 50：スナイパーキャノンからエネルギー弾を放つ。ガードブレイク重視。
FR550： 65：火炎放射器ならぬ凍結ガス放射器で敵を凍ら（麻痺ら）せる。5発ヒット。

MML16： 1105：ミサイルを16発放ち中ノックバツク。距離が大切なフロムにとっては死に技。

RG-RH： 1120：【ダイトウリヨウ】という人間が愛用したらしいレールガンで狙い撃つ。SPスキル並の単発超威力技。

フロムちゃんの色々。(後書き)

一応開始(第一章)はキラーマシン(原作二章ルウィー)から。
ラストイション勢なのにルウィーで遭遇とかどういふことなの……

0 - 1 (前書き)

ルウィーから始まると言ったな。

すまん、ありや嘘だった。もうちょい前（ラステイションの下っ端戦）からだった。

こんなところから始まるけどネプギア達と対面するのはルウィーのキラーマシン（予定）。

至らない点しかない駄作者による作品だが大丈夫か？大丈夫じゃない、大問題だ。ということぞ。

私は傭兵である。名前はフロム。いつからこんなことをしているかとんと見当がつかない。何でも物心ついたころから銃を持ってただ殺し続けていると記憶している。

私はこのとき初めて女神というものを見た。とはいっても、遠目ではあるが。

その時私がいたのはラストেশヨン付近の旧リゾート区、リピートリゾート。ギルドの依頼で数体のイルカっぽい生物の討伐を終えて小休憩をはさんでいた時だった。

「ふう……」

周りの壁の上に座り、一息つく。ここには猫っぽい奴や魚の骨など雑魚がいるが、稀にイルカのような生物が出没する。その他のやつとは桁違いの強さなのでそれなりに実力がないと受けることはできても返り討ちだ。

まあ女神信仰が最底辺まで陥っている今ギルドの依頼をこなそうという人間事態がレアだが。私はそこまで信仰心が強いというわけでもない。傭兵なのだ、結局は金になればいい。

それに銃を得物としている以上、弾薬費も莫迦にならない。

ラストেশヨンの女神候補生も銃を得物としているそうだが弾薬費は経費で落ちるのだろう。羨ましいことこのうえない。

ふと、後ろを振り向いてみると、青い海と青い空があり、白いリゾートも合わさって綺麗に感じた。ゲームでは傭兵の戦う場所と言えば市街地や荒野、砂漠など殺伐したイメージがあるが私がいるのは元とはいえリゾート地だ。傭兵らしくはない。

それに傭兵というのも自称だ。戦争中というわけでもないし、基本

的に討伐や殺し専門の何でも屋：いや、この場合殺し屋と言った方がいいのだろうか。

などとくだらない思考を考えているのも無駄だ。

少し頭を振り、壁から降りる。掛けておいた銃を持ち、歩き出す。

それと同時に銃撃音が耳に入った。

「……ッ!？」

とつさに銃を構え、周囲に意識を割く。

銃なんて文明の利器を使えるモンスターがいるとは思えない。つまり銃を使える人間がいるということになる。

数年前ならば人間ということでも安心もできるが、犯罪組織マジエコンヌの手が世界のありとあらゆるところに蔓延っている今、敵ではないという確証はない。

耳を澄まし、次の銃声を待つ。

聞こえればその方向に牽制射撃。一発1000creditとあまり安くはないが、命あつての稼ぎだ。

5秒、10秒。1秒1秒が全身の神経を張り詰めらせる。

途端、全く同じ銃声が響いた。即座にその方向を向き、軽く跳んでから引き金を引く。

牽制のつもりなのであまり狙いはつけていないが場所を特定することはできた。

着地すると同時に走り出し、着弾地点に向かう。

着弾したフロアが見えたと同時にその広場とは別方向の通路に滑り込む。

姿勢を低くしてT字路の壁から除きこむと、何やら数人の少女を見つけた。二人ほど倒れているが。

先に撃ち込んだ影響かほとんどが慌てているように見える。

落とす場合今攻めこむべきだが、銃声が聞こえた時点で敵味方が混合している可能性も捨て切れることもできない。

さて、どうするべきか……

ダン、ダアン。

再度銃声が響きだす。咄嗟に隠れ、弾の装填を行う。

一発1000creditの特注弾頭なのだ、無駄に使えば明日の食べ物なくなる。

幾度となく銃声が響いた後、ぱつたりと銃声が止む。

その数十秒後、私の横を灰色の鼠のようなコートを着た少女（どちらかと言えば女性に近いかもしれない）が走って行った。ところどころが焦げ付いている。

どうやら私には気づかなかったようでそのまま走り去っていった。

広場の方を見直すと、先ほど立っていた二人の姿が変わるところが見えた。

遠目……2、30mほど離れているため完全に認識することはできないが、二人が光に包まれて姿を変えた、というところは認識できた。

【変身】 - あるものが他の物に姿を変えること。

片方は服等の装備が変わる程度だがもう片方は髪色すら変わっている。

そもそも、ゲームギョウ界とはいえ、変身のような吹っ飛んだことを出来るのは私の知る限りでは女神しかいない。

しかしその女神は三年前に四人全員が行方不明になった。

その結果、私の脳内は一つの結論が出る。
あの二人は、女神候補生なのだろう。

私知っているのは女神候補生とは女神の妹であることぐらい。
あと精々ラステーションの女神候補生の名前と得物。確か【ユニ】
だったか。

倒れている二人もそうなのかはわからないが、あの二人の片方はお
そらく【ユニ】、もう片方もどこぞの女神候補生なのだろう。
そうとわかれば話は早い。女神は国で最も尊いと言われる者だ。候
補生でも変わらないだろう。

そんな雲の上の方と会えば面倒なことになるのは確かだ。先ほど一
発撃ちこんでしまったし。

世の中、バレなければいい。……マジエコン又みたいな考えだな、
これ。

そう考えながら、気づかれぬように、こっそり、且つ素早くその
場から離れ、ラステーションに戻った。

一度、教会に行ってみるのもアリかもしれないな。

尊い女神候補生が何故こんな辺鄙な元リゾート地にいるのか、聞き
出してみるのも必要だろう。教祖を考えれば同等の代価が必要そう
だが……そのあたりは後々考えよう。まずは報酬だ。

日記追記：報酬は2500credit、使った弾頭は4発、つま
り4000credit。……今日も赤字だ。

0 - 1 (後書き)

ネプテューヌの二次小説なのに驚きの泥臭さ。本当にフロムさん恐ろしい。

まだろまん関連は出てこないですよ。ほんとに。

しかしユニはあんだけ銃弾ぶっぱなしといて弾薬費どうしてんだ、と思ったら女神候補生だし経費で落ちるんだろっなあ。と脳内保管。本当にネプテューヌの二次は地獄だぜフウハハハ……
すいませんでした。

ネプギア達と合流するまで泥臭いオリ展開と赤字生活が続きます。
というかこれ以降最悪合流までネプギア一行が出るのかすら怪しいところ。

本当にネプテューヌの二次小説かこれ……？

今回の懺悔：リピートリゾートには本来海豚（ドルフィン）はいません。セプトンリゾートと近いので出るときには出るんだろっなーという理由でやりました。

0 - 2 (前書き)

さて、暫く泥臭さと赤字生活が続く予定だが……。どうなるのか、ほんとに。

余談ですが作者はまだmk2一週しかしてません。(真ENDと支配END)

やはりBADENDはいい……。圧倒的じゃないか！その後のネブギアの苦悩、不安、絶望を妄想するだけで若干楽しくなってくるト畜生が一話をお届けします。

ラスティシヨンの教会。

教祖、神宮寺ケイとその他大勢、そして女神ノワールに代わり女神候補生ユニが国を治める場。

正直ここに来る人間も激減し、廃れてもおかしくないのだがそこは教会の意地というものなのか無事維持できている。意地だけに。

……失礼。

今日、私がここに来たのは紛れもない女神候補生ユニがラスティシヨンを離れて他国の女神候補生と何やらやっていた。ということの詳細を聞くため。

基本的に私の仕事場は旧リゾート区やカンパニー跡地。そこに女神候補生が現れて流れ弾が当たったりしたら大参事だ。正直そういつた面倒臭い雲の上の女神に関わるとロクなことがない、と思っている。

とかなんとか考えている間に教祖が出てきたようだ。

「ようこそ教会へ。まさか傭兵が教会に来るなんて思ってもいなかったよ。」

「素性は…知れているようで。」
「そりゃあね。情報はほかの何よりも強力な武器だ。ラスティシヨン住民の名前や顔ぐらいは記憶している。」

この教祖、巷ではあまり話したがるようなのはないらしいが、その気分が今わかった。

所謂智将、軍師という物凄く頭が回るタイプなのだろう。私も遅く

はないと思っではいるが。

「それで、要件を聞こうか。」

「……わかった。」

私が教祖に話したことは、旧リゾート区で女神候補生ユニを見たこと、そしてもうひとりの女神候補生らしきものの存在。そして鼠コートの女性と戦っていたこと。

私の話を聞いた教祖は面白いものを発見したようにニヤケながら考え事をしている。傍から見てとても怪しい。

「その報告に値する情報を与えるとするならば、ユニがこちらこちらに行っているのは僕の頼みさ。詳しくは言えないがね。そしてそのもう一人の女神候補生、彼女はプラネテューヌの女神候補生ネプギアさ。わざわざラスティションに来るあたり何やら目的はあるのだろうけどんで見当がつかない。まあ、このぐらいかな。」

「…悩みも取れた。これで失礼する。」

「良い取引がありがとう。ああそうそう。君はその女神候補生達と

【会った】のかい？」

「いいえ、遠目で見たただけだが？」

「一度会ってみるといい。君は何か女神を嫌視しているように見えただからね。彼女たちならそのイメージも変わるかもしれない。」

「……取引好きの教祖様が一介の傭兵に随分なご執心で。」

「何、久しぶりのお客だ。少しお節介でもしてみたくてね。それにラスティションの教祖としてラスティションの住民に幸福を与える義務と言う奴もある。」

「…失礼する」

私はすたすたと教会を出る。

どうやら私はああいうタイプが大の苦手のようだ。

教会を出ると、相変わらず黒々しい町並みと青い空が視界を独占していた。

まだ昼前だ。一仕事やってもいいだろう。そう考え、私はギルドに足を向けた。

ギルドとは、まあ簡単に言えばゲームギョウ界中の依頼の仲介所だ。どうでもいいお使いや教祖からのモンスター討伐の依頼など結構多種多様なのだが……

最近（といっても女神の消息不明からだから三年弱ほど前から）はロクに人がいない場合が多い。

「ようフロム。仕事か？」

「…リントさん。」

今私に話しかけてきたのは天宮リント。傭兵というわけではなく、ラストেশヨンの防衛部隊の人らしいのだがロクに仕事をしているのを見たことがない。

座右の銘は【生きていりゃあそのうち何とかなる】だとか。生存本能にあふれている人だ。

「若い子は元気でいいねえ。俺は毎日生きてビールを飲みりゃそれで十分だ。」

「リントさん物凄く年寄臭い。」

「はっはっは。まあ女神さんたちがどっか行っちゃまって世界もごたごただ。この世の中素直にゲームできる子供たちが羨ましくってしようがねえ。」

「防衛隊が言う台詞かそれ……」

「いいんだよ今はオフだ。それよりフロム、一仕事する前に飯行か

ねえか？腹が減っちゃあ仕事もできねえ。」

「奢りなら。」

「よっしゃ、イーノヤルシエルとかも誘って飲み会すっか！」

「私未成年だから。あとまだ昼前だから。」

何だかんだ言って飲み会は免れたけど多人数でこんな昼食取ってる私って何なんだろう。

「支払はフロムを除いて割り勘でいいよな？」

「すまない。今月も大赤字で…。」

「大丈夫だ、問題ない。」

「イーノ君、君の財布の中身は一昨日使い切っていたはずだが大丈夫か？」

「昨日大金の入った財布を拾った。大丈夫だ、問題ない。」

「大丈夫じゃないだろそれ!？」

私、リントさん、今一よくわからないイーノとルシエルさんの四人でいるのはラストেশションの一角、Nono壱番屋。平たく言えばカレー屋。

最近キミズカレーなるものが新しくでたらしいが私はそんなイロモノは要らん。普通に7辛のカレーがマイブーム。

「リントさんはどうします？」

「俺は…ちよっとキミズカレーでも挑戦してみっか？」

「自殺願望あつたんだ…」

「馬鹿いえ。」

「私は無難に2辛にしよう。イーノ君、どうする？」

「10辛にしよう。舌には自信がある。大丈夫だ、問題ない。」

それ、絶対大丈夫じゃないだろ……。

その後、昼食はイーノが一口毎に悶絶してはルシエルさんの「神は言っている、ここで死ぬ定めではないと」を繰り返したりするぐらいしか特筆することもなく、私は無出費で昼食を取ることができた。リントさんさまさまだ。

ギルドにより適当に依頼を受けてさて行こうとした矢先。見覚えのある黒と紫が入ってきた。

「ん……はあ。悪いわねネプギア。ラスティションのシェア回復手伝えちゃって。」

「当然のことだよ。ユニちゃん一人だと真っ先に麻痺していつの間にか倒れちゃいそうだったもん。ほっとけないよ。」

今、私はものすごく戦慄しているであろう。

ギルドに入ってきたのはラスティションの女神候補生ユニとプラネテューヌの女神候補生ネプギア。

私のことを知りはしないだろうが、数々の出来事が私の心臓を締め付ける。

私はここまで臆病だったのか、と内心自笑し彼女らの横を通りぬけようとする。

刹那、脳裏を通り過ぎた一瞬の感覚。

反射的にその方向に銃を向けると、私はユニと銃を向け合っていた。

銃を向け合いながら無言。一瞬感じたのは何だったのか、それ以前に女神に銃を向けたということにただならぬ危機感が煽られ頭がうまく働かない。

「ダメだよユニちゃん！元からトリガーハッピーみたいな思考回路なのに初対面の人に銃突きつけられたらそれこそ乱射魔だよ！」

もう一人、ネプギアの声で我に返る。

自分でも物凄いなと思う速さで銃をしまう私と、どうやらまだ我に返る途中らしいユニ。

「あの、大丈夫ですか？すいません。ユニちゃん悪い人じゃないんですけどなんでもかんでも撃ちたがるトリガーハッピーな子なんです。」

「大丈夫、だが……今のは一体……？ハッ、申し訳ない。失礼する。」

即座に立ち上がり、そそくさとギルドを出る私。

後ろから「ユニちゃん、はやくしないと武器は軽火器なのに体は重いか言われちゃうよ？」とか聞こえたけど私には関係ない（はずだ）からさっさと依頼をこなすことにした。

日記追伸：今日こなした依頼の合計報酬は13000。撃った弾頭は7発で7000。久々の黒字だ。今日はごちそうにしよう。

0 - 2 (後書き)

これ…ネプテューヌの…二次小説…だよね…？
何この驚きの庶民っぽさ。

オリキャラが出すの面倒ならゲハピク勢の人を出せばいいじゃない。
とか思った結果がこれだよ！

これは叩かれても仕方がないレベル…もうだめだ…おしまいだ
あ……。

次から次の次辺りから本格的に泥臭く及び血生臭くなるだろう…。
多分、きっと。

0・3 (前書き)

なんだかもう瞑想中につき。

確かにネプギアと合流はしてないが…して、無いが…どうなの、これは。

どうなの、これは。

今日、割と快晴なり。私フロムは割と精神的な危機に陥っていた。何を隠そう昨日反射的に女神候補生と銃を突きつけあうということんでもないことをやらかしたのだ。私。

その時は逃げ出すように依頼をこなしたが、ギルドに行くたびに（何とか依頼をこなしてはいるが）ため私は気が気でない。

不敬罪か何かで銃殺されそう。不敬罪なんてあるのか知らないが。

リントさんによればそのプラネテューヌの女神一行はプラネテューヌに帰って行ったとか。女神候補生相手でもあのフランクさは変わらないのだろう。ある意味すごい人だ。

プラネテューヌに行ったたというのなら遭遇することもないだろうと少し不安気味にギルドに入ると

「ようフロム。」

「遅かったじゃない。」

……ユニとリントさんが待ち構えていた。なんてことだ。

「リントさん……私に恨みでも何かあった？」

「別にそういうんじゃないさ。昨日おまえさんが仕事に行った後あのプラネテューヌとこの嬢ちゃんと話したんだが結構いい嬢ちゃんだね。」

「で、それとこの状況に何の関連性が？」

「それは私から話しましょう。」

私とリントさんとの会話にユニが入り込んでくる。
正直嫌な予感しかしていない。私は面倒事が嫌いなんだ。

「リントから聞いたけど、あんたって銃の使い手らしいじゃない？
それもかなりのの。」

「かなりのの、の部分は疑問がありますがね」

「私に銃の戦い方を教えなさい！」

「謹んで遠慮させてもらいます」

ユニの横を素通りし数個依頼を受ける。どれも数少ない弾数でそれなりに稼げると判断したものばかりだ。

「じゃありントさん、これから依頼があるんでこれで」

「おお、頑張れよー。」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

私が背負う銃を掴み私を引き留めるユニ。それ危ない。暴発したら大変だから。私が。

「ハア…リントさん、これなんとかしてください。」

「無理を言うな。女神候補生だぞ？」

「その女神候補生と親しげに話してたのはどこの誰だよ」

「それは俺の特技みたいなもんだ。」

「ちよつと！私を無視しないでくれる！？」

「で、今日の依頼はどうすんだ？」

「廃工場内部のモンスター殲滅ですね。でリントさん、これも連れてけと？」

「女神候補生だぜ？折角だから連れてっちまえ。」

仮にも女神候補生に対しこれとか折角だからとか言い放つ私たちって何なんだろう。本当に不敬罪のにおいがしてきた……。

「じゃあリントさん、行ってきます。」

「おう、行って来い！」

「ちょっと！私を無視しないでっばー！」

ラストイションにも大量に工場はあるが、ところどころ郊外に廃工場があつたりもする。

私の目前にある廃工場、通称マッドカンパニーもその一つだ。その通称から察するに何かマッドな研究をしていたのかもしれないが……私には関係ないことだし何より今となつてはわからない。

目的は中にいるモンスターの殲滅。できるだけ弾の消費を抑えたいから上手くひきつけなければならぬ、だが……

「結局付いてきてるし……」

「女神候補生が付いてきてやってるんだから感謝しなさいよね！」

「女神候補生だから感謝できないんだけど……」

そう、結局ユニが付いてきているのだ。

こんな殲滅戦に女神候補生なんて出てきて巻き添えを食らわれると非常にまずい。報酬どころか逆に色々請求されそう。そうされたら割と生きる活路がない。

「とりあえず迂闊に出てこないでくれますか？邪魔なので。」

「邪魔って何よ！私足手まといに何かならないわよ！」
「あーめんどくさ……」

基本背中に掛けていているカバーから愛用の銃を取り出し、構えながら扉を蹴り開ける。

扉から見える範囲には赤いスライヌと仮面とつけた猫(?)。
まあそんなものではないというのは百も承知。
今頭にある作戦は出来るだけ多くのモンスターを引きつけ、一掃もっとも効率的かつ弾頭を使わないやり方だ。
大型がいない限りはこれでなんとかなる。

「とりあえず、まず引きつけ」モンスターの殲滅よね！？任せなさい！」「ちょ、ま!?!」

ユニが私の横を走りすぎ廃工場の中に走り出し、すぐに銃声が響きだした。

「……………護衛対象が敵に突っ込むんじゃねえええ!!」

私も中に走り出し、とっさにユニを見つけてその数m前に撃ちこむ。

「ちょ、あんた何す」退いてろ!」

ユニに近づいてから手に持つ銃(形状から見てアサルトライフル)を奪い取る。

両方片手で撃つには多少骨が折れる。が、そこまで大した問題はない。

「全員纏めて、マッハで蜂の巣にしてやんよ!!」

叫び声を上げながらアサルトライフルを乱射。多く溜まっている上反動で口々に照準は合わせられないがざっと見て40体は要るため数を撃てば大体当たる。

「そらそらそらあ！」

只管ライフル弾をばら撒き、少し多いところにはグレネードを撃ちこむ。

硝煙で徐々に周りが見えなくなるが、聞こえる断末魔と気配頼りに撃ち続ける。

数十秒そんなことを続け、手持ちのグレネードも尽きかけた時。断末魔がパタリと止む。

煙が晴れると、機械の残骸やら蜂の巣になったスライヌなど死屍累々状態だった。

数えた限りでは撃ち込んだグレネード数は6発。計60000credit…報酬が足りるかどうか。

と、ここでアサルトライフルを借りた相手、ユニの存在を思い出す。周りを見回すと、ちょうど真後ろに座り込んでいた。

「あ、あんた、ねえ…！私を殺す気…！？」

若干涙目になりながら私をにらむユニ。数発流れ弾が行っていたようだ。

「あーあ、予定なら2、3発で済ませるつもりだったのに6発も撃ち込んだ…誰かが迂闊に飛び込んだりしなければ……」

「そ、それより私の銃返してよ！」

「はい。」

とりあえず借りていたアサルトライフルを投げ渡す。軽火器も汎用性や小回りは効くがどうにも物足りない。ある種のトリガーハッピーなのだろう私は。トリガーハッピーに数種類あるかどうかはわからないが。

「さて、帰る帰る…黒字だといいけど……」

「ちょ、ちよつと待ちなさい……！」

振り返ると、ユニが何か這い蹲りながら言っていた。女神とは思えないほど無様な恰好である。

「…何しに来たんですか女神様」

「あんたに銃の戦いかた教えてもらうため……あ！」

何かをひらめいたようで突然立ち上がるユニ。嫌な予感しかしない。

「今、決めたわ！あんたを教会で雇う！」

「……ハ？」

私に指差しながらそんなことを宣言するユニ。

どうしてそうなったとか、なんでだよとか色々言いたいことはあったが、私の頭に浮かんだのはただ一言。

…これは、面倒なことに、なった。

0 - 3 (後書き)

その場のノリで書いているのもう自分でもよくわからないことに。これは叩かれる。横から。

今後次回予告は無し！

今回の懺悔：デスペラードぐらいだけどユニはアサルトライフルを片手で撃ってます。というかアサルトライフルなのにユニの銃って単発……ドバーガン（実弾・レーザー両方撃てるトンデモ銃）なのだろうか。

0 - 4 (前書き)

最近もうフロムじゃなくてもいいんじゃないかな、と思い始めた今日この頃。

最近ネプスの平和さによくほんわかする今日この頃。

最近コメントが来ることになり感動する今日この頃。

最近ジャッジ様関連で小説考えれば某人類種の天敵みたいなBAD

ENDができるんじゃないかなとか思いつき始めた今日この頃。

どうしてこうなった、という言葉がある。

どうして、とは何故など原因を聞く場合に使われる。こうなった、つまりこうという状況になった。

合わせてこの状況になった原因を聞く、転じて状況を嘆く際にも使われる。

以上のことを踏まえてもう一度言おう。

どうしてこうなった。

私の今いる場所はラストレイションの教会。依頼を受けたら女神候補生に絡まれるし挙句雇われることに・・・どうしてこうなった。

「女神候補生に雇われるなんて…世も末だ。」

「…さつきからそれ聞こえるように言っただけ？」

「なんのことかね」

「おや。ユニから師匠を連れてきたと連絡がきたので急いできてみたら。君だったのか。」

どうやら教祖が来たようだ。正直こんな早く再開するとは思っていなかった。会いたくはなかった。

「傭兵を雇う女神候補生って、この国もそろそろ末じゃないの？どうなのよ教祖様。」

「まさか、傭兵を雇うとは僕も思わなかったよ。ユニも何を考えているのやら。」

「……そういうのって、本人がいないところでやるもんじゃない？」
「本人がいるからやるんでしょ」じゃないかい？」
「……」

飽きたようにため息を吐いてから適当な場所に座るユニ。
どうやら話に絡むのはあきらめたようだ。

「さて、ユニから聞く話では君を雇うらしいが……希望はあるかい？」

「弾薬費。」

「だけかい？」

「生活費とかは別に稼いでいる。問題は弾薬費。私の銃は一発1000creditの特注品だから。」

「一発1000credit、か……。その銃は君が背負っているそれかい？」

「……。」

「……じゃあこういうのはどうだろう。これから君にはユニの御守りのついでに教会からの依頼を受けてもらう。もし大型を狩れば一体に付き2000creditを手当しよう。つまり、大型を一体狩れ、という報酬が3000creditの依頼を君にだし、それをこなした場合大型の特別手当に加えて依頼報酬。つまり5000creditを稼げる。というわけだ。ユニに関する手当はユニの小遣いから割当てよう。それでいいかい？」

「お守りって何よ」

「引き受けた。」

「スルー!？」

「契約成立だ。それで、教会にも住む場所はあるが、どうする?」
「元の場合でいい。教会に行けばいいんでしょ?」

「まあ、そうだね。とりあえず今日は帰ったほうがいい。明日ユニを向かわせよう。」

「え！？私！？」

「君が雇うのだから君が面倒を見るのは当然だろう？」

「……はあ。わかったわよ。」

どうやらユニは自分に飛び火するとは思っていなかったようだ。と
いうか当事者というか元凶だろう貴女様は。

「じゃあ、今日はもう帰ったほうがいい。ユニの我儘に付き合わせる
ことになってすまないと思っっているよ」

「ケイ、棒読みになってる」

「内心だと面倒くさい女神を押し付けられて幸運だとも思っ
てい
そうなの……」

「心外だね。」

「まあいい。じゃあ、また明日。」

「ああ。また明日。」

「寝坊したりしないでよね！」

教会を後にすると、日が既に暮れだし、黒い工場群が輝いて見える。
私は若干忘れかけていた依頼を報告（報酬は計6500credit
だった。ギリギリ黒字）し、自宅に戻った。

0 - 4 (後書き)

ユニ(ケイ)と契約して弾薬費が圧倒的に浮いたフロム。

そしてケイの真つ黒な依頼がラストイションを震撼させる・・・!?
次回、超次元ゲームネプテューヌmk2+。

「ケイ」そちらにとっても、悪い話ではないと思いますが? (笑)
」
お楽しみに。

0・5 (前書き)

コメがさらに増えてばんざーい。

というかこれいつ1章(ルウィー・キラーマシン)戦目)になるんだらう…。

それに一章のタイトルすらまだ考えてないのに…。

でも日常パートのイーノ君とルシエルさんの汎用性が高すぎてヤバイ。

早朝。私は聞き慣れない音楽で目が覚める。

私は比較的朝には強い方だが、時計を見れば午前4時。本当に早朝だった。

横に転がっている私を起こした携帯端末を開ける。メールだ。

私の携帯端末の使い道と言えば本当に携帯する電話だ。その電話もロクに使った覚えはない。

まあしかし、こうしてメールが来ているのだからそれを見るほかはない。

From ラステイション教会 To フロム

Title : 依頼連絡

早朝からすまないね。その日その日の依頼をこれからこうしてメールで通達するよ。メールアドレスの聞き所は聞かないでほしい。

これからすぐにユニも行くだろうから依頼ついでにユニのお守をしてほしい。ユニも劣等感の塊だがあれで女神候補生でありノワールの妹だ。十分優秀だと僕は思っているよ。

さて、最初の依頼だけど、ミッドガルド地区の中規模マジエコン又信仰団体を制圧してほしい。

ユニとプラネテューヌの女神候補生ネプギアによってラステイションのシェアは全体的に約67%ほど回復した。しかしまあ、そういう信仰団体はどうしてもある。それは直接たたく必要があるのだからいかにせん教会も手が短くてね。そこでちょうどいい傭兵の君に頼むことになったんだ。

制圧方法は君に任せるよ。自慢の銃でやってもよし、和解や舌戦も

よし。

ただし条件を二つつけさせてもらう。死者を出さないこと、必要以上の器物破損を起こさないことだ。

この二つを守ってさえくれれば何をしても構いやしないよ。犯罪組織を信仰したことを後悔させてやるといい。

報酬は後払いだが、金額は先に提示しておくよ。50000creditだ。

じゃあ、頑張つてほしい。

……なんともまあこんな早朝からこんな長いメールを送れるものだ。しかしまあ、市街戦とはなんとも傭兵向けな依頼だ。それで50000creditもらえるのであればこれは稼ぎ所だ。言わばぼろもうけのチャンス。

何にせよ、とりあえず、朝食でも取ろう。目も覚めてしまったし。

とは考えたものの、基本的に私は料理をすることはない。理由は下手だからだ。

一度色々工夫してはみたもののイーノが復活したそばから悶絶するというある意味猟奇的、あるいは兵器的なものができてしまう。

これは才能がなさ過ぎて一回転した、という安直な考えでいいのだろう。

まあそのような理由で自室の冷蔵庫（と言うより食料貯蔵庫と考えるべきかもしれない。）には飲料しか入っていない。それだけで腹

が膨れるわけもない。
そして買い置きしている携帯食料も底を尽きかけている。

……結論、リントさん辺りにでもたかろう。

こつもすがすがしい気分でギルドを訪れるのは一日ぶりだ。
だがしかし、契約までしてしまった以上（立場的な意味で）お荷物を連れて制圧戦なんかしないといけないのだから若干憂鬱な気分だ。だが、今はそれを考える必要がないだろう。食事を食事として考えて取れるということは割と貴重だ。
リントさんに対して何をたかろうと考えながらギルドの扉を開けると

「待っていたわ！」

即座に扉を閉める。

おそらく音速の域に達するレベルで扉を閉めた私は、綺麗に回れ右でギルドに背を向け歩きだす。

どうやら私はまだ夢の中のようだ。無理もない、先ほどの時計は午前4時。いつもの私はあと一時間程度寝てから起きる。

なのでまだ目が覚めきっていないようだ。
こういった意識のあり、なおかつ現実性のある夢は元の場所で眠りなおすと逆に目が覚めると言われている。

この状況にびつたりと当てはまる解決方法だ。そつだ、それにしよう。

「ちよつと、なんで扉閉めたのよ！」

どうやらこの夢では女神様に好かれているようだ。うん、これが有難迷惑という奴なのだろう。

女神と直接関わっていいことというのが思いつかない。私の場合弾薬費が浮く程度か。

さて、まずはコレをどう切り抜けて家に帰ろうか……

「……………待ってって言うてんでしょうが無視すんなよオラアアアアア
！……！」

「つつ、うおっ！？」

後ろの女神様が私にあるうことか発砲までし出した。女神がルール（大体あつてるはず）な国、しいてはゲームギョウ界でこんなことが許されるのだろうか。女神だから許される。

咄嗟に銃口を逸らして一命を取り留めたがなんとということだろう。こんな危険な女神様とこれから依頼をしなければいけないのだろうか。教祖の小憎らしい顔が目には浮かぶ。

「これから依頼もしなければいけないのに発砲するなんて何を考えているのだろうかこの腹黒ツインドリルは。こんなのが女神になつて大丈夫なのか。」

「ちよっと、途中から声出てるわよ。というかわざとよね、わざとモノローグ口に出してるわよね？」

「なんのことやら。」

さて、現実逃避もここまでにして、そろそろ何か食べたい。女神なんて上流階級のこのお方が料理なんてことを出来るわけがないし、イーノ辺りでもいればよかったのだが……

「イーノ君。そんな予算で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。」

いた。まさか考えた途端に出てくるとは思わなかった。

しかしこいつらは何をやっているのだろう。ギルドにちよくちよく顔を出すようだがどういいう仕事をしているかロクに聞いたことがない。イーノは何かの書記官をやっているそうだが……到底信じられはしない。

まあ今はそんなことはどうでもいい。重要なのは朝食だ。

「奇遇だなイーノ、ルシエルさん。朝早くから。」

「ああ、フロムか。いや、イーノ君が朝早くからキミズカレーを食いに行くって聞かなくてね。全く、困ったものだよ。」

「じゃあ私も手を貸そう。と言ってもルシエルさんとイーノの二持ちで。」

「おいおい。私もそこまで手持ちはないんだがな。」

「女神様がいるんだし割引とか聞くんじゃない？」

「女神を何だと思ってるのよ……まあいいわ。そのキミズカレーだっけ？それを食いに行くんでしょ、あんた。どうしても付いてきてほしそうだから仕方なくついてあげてるわ。」

「何かほざいてるし行きましようかルシエルさん。」

「まあまあ。彼女の言うことは断れないさ。女神は絶対だからね。」
「絶対者にまともなのがいた覚えがないんですけどね……」

談笑しながらイーノの後を追う私とルシエルさん。

途中から寂しくなったのか女神様が来たけどイーノもルシエルさんも煩わしそうにはしていなかった。

私の感性がおかしいのだろうか……？

私やリントさん、イーノとルシエルさんもよく行くらしいラスティシオン下層に存在するNono壱番屋。

ラスティシオンを代表する歌手、キミズナナも常連でその所為かキミズカレーというゲテモ……イロモノカレーもメニユーにでかかると宣伝されている。

「キミズカレーだ。今日こそは大丈夫だ、問題ない。」

「少し前10辛で悶絶していただろうに…懲りないなこいつ。」

「こいつは話を聞かないからな。さて、私は無難にハヤシライスでも食べようか。」

「今日は依頼もあるし、大盛り2辛のカツとチャーシュー増し増しで。」

「支払が私とイーノ君だからって遠慮がなさすぎるだろ。私はともかくイーノ君はまともに金を持っていないはずだ。」

「昨日の夜カツアゲにあったが逆に財布を奪った。正当防衛だから大丈夫だ、問題ない。」

「なら大丈夫だ。」「なら大丈夫だ。君の判断なのだからな。」「どこが!? 正当防衛どころか逆カツアゲじゃない!？」

先ほどまで黙っていたユニが声を荒げる。

「どうやら常識人だったようだ。街中で人向けて銃ぶっぱなしはするが。」

「何か問題ある?」「少なくとも私にはないがな。」「大丈夫だ、問題ない」

「あんたらねえ! 何さらつと犯罪者紛いなことやってんのよ!?! マジエコン又かあんたたち!」

「で、何食うか決まったの女神様?」

「あ、もうちよつと待って。こついうとこ来たことないからよくわかんなくって……」

「早くしてくださいませんか女神様こちら仕事があるんですが」
「だからちよつと待ってつてば！あーもう私もキミズカレー！」
（ゲテモノ選んだよこの女神様）（そんな選択で…大丈夫なのだろうか…）

その後談笑（失笑）した後にカレー到着。私は色々と増し増しなカレー。ルシエルさんのは若干色が薄いハヤシライス。

そしてユニとイーノの目の前にあるのはゲテモノとしか言い様のないカレー（?）。

本来のカレーは茶色、まあ白でも可だが、そのカレーのようなものの色は紫。

なんだ、ラスティションのカレー屋ではプラネテュー的な何かが流行っているのか。紫色だし。

スープみたいな器に盛られた白米と紫色のルーが合わさって何か瘴气的なものまで醸し出し始めている。これは人類に出していいものではないと思うのだが。あ、一人人間じゃなくて女神だ。

「え、これ、食べるの……？」

「女神候補生様は有言実行すらできな「わかったわよ！食べるわよ！」

「イーノ君、そんな料理で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない（冷汗）」

いつもドヤ顔なイーノにまで顔に汗が出ている。そうとうの凶器なのだろう。今回は何回復活するだろうか。

「……いただきます」「」「」

「はむっ」「……」

恐る恐るゲテモノを口に運ぶユニとイーノ。

(どうなるんだか……)

「……バタツ」「……がくっ」

「まあわかってた」

即座に机に倒れた。

カレー（パープル）を退かしてから倒れる辺り余裕はあったのかも
しれない。

【神は言っている、ここで死ぬ定めではないと。】

「だからゲテモノはやめろと言ったのに……。」

イーノはルシエルさんによって簡単に治るが、この私の横で倒れて
いるツインドリルはどうしたのか。

私の手持ちにあるのは簡単な傷薬とその他諸々。

このゲテモノの威力を打ち消すようなものはあいにくと持ち合わせ
ていない。

と、なると……まあいい、教祖にでも連絡してみよう。

【From フロム To ラステーション教会

Title: Re; 依頼連絡

依頼に関しては了解した。

しかし女神候補生ユニの扱いに困っている。私の朝食にユニがつい
てきたのだが、キミズカレーを食べて気絶した。生憎手持ちには簡
単な傷薬しかない。

対処法を求む。】

送信、と。

私の横で倒れるユニは白目まで向いて痙攣し始めている。

最早一種の兵器じゃないか、キミズカレー。

「一方イーノは食う 倒れる 復活 食う 倒れるを繰り返し、順調（？）にキミズカレーの量が減っている。

こいつならどんなゲテモノ料理でも食いきれそうだ。ただしルシエルさんがいるときに限りそうだが。

「あ、もう戻ってきた。暇なのだろうか、ラステイション教会。または女神候補生がかかわっているから最重要事案なのだろうか。後者だと思いたい。」

【Fromラステイション教会 Toフロム

Title: Re; Re; 依頼連絡

ユニは女神候補生さ、そう簡単には死にはしない。例え白目をむいて痙攣していてもね。数分で治ると思うよ。ああそうそう、できれば任務は今日中に終わらせてほしい。激務だというのは承知しているが君は傭兵で僕は依頼者だ。報酬は弾むから、頑張っしてほしい。勿論、ユニの世話もね。】

「……………女神ってすごいな。」

片手間に携帯を弄っていたため、気づけば大盛りカレーは空になりスプーンは空しく器を叩いていた。

「とりあえず教祖がそう言っているのでユニは放って……………そうだ、依頼はこれ連れて行かないといけなかったんだ……………」

「……………はあ、ルシエルさん、私とコレでこれから依頼に行くんで、これで失礼します。」

「ここで死ぬ定めではないと……………そうか。その女神様はいいのか？」
「教祖様が数分放っておけばいいと。じゃ、イーノ。奢りありがと。」

「 ユニを背負って席を立つ。

私は自分でも細見だとは思っているがそれなりに筋肉はある。でなければグレネードライフルとその銃弾を何発も持ち歩くことなんてできはしない。

…しかし、ユニはアサルトライフルを携帯している割には軽い。もしや、何か女神的技術で隠し持っているのではないだろうか…？ まあ、それを気にする場合でもない。

「 ああそうだ、フロム。」

「 ……？ 」

ルシエルさんに声をかけられ、振り向く。

相変わらず不敵な笑みのルシエルさんは私に向かって一言言った。

「 そんな依頼で大丈夫か？ 」

「 ……大丈夫、問題ない。」

私はできる限りのドヤ顔で返した。

0・5 (後書き)

(・・・) ドヤア……

ドヤ顔でゲテモノを食べながら倒れて即座に復活するイーノ君はさぞかしシユールなんだろう……。

ちなみに作者はキミズカレーの元ネタを知りません。だからゲテモノになってしまったが大丈夫か？

次回やっと思っどガルド。どうしようかな……。

0 - 6 (前書き)

ネプテューヌ又っぽいことをあまりやっていないためか中々指が進まない最近……。

この依頼が終わって、ユニギアのタイムンやって(中略)ルウィー行ってキラーマシンで一章だ…遠い、遠すぎる…！何てプロローグだ…！

こんなんじゃあ最初(一章)からクライマックスみたいなふいんき(何故か変換できない)になっってしまう…！どうしよう…。

ミッドガルド。ラストイション（都市）からバイク（魔改造）で30分強ほどの所に存在する魔都市。

この魔都市、という名称は私ぐらいしか使っていない。というか私が考えた。

ラストイション（国）は貿易国家だが、その中ではかなり閉鎖的な都市なのだ。偶にギルドにもミッドガルドからの依頼は来るが、依頼内容がかなり淡泊だ。傭兵としてはわかりやすくいいのだが。私がミッドガルドを魔都市と呼ぶ理由は一つ。【女神が失踪する前からマジエコンヌを信仰している】からだ。

閉鎖的な理由はそこから来るのかもしれないが、ラストイションでマジエコンヌシェアが急激に拡大したのは大体この都市の所為。まあどちらにしろ女神失踪の時点でマジエコンヌにシェアが総食いされても仕方ないとはいえるが。

さて、私とユニがいるのはその魔都市、ミッドガルドの入り口。ラストイションのイメージカラーは黒だが、この町はどちらかと言えば赤黒い。

マジエコンヌのイメージカラーの赤の所為なのだろうか。実はそこまで深く考えてはいないのかもしれない。

私とユニを載せて30分強ほど爆走したバイクはその辺に泊めておき、愛銃を取りだす。

今回は殺傷してはいけないということとさらに特別な弾頭（一発1500credit）を10発ほど持ってきた。

足りなかつたら体術やらユニの銃もあるからどうにでもなるだろう。……で。

「その女神とは思えない無様な姿をさらしているお方」

「わ、ゲホツ、私のことじゃ、ないでしょ、ウグ……」
「だからゲテモノを食べるなど言ったのに……。」

私の横で物凄い腹痛に悩まされているお方が約一名。あんなゲテモノ食べたんだからある意味当然とも思える。

というか女神と人間の違いが本格的に変身以外にないんじゃないか
と思い始めてきた。間違っでないだろう。

「これから殲滅戦が始まりますが邪魔っばいのでここにいてくださ
いませんかお願いいたします」

「そんなケイ張りに棒読みすることないでしょうに……！」

腹を押さえて荒野を転がっている女神候補生様を見ていると何か笑
いがこみあげてくるが何とかこらえる。

流石に撃たれそうだ。

「じゃ、役に立ちそうにないんでこれ借りていきますよー死ぬまで
「死ぬまで付けんあぁあぁ……がくっ」

…大丈夫なんだろうか、ラストेशन(国)は。

街中を歩きながらユニから奪……借りた銃を調べる。

前はアサルトライフルだったが今回は回転式拳銃、つまりはリボル
バーが二丁。結構幅広く使うようだ。

依頼内容を知っているからか実弾は入っていない。付いてくる気満
々だったんだ…それをキミズカレーというゲテモノカレーに……お
つと、顔がにやけていたようだ。

自分でも怪しいとは思いながら、薄暗い街中を歩く。
まだ昼前なのだが、ミッドガルド周辺は何故かいつも薄暗い。何か環境的にヤバイことでもやっているのではないかとラステイション（首都）では噂になっている。が、一切不明らしい。

信仰団体の制圧となると、何か裏路地の廃ビル、というイメージがあるが、ミッドガルドに関してはそうでもない。

元々マジエコン又信仰がラステイション（国）では比較的強かったこともあり、マジエコンのたたき売り、横流し等が割と頻繁に起こっている。

それでもまだ女神がいたころは下火だったが、女神が失踪した三年前からマジエコンたたき売りは政府もスルーし始めて割と合法化されている。

まあ私が生きてきた中で政府が何かまともに仕事しているのを聞いたことがない。

そもそもあらゆる国家的最終権限が女神にある世界で政府だなんだに何の意味があるのか、とも一自機思ったことがある。女神が失踪してからそういったことを想定してのサブメモリのような役割をしていた、と想像していたのだが別にそんなことはなかったようだ。マジエコンスルーしてるし。

さて、メールにこっそり添付されていた（さっきまで気づかなかった）地図や写真を頼りに探してみると、まあ、それなりの企業を装った信仰団体、というよく暴力団か何かにありそうなパターンだ。しかしまあ、1企業（を装った信仰団体）を一人（と荷物一人）で制圧しなければいけないというのだ。

あの教祖には絶対に頭脳戦で勝てそうな気がしない。

…ここまで長々とモノローグで語っておいてなんだが、正直楽な仕事だろう。

問題を挙げるとすれば、死傷者を出さないようにするために手加減す必要があること、あまりグレネードをぶっ放せないこと、制圧とすることは頂点やその周りを何とかする必要がある、ぐらいか。

その頂点はどこにいるのか、今この目のビル（？）にいるのか、など等。

必要以上の器物破損は禁じる、逆に言えば必要ならば多少の器物破損は目をつぶる、ということだ。

その必要範囲内にビル一棟は含まれるのだろうか。

…おや、通話？

『やあ。仕事ははかどっているかい？』

「……暇なんですネ、いや暇なんだから教会って」

『なかなか失礼なこと言ってくれるね。一つ重要なことを言っておこうと思っただけだね。』

「…何ですか、二つの禁則事項を解いてくれるのが一番ですけど」
『そこは変わることはないよ。でもまあ、そうだね。君の目の前にあるビル、それ一棟分ぐらいなら許容範囲かな。ああそうだ、ユニはどうしてるんだい？』

「まだ町の入口で腹押さえて転がってるんじゃないんですか」

『……まあ、いいや。仕事とユニのお守り、頑張っしてほしい。』

通話が切れたようなので、端末を閉じる。

何やら随分とこまめだが、女神がいるからという理由にしておこう。その辺の考察は面倒臭いというか意味がない。

さて、多少許可も貰ったところで、これからやっと依頼を始められる。

どう落としたものか……

「あ！やっと思つけたわよ！！！」

…今、聞きたくない声が聞こえた気がする。

恐る恐る後ろを振り向くと、あっさり回復したのか腹痛を気にする様子もないユニが仁王立ちしていた。

「何だ、生きて……コホン、回復されたのですね女神様」

「白々しいからやめなさいっての……」

「それで、まさか付いてくるとかいいませんよね女神様」

「当然でしょ。ラストイシヨンの女神候補生として、シエア回復の仕事があるんだから。」

「シエアとかどうでもいいし金もらえればいいんだけど」

「何か言つた？」

「イエナンデモアリマセンヨメガミサマ」

「よーし、張り切って行くわよ！」

テンション高めに乗り込み始めたユニを見て私は一つ予感した。

ああ、今回の仕事、ロクに進む気がしない。

0 - 6 (後書き)

次回はやっと依頼遂行。【死人】はでません。ええ、死人は。

でも死人が出ないとフロムっぽくないような…某大統領でもあるまいし…。

まあ、【まさに外道】を目指して失敗すると思うので次回もお楽しみ？

0・7 (前書き)

何か微妙に長い気がする今回。

これでやっと依頼が終わって、次にユニギアタイムン、ルウィー…

…うまく進めればあと3、4話ぐらいでchapter0終わるか

…？終わると…いいな……。

「今このときよりユニの名に置いてこの企業を制圧す、何してんだ
そこのポケエエエ！！」ハブツ！？」

ユニの後頭部に銃弾（リボルバーに入っていた。おそらく実弾ではなくゴム弾かペイント弾）を撃ち込み、気絶させたところを引きずってビルを出す。

この女神様と来たら、特に策も巡らさせず正面突破なんかし始めたのだ。

某吉 家のコピペかというね。女神ってもしかして頭が弱いのだろうか。

ビルの裏側に逃げ込んで、ユニを投げ捨てる。おそらく女神だから数分で目が覚めるだろう。

コレの所為で作戦（まだ考えてなかったけど）が台無しになってしまった。

仕方ない。早速秘蔵のとおっておきグレネード（一発1500cre dit）の使うことにしよう。

いつも通りの一回りロードだが、今回は何が特別性をこのモノログにて説明しよう。

この弾頭は対象との激突の衝撃ですぐに爆発はしない。部分的に液化して粘着し確実に対象を破壊または殺傷を目的としている。

欠点をあげるとするならば【当てなければならぬ】。つまりこんな狙撃なんか考えもしないグレネードライフルで確実に当てなければ効果はほぼない、と言うことだ。

ここまで説明しておいてなんだけど、結局はガムグレネード弾だ。

局所的な破壊または殺傷に適している、だけで知っている人には通じらるう。

建物破壊にも使えるこのガムグレネード弾（一発1500credit）をふんだんに使うつもりだ。

今回持つてきているのは十発。とりあえずこのビルの形状は四角柱各隅に設置して8個。

残り二つの設置場所と、死人を出してはいけないという条件を満たすためにビル内の人間全てを退去させ、その後全員確保する必要がある。

ガムグレネードの起爆は大体7秒。つまり、確保後6秒の間に全て起爆する必要がある。リロードどころか予備の銃ももう一つあるから一回で二つできる。全て撃つのはリロードを含めて8秒と言ったところか。

…だめだ、これじゃあ最後を撃つ前に爆発する。いや、最初に撃つたグレネード付近に撃ちこめば誘爆を狙える。これだ！

そしてもう一つの問題。どうやって退去させるか、だ。私はどうしても撃ちこむのに集中する必要がある。つまり退去は私の目の前で伸びてるこの女神様に頑張ってもらう必要があるのだが……
大丈夫、なのだろうか…？

「はあ……。」

ため息が自らの口から漏れる。自分でも面倒ごとになってしまったと今更ながら後悔している。しかしまあ、どれだけ後悔しようが現実には現実だ。受け止めなければならぬ。

……はあ。

「う、ん……。」

「起きましたか単純女神様」

「誰が単純めが…！、つつう……。」

目覚めたと思つたら後頭部を両手で押さえるユニ。回復はするが、
どうしてもダメージは残るようだ。

さて、これからの内容を理解し、賛同し、行動してくれるかどうか

……

「はあ！？なんでそんなまだるっこしいことしないといけないのよ
！」

「どうしてもそんなまだるっこしいことしなきゃいけないんだから
わかれよ脳筋」

まあわかってた（予知夢）。この女神様が正攻法以外のことを考え
ていないなんてもちろんわかってたさ……。はあ。

「いいですかロクに働かないであろう頭と耳をよく働かせて聞きや
がってくださいね。」

「ねえ、もう突っ込んでいい？」

「却下。まずそもその目的はこの企業の制圧。制圧つつうことは
企業員はピンからキリまで全部確保、まあ捕縛する必要がある。し
かも教祖様は死者は一人も出すなという条件まで出してくれやがっ
たお蔭でただでさえ面倒くさい依頼だというのにこれ以上面倒くさ
くする気ですか貴女様はお前寧ろ妨害しに来てるだる教祖の差し金
でcreditでも私に渡さないように仕向けられた足かせだろ

このツインドリル」

「ちよいちよいちよい待つて待つて待ちなさいってストップストップ！」

ユニに抑えられ、われに返って衝動的にユニの顔面に突きつけていたライフルをしまう。

そうだ、弾頭十発しか持つてきてないんだから無駄に使うわけにもいかない。衝動とは怖いものだ。

「ああ、危ない危ない。貴重な弾頭を無駄使用するところだった。」

「心配するのそっちじゃない！こっち！！」

必死になって自らを指差すユニ。シールだとか思ってしまったはいけないのだろう。

「それで、いい加減理解してくれやがりましたかツインドリル」

「そのツインドリルって呼び名は固定なの……？まあいいわ。何か納得いかないけどその作戦に乗ってあげる。感謝なさい。」

「嫌です」

「……………」

「さて、簡単に説明します。これからこのビル内にあるであろう警報装置をフルに作動させてください。ぶっちゃけて言えば女神様のやることはそれだけです。」

「それだけ！？もっとこっつ銃をばーっ！ってぶっ放したりしないの！？？」

「出来ればとっくにやっとなるわ。さっきも言ったけど教祖様からの条件で死人を出さないようにと言われている。……あ、あと出てきた連中の確保も。」

「…で、あんたがやるのって？」

「グレネードによるビルの破壊。おそらく何らかの記録や貯蔵もあるだろうからその破壊もかねて建物ごと一気に。」

「……結構やること過激なのね」

「得物の都合上。」

「ああ、そう……。じゃあ、行ってみるわ。警報鳴ればって外からでもわかるのよね「勿論」なら、やってやるわ！」

意気揚々とユニは走り去り、私一人残されたところで弾頭や銃のチエック。

とりあえず全部問題なし。ほかの弾頭もすべてすぐに装填できる。

問題なし。

両方の銃を置いて屋上より少し下の隅に狙いをつける。あとは警報が鳴ると同時に撃つだけ。

……そういえば自信满满だったが…警報の管制室とか知っているわけがないし……どうするつもりなんだろうか。

そんなこんなで待ち続けて十分弱。

ジリリリリ、と危機感を煽るような音が響きだした。

その音を聞いてすぐに置いてあるライフル二つを発砲。即座に次弾を装填してビルの壁を上りながら八角の内下の二つに発砲。上りながら次弾装填。

屋上まで登って飛び越えながら残りの隅二つに発砲。ここまで目測で5秒。

空中で装填して狙うは入口の方の二隅。これはそこまで狙いをつけずに撃つ。

そしてリロード。1秒1秒がここまで長く感じるのは命の危機ぐら
いだ。

最後の二発装填、狙うは今撃った上の二隅付近。
上手く近くにあてれば誘爆できる……ッ！

放った弾頭はとてもスローモーションで飛んで行き、先ほど撃った
弾頭の数Cm横に着弾。それと同時に奥の弾頭が爆発。
続いて下の方も爆発し始める。

スローモーションの視点が解除され、重力に縛られ下に落下する。
落下地点近くには多数の人が。

弾頭はもうない。このまま落ちるだけなのだが
まだ、手はある。

ライフルを下に投げ捨て、ユニから奪った借りたリボルバー二挺を下
に連射。実弾が入っていないことは確認済みなため下に降り注ぐの
はゴム弾か何か。

そして、リボルバーは意外に反動が大きい、反動が大きいというこ
とは、それすなわち落下の勢いを弱めることができるということ。
しかしリボルバーの弾数は各6発。計12発の発砲でどこまで勢い
を弱められるか。致死圏は既に脱出済み。あとは受け身の問題だ。

地上約5m、リボルバー連射の反動でまっすぐ下に向いていた体が
傾き、足が地に向くようになりその直後、着地。

リボルバー弾数、0。衝撃、それなり。戦闘続行、弾切れにより不
可。

一応周りに銃を向けて牽制しておくが、これの弾数を知っていれば
すぐにブラフだとはバレるだろうし……。

ユニはどこに行ったんだか……

「フロム！」

ん、この声はユニ。

振り向くと、あるうことか変身なんてしやがった状態のユニがこちらに走ってきた。

デカい銃とツインドリルが（いろんな意味で）眩しい。

「フロム。あんたの作戦通り出てきた連中は全員無力化したわ。一応殺傷しない弾薬つてのも私も持ってたからね。」

「……ああ、それはよかった。」

とりあえず突っ込むのはもう野暮だと思いついてスルーして教祖に連絡を取ることにする。メールだとラグもあるだろうし通話で。

『やあ、フロム君。依頼は順調かい？』

「まさか君付けで呼ばれるとは思っていませんでしたよド畜生」

『他にいいのが思いつかなくてね。よければちゃん付けで呼ぼうかい？』

「謹んで遠慮します。それで教祖様、女神様が変身までしてくれてターゲットの連中を確保してくれましたが？」

「それ嫌味？ねえ嫌味よねそれって。」

『そうか。それは御手柄だねユニ。まあ女神化を使ってしまったのはあまり褒められたことではないが……。これから回収班を向かわせるよ。ラストイションに戻ったら昼食でも取って教会に来てほしい。ああフロム、報酬金は君の口座に振り込んでおくよ。決してハツキングしたわけではないから安心してほしい。じゃあ、また。』

…最後物凄く不穏な言葉が聞こえたが気にしないでおう。

必要なところは注意深く、深く聞いてはいけないところはある限りスルー。処世術の基本である。

その後数分で大量（数十人）の回収班がなだれ込み、連中を輸送して行った。

私とユニは回収班に後を任せ、ラストেশションに帰ることにした。私のバイク、VOB（ヴァリアブルオーガブースターの略。命名私）はこの町に来た時と同じように佇んでいた。まあバイクが一人で動き出すなんて…ゲームギョウ界ならありえそうだ。

ミッドガルドからラストেশションに戻る最中、バイクで30分強かかる道のりを駆けるVOB。時速200km近いスピードの中、行きの時よりユニの私にしがみつく力が強いような気がした。

0 - 7 (後書き)

あとがきの前に一つ言っておくことがある。

この小説は泥臭さをウリ(?)にしていたような気がするが別にそんなことはなかった。何かフロムさんビルの壁駆けあがっちゃってるし跳んじゃったし拳銃リボルバーの反動で着地補助しちゃうし。知ってるかい...? リボルバーって、そこまで反動があるわけじゃないんだぜ...。

前話の複線回収? いいえ、単なる思い付きです。リボルバー12発撃ち込んだぐらいでそんな体勢崩れるようなものなのか... そんなことは知りません。何かよくわからないけどゲームギョウ界だからいいよね! ね! ね! ?

感想で銃器に関するマジレスはどう受け答えればいいか本気でわからないのでできるだけやめてください。本当にわか知識だけでやってるんで。エンドオブエタニティーとかイメージしてるんで。

0・8 (前書き)

ユニギアタイムン編突入。といつても2〜3話で終わる【はず】だ
けど。

そろそろ終わりが見えてきたchapter0。長いなーchap
ter0……。

現在時刻、午後1時27分。ラストイション到着。

駐輪場にダイナミック駐輪後、私たちがいるのは教会……ではなく、ラストイション中層部（Nono壱番屋やラストイション入口等最下層部に存在）に建っている居酒屋。またリントさんか

「はいつうわけで、フロムのギルド卒業を祝ってかんぱーい」

「……かんぱーい」「」

「かんぱーい……じゃねえよ!!」

机を大きくたたき主張する。

リントさんに「折角だからおまえもこい！依頼明けだろ？」とか言われてホイホイついてきた結果がこれだ。てかパツと見十数人いるぞ！ギルドそんな人いるところ見たことないし。

「なんだフロム。主賓が騒がしくしてちや酒も楽しめないだろ？」

「勝手に主賓にすんなあと何でギルド卒業させられるんだよ！私の稼ぎ口だぞ貴重な！」

「教会に雇われたんだろ？教会の仕事つつってハードなのは目に見えてっからな。ギルドにそう顔もだせなくなるんだろ？」

「それは依頼次第ですが……つか昼間っから酒飲んでんなよオッサン共！」

「そうかてえこと言うなよ。俺らだって仕事開けだ。」

「知らないのばっかだと思っただらやっぱり防衛隊か、あんたらもう何でもいいから飲みたいだけだろ！」

「……たりめえよお!」「」

「意気揚々と肯定すんじゃないやねえよオッサン共オ!!」

一通り突っ込んだところで少し呼吸を整える。
このオッサン共は私はともかくユニをどうするつもりなんだろうか。
なんかもう酔いつぶれかけてるし。
それでいいのか女神候補生。

「いちばん、ゆに！まだまだのむわよお〜！」

「いよッ、女神様！」

「言い飲みっぷりじゃねえか女神様！」

「ほら、あの嬢ちゃんもあんな感じだし」

「どうすんだよユニそもそも酒飲める年齢かも怪しいのにあんな酔わせて」

「女神様つてのは見た目と年齢は釣り合わねえもんだろ？」

「知りませんがね…ってかどう收拾つげんだこの惨状」

私とリントさんの目の前ではオッサン共に囲まれて一升瓶一気飲みするユニの姿が。

急性アル中で死ぬ女神とか笑い話にもならなそうだ。

ちなみに私が飲んでいるのはコジマジューズ。コジマさんとやらが開発したジューズなのだろう。綺麗な緑色だ。青汁ではない。

「…そういえばリントさん、仕事明けって言ってましたね。異常種でも出ました？」

「あゝ……やっかいな感じでな。フェンリルタイプ、ドルフィンタイプ、ドラゴンタイプ全部きやがってな。まあなんとか追い返せたわけだが…。」

「毎度毎度だけど防衛隊の死守力には脱帽です。それで、被害は？」

「おお、異常種三体来た割には死者は7人だ。どいつも若い奴等だねえ。異常種の怖さつてのを全くわかってないやつらだったよ。」

「まあ、先走らない新兵というのは貴重でしょうけどね」

「俺はな、いつも新米連中にはこう言ってたんだ。【死ぬな、死にそうになったら逃げる、そんで隠れる。運が良ければ隙をついてぶっ殺せ】ってな。」

「防衛部隊が逃げてどうすんだか。」

「なあーに、ベテランにしかできない往なし方ってのがあんだよ。」

「まあ、私にできるのは制圧戦ぐらいなもので。そういった細かいことは任せました、ベテランさん。」

「じゃあ女神様のご機嫌は任せたまよ、エース様。」

……結局、あいつら酒しか飲んでなかったよね、いや飲み会って居酒屋としては間違ってるじゃないし仕事明けって点でも間違ってるじゃないかもしれないけどさ……。

ほら、ユニって問題あるし。この子何歳なのかわかんないし。私より年下っぽいけど実は大幅に年上ってオチもあるかもしれないけど。

まあどうにも言う意味もなく、完全に酔いつぶれたユニを背負うことになった私。不憫だなあ私。

しかし朝も今もコレを背負うことになるとは……。手のかかる雇い主だこと。

「ん……お姉ちゃん……。」

背中 of 女神様は姉の夢を見ているようだ。これの姉をしつつ女神業務（詳しいことは知らないが）とは、女神ノワールも随分と苦労人だったのかもしれない。女神ながら少し同情した。

「やあフロム。依頼は無事完遂できたみたいだね。器物破損も想定内、死者も無。何故ユニを背負っているのかは聞かないでおくよ。」
「それは実に助かりますいやほんと。」

「ユニは適当に寝かせておいてほしい。これからまた仕事の依頼があるからね。」

「そうですか……っと。」

ユニを椅子（ソファア）に寝かせ、教祖に向きなおす。

正直嫌な予感しかしない。

「失礼なことを思われている気がするが、まあそこはいいだろう。どうしても今はなさなければならなくてね。」

「そこまで重要とはね。それも一介の傭兵に？」

「今はユニの御付の傭兵だろう？」

「……そうでした。」

「……プラネテューヌの女神候補生ネプギアが、もう一度この国に来る。彼女、ネプギアは三年前女神と共にギョウカイ墓場に行ったのだがその中での唯一の生き残り……というか生還者でね。それでユニは彼女にとってもないライバル意識を燃やしているわけだが……ユニでは彼女には勝てないだろう。」

「これはまた随分と弱気な発言で。」

「事實は受け止めなければならぬだろう？まあでも、ユニがそんなことで諦めるとは思っていない。十中八九ネプギアに決闘を求めらるだろうね。僕としては面倒事は起こさないでほしいのだがまあそこは仕方ない。舞台は僕がセッティングするよ。」

「……で？私に何をしろと？」

「決闘の邪魔をするものを排除してほしい。秘密裏にね。」

「また私が苦手なものを…」

「別にグレネードライフルしか持っていない、というわけでもないのだろう?」

「正確には合っているけど間違っているというか…まあそれでいいでしょう。」

「じゃあ、明朝メールを送っておくよ。ユニとネプギアの決闘。結果は見えているが過程を見届けておいてほし」「おねえちゃん…それ、みずぎぎゃくだよ……」「……」「……」

「大丈夫なのかこんなので。」

「まあ、結果は敗北とわかりきっているから……ね……」

…こんな冷めた目でユニを見つめる教祖は初めて見た。

まあ、不安ではあるのだが……何か予感がするのも事実。明日は警戒しておこう。

日記追記：口座を見てみたら本当に50000credit振り込まれていた。荒んだ心に一筋の光明。それを感じるのやはりこつした報酬なのだろう。うん。

0 - 8 (後書き)

ネプギアと対面はあくまでchapter1で。chapter0
ではありません。前にあつたるとか言わないで。
もうすぐだ、もうすぐ(chapter0が)終わる…!

フロムExフィニッシュに使う武器はフロムの銃が変形した物。
物理法則なんてなかった。

0・9 (前書き)

ユニギアタイムン編と前回言ったな。すまん、あれは若干嘘だった。詳しくは本文で。すぐにわかるよ、うん。

「じじは…夢？意識がはつきりしている夢とは珍しい…。」

「…見たことない景色…あれは…女神…？」

「女神が何故こんなところに

…そもそも、じじは…？」

「ミツケタ」

「ッ！？」

「ヤットミツケタゾ…」

オレノハンシンー……！」

「やあフロム。ここに来たということは、メールは見えていないようだね。」

「……あ。」

教会に着くや否や指摘され、思い出した。昨日メールをするとか言っていた。悪夢の所為ですっかり忘れていた……。

【Fromラスティション教会 Topフロム
Title：依頼連絡

おはよう。今日の依頼を連絡するよ。

昨日も言ったけど今日の依頼はユニとネプギアの決闘の邪魔をする連中の排除だ。戦力は未知数だが確定している分だけ画像を添付しておくよ。

場所は旧リゾート区、セプトンリゾート。性質上狙撃が最も効果的だからね。効果的な狙撃の場所も地図付きで添付しておくよ。出来る限り早く行くといい。

今回の依頼の報酬は45000creditだ。9割はユニの小遣いだから気にする必要はないよ。

じゃあ、頑張つて。」

添付された画像には、数か所 がついた地図と、写真が二つ。

片方にはセーター姿の少女、もう片方は見るからにサイズが合っていないコート姿の少女、か……。

どこかで見たことがある気がするが…まああくまで気がするだけだしいいか。

「ああ、確かにこれは急がなければならぬようだ。」

「わかつてくれてよかった。もしユニとネプギアの決闘が邪魔されでもしたらただでさえ劣等感の塊ノユニが塞ぎ込んでしまうよ。そうなればラスティションも終わってしまいかねないからね。」

「傭兵に国の命運背負わせんなよ……」

「すまないね。ユニに目をつけられたのを不運だと思って諦めてほしい。」

「はあ……。」

とぼとぼとラスティション最下層に向かい、駐輪場にダイナミック駐輪しておいたVOBを起動させる。

無心に走り出し、向かうは旧リゾート区。流石に急ぐ必要があるだろう。

途中色々挽いた気がするがまあ気にすることでもないだろう。

……リゾート区が見えた。

崖を飛び出し、見えた広そうなところに狙いを定め、VOBを乗り捨てる。

爆発した様子はないので適当に軌道修正し建物に着地、足が痛い。端末から地図をだし、位置を確認する。予定地より少し離れた建物だったようだが……。

……どうやって移動しよう。少し前のアニメで見た移動方法……やってみるか。

視点【フロム】 【アイエフ】

ラストイシヨンの教祖、神宮寺ケイとの取引で色々集めることになつてしまい、拳句その途中でラストイシヨンの女神候補生ユニに遭遇してネプギアと決闘まで始めだした。

その間、私とコンパは暇ではあるんだけど……

「ねえ、コンパ。」

「どうしたですあいちゃん？」

「気付いて……ないでしょうね、その様子じゃあ。」

「……？」

「何かいるわよ。多分異常種。こっちを見てる。」

「ふえっ！？も、もんすたーさんですかあ！？」

「さあ………？」

モンスターとは違う、何だろう……観察されているような……？
少なくとも、私かコンパを見ているっていうのは確実だけど……

「ふえええ〜ううう………」

「あんたは、狙われてるかもしれないのにそんな気の抜け……コンパ！伏せて！」

「はうっ！？あわわわ！」

コンパの目の前に出したカタールが弾かれる。

カタールを出さなきゃコンパは……いや、こんなことを考えたくはない。

問題は……撃った奴。

「私のコンパを、傷つけさせはしないわ！」

「あ、あいちゃん！？」

コンパの敵は、私の敵……！

〈視点【アイエフ】 【フロム】〉

「気付かれた…！？急ぎ過ぎたか…！」

レールガンをグレネードライフルに変形させ、息をひそめる。

今の一発で場所を特定される…ありえないことじゃないけど、こっちに注目が来たのなら結果オーライだ。

久々の対人戦だ。笑いながらとまではいかななくても、楽しくヤロウ。そうでもなければ、やってられない。

「殺し合いにマナーも何もないけどさ、楽しく殺ろうじゃないかなあ！」

このとき、今日の夢の化け物が、私のどこかで目覚めたのかもしれない。

何故って、このときの私は……
笑っていたから。

0 - 9 (後書き)

ユニギアタイマンだと思ったか？

フロムVSアイコンだよ！！

ついにガチバトルになって火薬少女ふるむ マギカにならないか若干不安だったりする。というかもうなってる。

……そういえば、この時点って日本一いたっけ……？
いたら……まあ、なんとか辻褄合わせよう。(未来の自分に無茶振り)

次回……丸ごと戦闘予定！予定は投げ捨てるもの！

0 - 10 (前書き)

ガチバトルで二話ぐらい使う予定だったんだけど…あれ、あれえ〜
……？

まあ全てはこの時点で既に日本一がいるということに前話上げた時点では忘れていたという致命的ミスなんですけどね… H A H A H A。

「……………」

リゾート地の建物の上、私は仰向けに寝転がりながらミサイルランチャーを携えている。

傍から見ればそこはかたなくシユールだがこれでも私は命がけた。

ユニとネプギアの決闘の邪魔をされれば、国がヤバいというレベルとまで教祖に釘を刺されてしまった。

邪魔者二人の生死は問われていないが、まあ殺しても特に問題はな
いだろう。精神的に幼そうなユニが何を言うかはわからない、が。
ともかく、初弾を防がれて位置がばれてしまったかもしれない、と
いうのが一番の不安要素でユニとネプギアからは興味を逸らすこと
ができた、というのが一番の安心要素だろう。
さて、まずはどう動いたものか……………」

「角度から見て、こつちから来たはずなんだけど……………」

来た。プランはいくつかあるが、まあ好きにやろう。

私がしくじれば私が死んでついでにユニも死んでラストイションが
終わる。

…………… おお、怖い怖い。

「あ、あいちゃん。待つてくださいですよ〜！」

「コンパ…今あたしたちは命狙われてるのよ！？ちったあ真面目に
やりなさいっての!」

「はうづう〜……………」

「……まさか、もう移動していた、とかね……。」「
さて、と……。」

とりあえず連中が見えるところまで移動し、ミサイルを構える。
こちらは基本的に小回りが利かない。大多数には強いが少人数（但し一人を除く）に弱い。そういう大火力型。言わば大鑑巨砲主義。
出来ればさっきのレールガンで片方は削っておきたかったけど、失敗に終わった以上グダグダ言う必要もない。隙を見せたら発射。着弾までおそらく6秒。反応するには十分だが……。

「……いないみたいね。もう移動したかもしれないし、別方向探すわよ。ネプギアの邪魔はさせない。」

「ま、待つてくださいですあいちゃん……！」

照準は既に付いている、熱源追尾機能正常、仕留める……！

発射した直後砲身と身を隠す。数えて4秒後、爆発音が鳴り響く。
ユニとネプギアが驚いて決闘中断なんてやらかさなければいいけど……。

撃ち込んだのは4発。普通なら即死通り越して跡形も残らないが女神狩りなんて考える連中だ。ミサイルでも無傷なんて出鱈目があるかもしれない。

私は正攻法は得意だが銃撃戦オンリーなんだけどねえ……。爆煙が晴れ、様子をうかがう……。

うわ、無傷かよ……出鱈目あったし。最悪だ……

「……そこにいたのね。出てきなさい、マジエコノヌの手先！」

何かいつの間にかマジエコン又扱いされてるし。まあやっつてること
そこまで変わらない気もするけどさ。これでもれっきとしたラスト
イシヨン市民なんだけどねえ。

とりあえずもう居場所は完全に特定されているわけだし、素直に立
ち上がる。

私の姿を見た二人は、驚愕の表情を浮かべている。

「下っ端じゃないってのはわかってたけど、こんな女の子が、ねえ
……。」

「見かけは同年代じゃないかね。」

「え、えーっと……そのひとつ！危ないから降りてきたほうがい
いですよー！」

「……。」

「ともかく、ネブギアじゃなくて私たちが攻撃した理由は何なのか
聞きたいところだけ。」

「冥途の土産に相応しい理由でもないさ。ただ邪魔だったからだけ。」

「

「……何、ただの殺人鬼？」

「これから死ぬ相手にならどう思われても、構いやしない！」

ミサイルをグレネードランチャーに変形させ、撃ちこむ。

即座に16連装ミサイルを変形、追加で撃ちこむ。熱源追尾だから
当たってほしい。

あと残ってるのは冷凍ガス放射器、レールガン3発、グレネードラ
ンチャー、スナイパーキャノン……。

近距離で使えそうなのなんてガス放射器しかない。あの教祖、私が
細かい戦闘が苦手なの知ってるくせにこんなことやらせやがって……！

「げほ、う、つく…大丈夫、コンパ…!？」

「あううう…だ、大丈夫ですう、今回復するですう…。」

セーター少女（コンパって名前なのだろうか。）が手をかざすと、二人の傷を見るからに回復し始めた。

…ああ、なるほど。回復魔法か…だったら…。

ランチャーにスモークグレネードを装填、撃ち込んだ後にレールガンに変形させる。私が構えると同時にスモークグレネードが爆発し、1フロアほどが煙に包まれる。

「煙幕…!? 逃げる気!？」

（そんなつもりはないけどね・・・）

「あ、あいちゃん…どこですか…?？」

「コンパ! とりあえず動き回りなさい!」

あれだけ必死に対策を練っているようだが言ってしまうえば私のレールガンはサーモスコープなわけで。

声だろうと伏せようと一切関係はないものだったりする。別に何か予感があったとかそういうわけではない。元からサーモスコープだ。レールガンは狙撃銃だからね。

回復をしていたのはセーター少女。ついでに胸が大きい方…。

「ところがぎつちゃん!」

「へ?ツ…!？」

突然、背中に衝撃が走り、私の体が前方、空中に飛ばされる。建物自体がそこまで高くないため大した被害はなかったが、高度の優位

が消えた。それ以前に…

「新手、か……。」

「アイエフ！コンパ！この正義のヒーロー日本一が来たからにはもう安心よ！」

……あれ。何だろう。こいつ馬鹿っぽい。

何か私をあそこから叩き落としただけで満足しているように見える。十分効果あつたけどさ。

「日本一！」「日本一さんですう！」

背後から歓喜の声。スモークもあつさり晴れてしまったようだ。

さあどうする私。前門にはただだつ広いフロアと逃げ道があるが二人後門には馬鹿と逃げ道のない建物……

ああもう、よくわかんないときばっかり通信送ってくる癖に私のピッチはスルーかハスキー教祖は…！

「さあ、て。もう逃げられないわよ？あんた一人で三人を同時に相手、できる？」

「…無理だね。私は対多数は得意だが一人でない少数相手は苦手なんだ。」

「意外に諦めがいいじゃない。」

「そうだね。君たち全員を殺すのは諦めた。」

「なら、神妙にお縄をちょうだいだー！」

「……一つ聞こう。」

「…何よ。」

「君、先ほど持っていた武器はどこに行ったんだ？」

「……袖の中よ。」

「そうかい……。」

「何を企んでるか知らないけど、あなたの頼みの綱はあの銃みたいだし。あなたに手はないわ。」

「さて、どうかな？」

「口が減らないわね。日本一、押さえつけて。」

「よっしゃー！」

先ほど私を蹴った馬鹿（日本一って名前のようだ）が私後ろから私を羽交い絞めにする。ただでさえ後ろ手の状態だったので私は実質身動きはできない。

「これ以上白を切るつもりなら、最悪命の保障ができなくなるんだけど。」

「私は殺しているんだ。殺されもするよ。」

「……少し、痛い目にあってもらうわよ。」

「誰が、何だろうね……？」

「あなたに決まってるでしょうが！日本一、少し離して。」

「……………」

「ちよつと、日本一？」

「日本一さん……？」

二人が後ろの日本一の反応に顔を顰める。

私が腕を少し引くと、後ろからドタツと言う音が聞こえた。

目を白くした二人を余所に立ち上がり、腕に付けたブレードの電源を切る。

血が付かないというのはいいものだ。

「日本一さん！日本一さん……！」

「さっきヒントまであげたのにねえ。何故【相手も同じ方法で武器

を隠していると考えなかったのか】。」

「こ、んのお!」

激昂したっぽいコート少女（そういえばこいつだけ名前わからない）が袖からカタールをだし、私に斬りかかる。

まあ激昂した攻撃の性か、やたら単調で避けやすい。

コンパ（だっけ？）の回復魔法が終わる前に何とか逃げ出したいが、欲を言えば銃を回収したい。

しかし私のレーザーブレードは稼働時間がすこぶる悪い。先ほど5秒ほど展開したがあとできて25秒程度。要所要所でしか使えないという緊急用。こんなの使いたくないんだけどねえ。

「この、この…!」

「近づけば勝てると思ったのならあなたは相当単純という結果になる。」

大きく私にカタールを振り、無理に振った所為で体勢が一瞬崩れる。そこに軽く足をかければ…。

「きゃあっ!?!」

「近距離が得意な奴が下手な狙撃をして敵を誘い込み、得意分野で処理するなんてトラップは意外にあるんだよ。覚えておきな。」

傍らに落ちていた銃を拾い、VOBのある方角（多分だけど）に向かって走りだす。

追ってくる様子は無いため、せめてVOBを回収してユニとネプギアの結末を何とか知りたいものだが。

……今頃通話か、あの腹グロ教祖…

「やあフロム。調子はどうだい？」

「戦闘中かもしれないのに空気が読めないな教祖様。」

「それはすまなかった。」

「白々しい…依頼だが、失敗かもしれない。」

「ほう。君は自分の実力にかなりの自信を持っていると思っていたが。」

「どんな根拠があつて…。」

「まあそれはいいじゃないか。ともかく、失敗ということは、ユニとネプギアの決闘が邪魔されてしまった、と？」

「過去形じゃない、未来形だ。さっきまで時間を稼いだが新手が現れて敗走中だ。」

「ふむ……。ならば、ユニが帰って来た後合否がわかるということだね。その時間を稼いでいる間に決闘が終わったということをお祈りしてほしい。帰還してくれ。」

「……ッ、了解……」

通話を切ると、ふとため息が漏れる。

敗走と言つのは、見逃されることの次に情けない負け方だ。

……どちらがよかったと問われれば、そんなものは答えられはしない。

でも私は傭兵だ。恥をかけば生き残れるのならそれを選び、泥にまみれて生きる、という業界人間みたいな生き様が傭兵にはふさわしい、と私は思っている。

無様に置かれていたVOBを立たせ、起動させて跨る。

……決闘、終わっていてくれ。私にはそう願いながらVOBを走らせることができることはなかった。

0 - 10 (後書き)

意外にあっけなくユニギアタイムン編(?)が終わり、そろそろあと2、3話ぐらいで……終わらないだろうなあ。予告詐欺に定評のある私だし。

0 - 1 1 (前書き)

ついにchapter 0 終了のお知らせ。

え？ルウイー？キラーマシン？ナンノコトヤラサツパリ

大丈夫、ルウイーにはいく……かな？

ラストেশヨンに到着。ダイナミック駐輪をする気にもならなかったので普通に駐輪して、とぼとぼと歩き、エレベーターに乗る。もう昼だというのに、エレベーターには人はいない。だからか、ついため息が漏れる。

私はいぶメンタルが弱かったのかもしれない。メンタルの弱い傭兵は長生きしないのだけど、ね…。

「……………ユニ、大丈夫かね……………」

私が今口に出すほど心配することが、まさかユニのこととは。

まあ、私が失敗していれば、何かいろいろあつて国がヤバいとすら言われているんだ。多少案じたつてバチが当たるわけでもない。

……………自分にすらそんな言い訳をするところで、私も末期なのかね。そんなことを考えながら鈍重な足取りで教会へ歩いて行く。35000 creditの赤字、依頼の失敗。最悪国の崩壊。…最悪だ。

そんな暗い気分教会についてしまった。

…あの教祖様相手に何を言い、何を言われればいいのだからね。

「やあ。無様な敗残兵。新手は手ごわかったかい？」

「…言ってくれる。まあ否定はしない。敗走したのは確かだしな。」

「まあ、今ユニから連絡があつたけどどうやら君の苦労は無駄じゃなかったようだよ。依頼は成功だ。」

「……………」

「納得がいかない、というような顔だね。傭兵は依頼と報酬にしか興味がない、という風に僕は認識していたのだけど。」

「そうだが、依頼内容は排除だ。私は時間稼ぎしかできていない。「君も頭が固いね。僕の目的であるユニとネプギアの決闘妨害阻止は成功したじゃないか。なら、依頼は成功だろう?」

「…そうだが、私は敗走している。一人も仕留められていないからな。そのあたりはどうするのだ?」

「……。そうだね。もし彼女らが再び障害となるならば本当に消す必要があるね。それも【暗殺】という形で。」

「一つ、聞きたい。」

「何かな?」

「あいつらは、ネプギアとユニの決闘にどう関与している?あいつらはネプギアとどう関係しているんだ?」

「……彼女らはただの邪魔者。君が知る必要があるのはそれだけさ。」

「…そうかい。」

私はケイに背を向け、歩き出す。正直、依頼報酬に納得はできていない。……依頼主が成功と取れば成功…ということなのだ。これに異論を唱えることなど、できやしない。

扉を開けると、何か黒いものが飛び込み、私に激突。

そこまで重くない衝撃だが私もそこまで重くないのでそのまま倒れ込んだ。

「い、つつう………きよーそさまー」

「何だい?君の間延び声はあまり心地よく聞くに値しないね。」

「毒舌聞いている暇ねえんだよ。コレどうすんの?」

そう言いながら私は覆いかぶさる黒い物体を指差す。

「コレ……？って、ユニじゃないか。」

そう、さっきまでネプギアと死闘を繰り広げていた(らしい)ユニ。戻ってくるのが徒歩にしては早い。

…私が遅かったのかもしれないな。

「ねえ………」

「……？」「ユニ……？」

私に覆いかぶさり、うつむきながらつぶやくユニ。何やら凹んでいる様子。負けたのだろうか。

「フロム、あんたはさ、負けることってどう思っ？」

「…はい？」

「負けるってさ、嫌よね。自分が相手より劣っているってことが明確になっさ。」

「………」

「私、お姉ちゃんの妹だから、恥ずかしくないように振る舞って、強くないといけないのに…負けちゃったよ………！」

「………」

「……。」

とっさに教祖に対し「お前の女神だろ、何とかしろ」とジェスチャーを送る。

すると教祖はやれやれ、と言った風に首を振る。おそらく「自分で何とかしてくれ」だろう。薄情な教祖だ。

とりあえず、ユニの頭をなでる。せめて退いてほしいのだが…重くはないが教会の床で女神様と抱き合うなんてことは正直ゴメンだ。

割と本気で。

「この子供女神……」

「な、何よ！あんに何が……！」

「私かわからないと思ったから自分語りしたんだろうに。」

「……。」

「あんたみたいに高潔で行動一つ一つに責任重大な女神様のことなんてわからないしわかりたくもない。説教できる身分でもないし、したくもない。だから少しだけ言わせてもらいます。」

「言ってみなさいよ……。」

「誰かに全面的に勝っている、劣っているなんてことは絶対にありえない。勝っている部分は必ずある。問題はその勝っているところで劣っているところを如何にしてフォローするか。何でもできるように見える奴はフォローの仕方が上手いだけだ。フォローの仕方次第で誰でもできるんだよ。できないのはやり方が下手なだけ。」

「……。」

「……とにかく退いてくださりませんか女神様。」

「あ、ごめん……。」

涙目で私の上からユニが退く。

まさか教会で寝転がることになるとは……と自嘲しながら起き上り、埃を払う。

「はあ、それで教祖様？私はもう帰っていいんですよね？」

「構わないよ。ユニも連れて行くといい。僕は慰める等そういうのが苦手だね。師匠の君に任せるよ。」

「追加料金」

「ユニの小遣いを削るよ。」

「了解。」

「……。」

「じゃ、失礼しました…。」
「行ってくるわ…。」

ユニと共に教会を出、昼ちよつと過ぎのラスティションを歩く。
真上に上がった太陽がまぶしく、若干暑い。

「ねえ、フロム…。」

「なんでしょうか女神様」

「何で、私やケイには敬語、使ってるの？」

「女神なんて国の宝物にー市民の私がタメ口なんて聞けるわけない
でしょうに。」

「あんたは、私の師匠でしょ。」

「傭兵です。」

「……。」

「……。」

「フロム。女神とか、教会に、恨みとかあるの…？」

「…説明義務はないんで。」

「じゃあ義務付けるわ。」

「……ド畜生、帰ったら教えますよ。」

「はあ……。」

何やら、ユニに本格的に懐かれたようで、妙に聞かれてくる。
どういふことなんだろうか。面倒なことになったなあ……。

く視点【フロム】 【?????】く

そこは、荒廃という言葉がよく似合う場所だった。

壊れたゲーム機のような残骸ばかりで構成された景色、視界にとこ
ろどころ入る謎のチューブ。これを見ていることに退屈以外の感情
を感じることはなかった。

ただ戦いたい。ただ殺したい。ただ殺されたい。その衝動は自分の
中で激しく盛る。自らの愛斧をふと見ると、飾られた髑髏が自分を
煽っているように見えた。【コロセ、コロセ、コロセ】と。

その衝動に耐えるという考えは自分は持つておらず、衝動は自らを
支配していた。

いや、最初から自分の中には殺意の衝動しか存在していなかったの
だろう。

…今、目の前には四人の女が存在する。マジックの奴には殺すなど
言われているが、衝動が臍腑から湧き上がる。女神、女神、女神！
正直自分には女神だろうが人間だろうがなんでもいい。殺せば、
戦えればいい。

「よお……。てめえ以外の女神は全員屈服してるぜ…?」

「く、ツ……。私は、絶対に諦めないわ…きっと、あの子が助けに
来てくれる…!」

「そう願ってるのはてめえだけだ。他の奴等を見てみるよ…。」

「…ノワール、ブラン、ベール……。」

「女神が犯罪神に平伏すなんぞ、とんだ笑い話だよなあ？俺はてめ
えらみたいなのを殺せば十分なんだがな…。」

「どうかしらね…。すぐにあの子が、あんたを逆に殺すんじゃない

「……？」

「楽しみだ…アア楽シミダアオイ！俺ヲ殺スンダ、殺シ合イダ！」

「ジャツジ。」

「……チツ、何だブレイヴよお。」

ブレイヴの所為で殺る気も削がれちまった……。

つたく、この正義バカはよお。

「…女神の屈服は順調なようだな、ジャツジ。」

「俺は殺せねえだけでやってらんねえよ。」

「そういうな。マジックの考えだ。我々の得になるのは確かだろう。」

「ケツ、俺の得になるんならさっさとこいつらを殺させろってんだ。」

「あまり癪癢を起すな。今女神を殺せば侵略が困難になるだろう。」

「チツ……そうだ、おいブレイヴ。俺のハンシンはどうした。」

「お前の中途半端な説明では探せるものも探せなくなる。」

「俺が行きゃあ一発でわかるんだがな。」

「お前には墓守の仕事があるだろう。」

「勝手に……死人にしないでちょうだい……」

「黙ってる……！」

「ッ、があ……！？」

「ジャツジ。マジックに殺すなど言われているだろう。」

「殺しはしねえ。ただ、俺はつまらねえんだよ……！」

「ハンシンとやらは探しておく。トリックには期待できないがな……。

では、失礼する。」

「早くコイよ…女神…ハンシン……！俺と、殺すためによつ……！」

0 - 111 (後書き)

〈次回予告〉

女神が失踪して三年。その三年という期間はあまりにも永く、大きい。

その現実には少女が絶望するのは、いわば必然だった。

世界は、あまりにも非情。それを理解するには、少女は幼すぎたのかもしれない。

次回、超次元ゲームネプテューヌmk2+。chapter1【希望を誘う夜見の道】

ネプギア「アイエフさん、コンパさん、日本一さん…みんながいてくれるから、私は戦える！もう何も怖くない…！」

日本一「何だろう、台詞を取られた気分……」

1・0（前書き）

ついに第一章。ここからがスタート（キリッ）。

原作本編は基本的に投げ捨てるのでその辺注意を。

この1・0の時点で投げ捨てておりますので。マジで。

あとジャッジさんがやけにおとなしいとか突っ込んだ人はジャッジさんの暇潰し鉄会ってくださいね。

「……よう。」

…またお前が黒いの。ラステーションの兵器か何かかお前は。黒いし。

「ハッ、そんな生ぬるいもんじゃねえよ。お前と同じ殺人狂さ。」

お前みたいなデカブツに同類扱いされるとは心外だな。私はいつから殺人兵器になったんだ。

「最初からだ。そう、お前は俺と同じようにただ殺すためだけに存在するんだよ。」

殺すのが目的とは、随分な気狂い様だな。私は殺しはするが生きるために殺してるわけ。弱肉強食つつう自然の摂理に従ってるだけだよ。

「なら何故ほかの手段を取らない？」

……。

「生きるためには、進んで殺す必要もない。世界にはさまざまに仕事って奴があるんだろ？」

「だがお前はそこで殺すことを選んだんだ。自分から。殺すために！」

何が言いたいんだよデカブツ。

「俺を見かけたら、声をかける。そして、殺し合おう。ハンシンよ
お。」

……見つけたらな。デカブツ

「ジャツジだ。俺の名は、ジャツジ・ザ・ハード」

大層な名前だな。裁き（ジャツジ）なんて、殺人狂には勿体無い名前だ。

「俺が望んだ名前じゃねえよ……。お前の名前の方が羨ましいさ。なあ、デッド・ザ・ハード。死の名を冠するなんて殺し屋に相応しいじゃねえか。」

そんな名前はいらん。私は生まれてから死ぬまでフロムだ。一傭兵レイヴンだ。忘れんなデカブツ。

「そうかい……。楽しみにしてるぜえフロム。てめえが、あの女神を連れてここに来るのをな……！」

~~~~~

「……嫌な夢だ。」

目が覚めると、目の前には見覚えのある黒髪と、私より若干小さい



何かが視界に入った。

私の記憶ではその条件に当てはまるのはただ一人、女神候補生様のユニなのだが…

……おい待って待って待て。

「…なぜいる。」

声をかけるも、未だ熟睡中のようで唸り声を上げるだけ。

…所謂間違いを犯したって奴か？いやいや待て。コレに私が欲情するわけがないだろう。それ以前に同性だ。

じゃあ何だ、何故私はこいつと眠っていた。服が肌蹴ているのはこいつか私の寝相が悪いということの説明はつく。

よく考えろ、というか思い出せ。何故この女神様がここにいるのか。

↳昨日 ラステーション上層

「そういえばフロム。あんた生活費は別に稼いでるとか言ってたけど、どこに住んでるの？」

「下層の安いアパートですよ。正直寝る場所としか考えていませんし。」

「……下層の？」

「安いアパート。なのでどうしたものか悩んでいたのですが…。」

「ありえないわー！」

「でしようね。」

「話からして、恐らく住む最低限のものしかなさそうね。」

「その通りですけどね」

「流石に女神がそんなところ行くわけにもいかないし、そういうわけだここに泊まるわよー！」



「ほ、ほら、何かやっちゃったとか…」

「同性相手に何を言っているんだ女神様」

「女の子同士でもあるかもしれないじゃない！」

「何を期待しているんだ」

ふと、携帯のことを思い出す。ほぼ毎日メールで依頼連絡をするのだから今来ても不思議ではないはずだ。

【Fromラステーション教会 Toフロム

Title：依頼連絡

昨夜はお楽しみだったかい？

ユニとのピロートークも構わないが、依頼連絡をさせてもらうよ。

今回は少し重要な案件だから、起きたらできるだけ早く教会に来てほしい。

勿論ユニも連れてね。かなり長丁場な依頼になるからできる限り遠出の準備をしてほしい。

出来る限りの弾薬や武器を持ってくるといい。じゃあ、待っているよ。】

……何だ、どこかで見ているのかあの教祖。

「何よ、ケイからのメール……？……！！？？」

携帯を覗き込んだ途端ユニが顔を真っ赤にさせる。まあ、そつだよね。そつという反応するよね。

「な、ななななな…！？」

「とりあえず、家戻ってありったけの弾薬持っていくか…。」

「ちょ、ちよつと…！」

「何ですか女神様。考えている間違いとかが私は一切心当たりないんです。服は寝相悪かっただけじゃないんですか？」

「うっ…言い返せない…」

「（寝相悪いんだ…）じゃ、行きましようか。朝食も取らないとな…」

「ま、待ってつてば…！」

置いてあつた銃を取り、後ろでに担いで部屋を出る。すぐにユニも来てホテルを後にした。

その後私の家（安アパート）で着替えなりありつたけの弾薬を持ってきて教会…ではなく行くのは朝食の適当なナック。ハンバーガーは人類の朝の源である。朝っぱらからハンバーガー齧る傭兵って何かアレだな…。一応運動は過ぎるほどしてはいるんだけどさ。

「やあフロム、ユニ。昨夜はお楽しみだったようだね。」

「わかつてて言ってるよな教祖様。」

「と、とりあえず私も着替えてくるわ…。」

教会に着くなりユニが教会の奥に走り去る。女神の服ってあんなしかないんだろつな…。私が言えることでもないか。

「それで、わざわざ呼びつけるほどの依頼ってのは？」

「プラネテューヌの女神候補生ネプギアがラステイションのゲームキャラの協力を取り付け、ラステイションを発った。」

「ゲームキャラ、ねえ……。わざわざそんなこと言うってことはネプギアに関連する依頼かい？暗殺とか。」

「流石に他国とはいえ女神を暗殺なんてことはしないさ。むしろ逆だよ。ルウィーに行つてネプギア達に協力してやってほしい。」

「……報酬は？」

「そうだね……。彼女の目的を考えれば……金銭での報酬は難しい。君が良ければ、ユニの御付にでもしようか？ユニも君に懐いているよ。うだしね。」

「それは報酬ではなく嫌がらせか罰ゲームの類だと思つんですがね」「なかなか酷いことを言うね。」

「まあ、別に今決める必要ありませんさ。終わった時には多額の弾薬費を請求してやるんでよろしく。」

「覚悟は決めておくよ。準備はいいのかい？」

「ギルド連中には携帯端末から連絡はできますし、それにまあ、ルウィーつてのも言ってみたかつたんですよ。」

「……そう。ルウィーに着いたらまずは教会を訪ねるといい。僕から連絡は入れておくよ。あとは……」「私も行くわ！」「……」

教祖が振り向くと、見るからに旅支度（何か色々持ってる）のユニが立っていた。まさかとは思うが……

「教祖様。いいんですかあの我儘娘」

「いいんじゃないかな？ユニがいいのなら。ユニとノワールが不在の分の事務仕事は残ってるけどね。」

「……フロム。私もついていくわ。ネプギアに負けてられないもの。」

「私を巻き込むかい……。」

「傭兵なんでしょ。それに私の師匠なんだから、付いていくのは当

然よ。」

「そつですか……。」

どうやら、譲る気はないらしい。何この我儘娘。

しかしまあ、ここまで準備されてしまつと、どうにも断れなくなり……。

「わかりましたよ……。今から出発すれば……VOBで夕方には着くかな。」

「シエアの回復は任せてほしい。ネプギアがいつの間にか稼いでくれていてね。」

「また随分やり手なこつて……。では、失礼します。」

「ケイ、行ってきます！」

教会を出、最下層でVOBを起動して乗り込む。

ユニが乗ったのを確認してから、カタパルト（仮名）に狙いを定め、一気にアクセルを吹かして飛び出した。

目覚めたころころは「走り出した……」ってね。

## 1 - 0 (後書き)

しかし、サブタイが何か寂しい気がしてくるこのごろ。

chapter名はそれなりに考えていても話のサブタイは全然考えていない不始末。

どうしよう……。。

## 一章のメイン登場人物（前書き）

なんとなくでのもの。あんまり意味はないかもしれない。

1章で予定しているメイン人物すべてなのでどう絡むかを予想したりも…そんなするほど人口いねえよこの小説。

あ、あとゲハピク勢は省略します。考えるの面倒臭いんで。

サーセン



## 一章のメイン登場人物

フロム

我等が主人公。ジャツジさんとかユニとか色々面倒なのに好かれる体質(?)。

同性趣味は本人にはないらしい。

ユニ

一応一章メインヒロインのラスティションの女神候補生。大分デレ期。

フロムとは逆に軽火器マイスターを目指しているらしい。ネプギアを強くライバル視している。

ジャツジ・ザ・ハード

ちよくちよくフロムの夢に出てくる黒いデカブツ。

フロムをデッド・ザ・ハードと呼ぶ。ラスティションの兵器ではない。

ネプギア

ブラネテューヌの女神候補生。

真面目な優等生タイプで心優しい完璧超人(?)。つぱいが時々無意識に毒舌に。

西沢ミナ

ルウィー教祖。穏やかながらも若干腹黒い。女神二人の母親役。

ロム・ラム

双子のルウイーの女神候補生。  
姉妹仲はかなり強いがかなり子供っぽい。大人しいロムが姉で活発なラムが妹。

下っ端

犯罪組織マジエコンのマジパネエ構成員。マジック・ザ・ハードの直轄らしい。  
本名はリンダ。

ワレチュー

鼠っぽい姿のマジエコンのマジパネエ構成員その2。  
下っ端とは違って頭は周るがコンパにゾッコンなためよく空回りする。

ブレイヴ・ザ・ハード

ガオガ イガーみたいな姿のハード四天王のひとり。  
四天王の中では突っ込み役。

トリック・ザ・ハード

ぬいぐるみみたいな姿のハード四天王のひとり。  
年齢二桁以上はババアと言いつけるほどのロリコン。

アイエフ

プラネテューヌ諜報部。幼馴染のコンパを溺愛している。  
愛用の携帯電話をなくすと精神対抗するが基本的には常識人。

コンパ

プラネテューヌの見習い看護師。

ド天然の巨乳少女。アイエフの愛情にあまり気づいていない。

日本一

世界を又にかけるヒーロー（自称）。

元々貧乳だがコンパがいると余計貧層に見える。

若干アホの子。

がすと

世界を又にかける錬金術師。

見た目は幼女だがトリック・ザ・ハードは反応しない。

実年齢は二桁以上なのかもしれない。

一章のメイン登場人物（後書き）

もしかしたら追加するかも。

## 1-1 (前書き)

ゲームギョウ界なのにゲームっぽい話が一切出てこない不具合について。

しかしマジエコンヌエ……下っ端は布教活動してたけどワレチユーはコンパにゾツコンだしジャツジはとりあえず殺したいお年頃だしブレイヴは正義バカだしトリックは変態しマジックはマザ(ファザ?)コンだし。統率取れてねえなあこいつら。と思ってしまうのでした。

ルウィー。

ゲームギョウ界の北方に位置し夢見る白の大地と呼ばれている。

魔法文化に栄え、マジエコンヌの生まれた地とも言われゲームギョウ界の中で最もマジエコンヌによる浸食を受けているという。

そんな状態で、女神候補生が未だ生き残っている、というのが何より不思議だ。ルウィーネットでのゲームギョウ界でのワールドシェアは10%あるかないかということまで言っているらしい。

ネプギアがこのルウィーにしていることはラスティションと同様ルウィーのシェア回復に努めてはいるだろうがそう簡単にシェアが回復したな。ラスティション。

夕暮れ時。夕日が光るルウィーの町並みはなかなかどうして美しい。まあ傭兵が感じるべき感傷ではないのだが、まあそこは気にするべきところではないのだろう。

恐らく、教会と見える中で一番高い建物なのだろう。早速、向かうとしようか。

「ようこそ、ルウィーの教会へ。フロムさん、ユニさん。」

「……あなたがこの教祖？」

「はい。ルウィーの教祖、西沢ミナと申します。ラスティションからわざわざようこそ。」

「……どうも。」

ルウィーの教祖はあの腹グロとは違って何やらいい印象。

問題は女神連中……。

「たっだいまー！」

「……いま。」

後ろから、二つの子供の声。

振り返ると、コート姿の子供が二人、立っていた。教会の関係者……？

「おかえりなさい。今お客様が来ているのであまり騒がずに。いいですね？」

「はい。」「はい……。」

「子供……？教祖様の娘か何か？」

「いや、それは絶対に違うと思う」

「違いますよ。あの子たちはこの国の女神候補生、ロムとラムです。」

「……え？」

さっきの子供が女神？女神は基本的に少女か何かの姿を模っていると思っただけであれ少女通りこして幼女だよね！？女神って何歳なんだろう……というか女神って寿命あんのかな……？

「ねーねー。あんたたち、どっから来たの？」

さっきの子供の一人（どっちがラムでどっちがロムなんだろう……）が話しかけてきた。

女神候補生……ユニが何かしなければいいが。

「私らか？ラステーションからだか……」

「へー……あのプラネテューヌの女神みたいに私たちのシェアを横

取りしようってことじゃないでしょーねー……」

「私は一市民だ。シエアにどうこうできる立場じゃない。そんなことできるのは、そっちのユニだ。」

「こっちに振らないでよ!?!……コホン。私達はケイ……ラステイシヨンの教祖に言われてルウィーに来たの。シエア目的ではないわ。」  
「ほんとーに……?別の国の女神は悪い女神だって本に書いてあったー!」

「ラムちゃん……あんまりうたがうの、よくないよ……?」

先ほどだから黙っていたもう片方(こちら、水色がロムのような)がラム(ピンク色)を宥めだす。

「どうやらロムがストッパーのようだ。」

「つか、他国の女神」悪ってどこの帝国思考だよ……」

「まあ、ルウィーが一番歴史のある国だから、そういう本があっても不思議じゃあないわね……。」

「それで!あんたたち、一体何しに来たの!?!」

「知らん。これから何をするか決めるのはその教祖だ。私はあくまでも傭兵だ。金と依頼でしか動かん。」

「……………」

「へー……まあ、宜しくしてあげるわ。私はラム。で、こっちがロムちゃん。二人揃ってルウィーの女神候補生よ!」

「傭兵、フロム。」

「一応ラステイシヨンの女神候補生、ユニよ。」

「ネプギアみたいに悪いことしないなら、見逃してあげなくもないわ!いいわね!」

「イラッ」「口に出さないであげて……」



「それで、教祖様。私たちの寝床はどうすればいい？手頃な宿屋でも紹介してくれるとありがたいのだが。」

「……あ、はい。教会にいくつか空いている部屋があります。使ってください。案内しますね。」

「ねーミナちゃん、ご飯はー？」「ごはん……（わくわく）」「もうちょっと待っていてくださいねー。」

……親子か、おい。

「あまり広くはありませんが、ゆっくりくつろいでいてくださいな。」

「広くない、と教祖は言っているが、私からみれば全くそんなことはない。二人部屋……いや、3人はいけそうなほどのスペースだ。ベッドも3つある。」

「とりあえず手頃な場所に銃や弾薬類を置き始める。えーっと、グレネードランチャーとブレードにパイルバンカー、推力用高圧火炎放射器とグレネード、ミサイル、レールガンの各弾薬100発程度。あとはエネルギーユニットと小型の充電器……」

「こうしてみると、とんでもない荷物ね……」

「そういう女神様はどうしてるんですか、主に弾薬。」

「心配いらないわよ。私の銃は基本的に素粒子分解して持ち運んでいるから。好きな時に出せるわ。弾薬も主にエネルギー弾だからね。充填を怠らなければ弾切れなんて滅多に起こらないもの。」

「羨ましいこつて。」

「……ねえ、フロム。」

「なんでしょうか、女神様。」

急にユニの声のトーンが下がる。随分と感情の上下が激しいようだ。

「何で、ずっとそうやって余所余所しい喋り方するのよ。」

「何度も言っていますが女神様相手に不敬な態度取れないからですよ。」

「じゃあ、私のことは呼び捨て、あとタメ口で喋りなさい。って言ったら?」

「謹んで辞退します。」

「……フロム。フロムは、女神が嫌いな?」

「好きか嫌いかの二極化をすれば嫌いに当てはまるでしょうね。」

「何故……?」

「説明義務はありません。女神は、人のトラウマを掘り起こすのが趣味なのですか?」

「……ごめんなさい。」

「謝る必要があることをしたのですか?」

「……」

「……」

部屋は何の音も立たず、ただ静寂。

私は、ただ黙って銃の整備をしていた。そうでもしなければ、落ちて着かない。

……デッド・ザ・ハードか。ジャッジとか言う奴が何者なのかは知らないが、ああいうのと同類……ムカツクような、どうでもいいような。

少なくとも、女神の小間使いよりはマシなんじゃないかなと、そう思っている私もいたのだった。

1 - 1 (後書き)

最初に四天王が出てくるのってどこだったか……。  
……トリックかブレイヴか……どっちでももうちょい先だしその前に  
ひと波乱来るな……。起こすの私だけど……。

## 1 - 2 (前書き)

そろそろ暗くなってくる頃。一章なのにこんな展開激しくして大丈夫か？

大丈夫…じゃないよね、うん。

本格的に暗くなるので閲覧注意…するほどじゃないよね。まだ。

時刻は夜。

白が主体のルウイーの町並みは夜ということもあって暗いが、街灯の光もあつて雪が輝き美しく見えた。

…静かな夜だ。久しぶりにこんな静かで涼しい夜は久々かもしれない。

こんな時間帯にはいつもリントさんや新米ちゃん、イーノ辺りに連れられて飲み会だった…。

……ん？遠くに土煙…。

遠目だが、明らかに体色のおかしい異常種が二体見えた。

このあたりからしてアイスフェンリル、そしてエレメントドラゴンだろうか。

そして、体色がおかしいということは…汚染体。

異常種は基本的に汚染することはない、と言われている。理由は知らないけど。

しかし、これは大変なことになったのかもしれない。

汚染体は通常に比べて大体1.5倍と言われている。

異常種はそれ一体だけで一個中隊は必要だ。それも相討ちで。

それが二体、しかも両方汚染体だ。最低でも一個師団は時間稼ぎに必要だろう。

あれに太刀打ちできる存在と言えば……

「フロム…！ってうわっ、暗っ!？」

女神、だが……。

「どうしました、女神様。」

「あ、えっと、大変よ！ルウィーに汚染された異常種が襲ってきたって…！」

「さっき目視しました。あれは今の人間じゃあ太刀打ちできませんね。」

「なら話は早いわね！ルウィーの女神候補生の二人も行ったみたい。早く私たちも行かないと…！」

「パスで。」

「……え？」

「今言つたでしょう。アレは人間では太刀打ちできません。女神様方に任せます。」

「で、でも！」

「貴女様は私に犬死しろと。なかなか外道だ。女神様は言うことが違う。」

「ッ……！いいわよ！私だけで行く！」

「健闘を祈っています。」

「……女神も、人間も自分のことしか考えることはできない。……女神って、【神】なんだろう……？」

静かな、暗い部屋。私の呟きは誰にも聞こえることなく消えていく。

「神ほど無情な存在はない。神は上位の存在だからこそ、下位を弄び……あっけなく捨てる。」

「女神が何だ……あんなの、ただの兵器じゃないか、生体兵器……それが女神の正体なんだろう？」

「人間が作った兵器は人間が扱って真価を発揮する。誰が作ったともしれぬ女神という兵器を誰が扱えるんだよ…！」

「女神に頼ってどうする…！兵器に情けをかけられるなんて、兵器に全て任せるなんて、そんなの…人間じゃない、そんなのはただのクズだ、魅せられた愚者だ！私は人間だ、傭兵だ…！」

弾薬と銃を全て回収し、グレネードライフルを背負う。

女神に任せるな。女神に任せれば…死人が増えるだけだ。

女神は人間なんぞ救っちゃいけない。神は人間なんぞ救っちゃくれない。

人間を救うのは、いつだって人間だ。

「……人間を救うのは、人間だ………！」

窓ガラスを飛び割り、外へ飛び出す。

屋根を伝っていけばすぐに着くだろう。

戦火が広がりつつある方向へ、私は飛び出した。

〈視点【フロム】 【リンダ】〉

「へっへ、こいつあすげえや…。汚染ディスク…いい代物じゃねえか。」

今アタシの手元にあるまがましい色のディスク。マジック・ザ・ハード様からもらった一品だが、まさかモンスターを自在に汚染させることができるとは…！マジック様も人が悪い。こんなものを隠し持っていただなんて…。

「当然ツチュね。モンスターの異常種はもともと人間では歯が立たないツチュ。それを汚染させたのを二体送り込んだツチュから、ルウイーの陥落も時間の問題ツチュ。」

「しかしよお、壊滅させちまっつていいのか？マジエコノ又様の信仰とかよ。」

「統計によると、ルウイーをじわじわと浸食するより崩壊させたほうが対抗シエアもなくなって効率的ツチュ。気にせずやればいいツチュよ。」

「まあ、二体居れば十分だろうし。アタシ達は高見の見物と洒落込もうか？」

「そうツチュね。愛しのコンパちゃんは今ルウイーにはいないはずツチュ。居もしない下っ端を探して……くうく！追いかけるならミの偽物にしてほしかったツチュく！」

「てめえは目立たなすぎなんだよ。ちいせえし。」

「何を！下っ端の癖に生意気ツチュ！」

「いた！見つけたよ！」

「……え？ツチュ」

突然、横からアタシ達に声がかかる。聞き覚えがある声だ。そう、いつかの流行らなさそうなヒーローマニアのガキ……つてことは……！

「案の定、近くに潜んでいたわけね。下っ端。」

「下っ端さん！モンスターさんたちを止めてください！みんな困ってるんです！」

やっぱり、女神候補生のガキ……！いつも苦汁を舐めまわすような日



々だったけど、今日こそはアタシの勝ちは確定している。慌てる必要は、ねえ。

「なんだ、意外に遅かったじゃねえか。」

「なんですつて……！」

「汚染は自然現象ツチユ。いくらなんでも汚染までミィ達の所為にされるのは心外ツチユ。」

「まあ、それを利用したのは事実だがなあ。お前らのことだ、きつとアタシ達を犯人に仕立て上げて探すと思ってたんだよ！」

「くつ…！卑怯なー！正々堂々戦えー！」

「ああいいぜ、戦ってやるよ。だが、アタシらに構っていると町がどうなっちまうかなあ？」

「瞬殺すれば問題なしよ！行くわよネプギア！」

「はい！」

ククク…。馬鹿の相手は楽でいいぜ…

〈視点【リンド】 【フロム】〉

町の端からは、二体の汚染された異常種に薙ぎ払われる防衛隊らしき人間たちと、奮戦する女神候補生三人が見えた。

……ん？三人ということは、ネプギアとユニのどちらかがいない、ということか…

まあどちらでもいいがな。

さあ、人間を救おう。

そう決意し、私はグレネードライフルを持ち走り出した。

## 1 - 2 (後書き)

フロムの女神嫌いの原因が、ちよくちよく出てくる時間帯に、これが最初からクライマックス、という奴なのだろうか……。  
というかこれキラーマシンいらないよね、絶対。  
これでキラマ出てきたら……どうなることやら。

### 1 - 3 (前書き)

暗くしようと私必死杉ワロタア……。  
もうだめだ、(話の支離滅裂度が)おしまいだあ……。!

「女神様方を援護しろ！少しでも町に近づけるな！命を捨てても女神様方を守るんだ！」

防衛隊連中は、どうやら差し違える気満々のようだ。……こう見てみると、空しくも見える。過去本で読んだ悪魔とやらの存在を今なら信じる事ができる。奴等は女神ではなく、夢魔。夢を与え、人間を搾り取り、最後には捨てる悪魔だ。

それに魅せられた存在が、今の防衛隊か……畜生。いつからこんなことになっていたんだ……

いつから人間はこんなに脆弱になっていたんだ……！

「いいか！女神様の命は俺たちの数十倍は重い！絶対に傷一つつけるんじゃないぞ！差し違えてでもお守りしろ！」

「その必要はない。」

屋根から飛び降り、司令官らしき相手に話しかけてみる。望みは薄いが、一応な。

「女神は人間より強大かつ強靱だ。今人間がでしゃばってもアレ相手には壁にもならん。ただの犬死だ。」

「例え犬死であろうと、女神様の為に死ぬのなら本望だ！それでこそその防衛隊！」

「…そうか。じゃあ死ぬ。」

持っていたグレネードランチャーをレールガンに変形させ、司令官の脳天を撃ちぬく。

即死した司令官はゆっくりと、血を吹き出しながら倒れた。

「司令官が流れ弾による不慮の戦死を遂げた！これ以上の女神の戦闘への介入は無駄に死傷者を生み出すだけだ！この場は女神に任せ全軍撤退せよ！繰り返す！全軍撤退せよ！」

司令官が持っていた通信機を使い、防衛隊に呼びかける。周りにいた連中も、やはり命は惜しいのか逃げ出した。

「いい子だ……。この戦闘、化け物以外は立ち入り禁止だからなあ！」

レールガンをもとに戻し、戦っている方向へ走り出す。

汚染した異常種、神を騙る悪魔。そして人間<sup>わたし</sup>。

化物じゃないのは私だけだ。ああ、楽しみだなあ！生きる望みの薄い殺し合いってのは！

建物を抜け、すぐ近くにいたのは紅いアイスフェンリルや黒いエリメントドラゴン。本来ならばアイスフェンリルは群青、エリメントドラゴンは真紅色のはずだ。汚染とは、なんとも恐ろしい事象だろうか。

いるのはユニ、ロム、ラムの三人か……。お人よしなネプギアがいな  
いとは。早くも本性が見え隠れしそうだな。

「ともかく、女神の不必要さを出来るだけアピールしないと……と」

グレネードライフルを構え、アイスフェンリルに向けて一発撃ちこむ。今回は奮発してやろう。ありがたく思え化物共。

「グア…グアアアアアア！」

……効いてない、か。現代兵器の名折れだな、こりゃ。

「フロム！？あんた…！」

「あんた、傭兵！？」

「……？」

「邪魔だから下がってる人外共。こいつらは私が殺る。」

一気に飛び出し、ミサイルをアイスフェンリルに撃ちこむ。

多少は怯んでいるが、効いている、というわけにはいかないようだ。エレメントドラゴンは女神連中に意識が向いている…。

私の倍近くある巨体から放たれる氷の息や爪。

まあ残念ながら体の大きさと威力は比例する、しかしそれに伴い振りの大きさまで比例される。

数十cm移動するだけで避けられる程度の単調な攻撃。

だが人間は強大な敵に対し本能的に恐怖し、冷静さを失う。

現代兵器も歯が立たない。【今の人間】では勝てないとはそういうことだ。

「グアオルルルル…！」

「腹が減ったんだろう化物。爆薬でも食ってる害悪があ…！」

強く息を吐こうと大きく息を吸い込んだ時、グレネードランチャーを口に突っ込み、発砲。

その状態から変形させ推力確保用高圧火炎放射器。

寒冷地に適応している奴は熱に弱いという実例がある！

「しつかりウエルダンまで焼いてやるよ犬畜生！」

引き金を引き、喉の奥まで火炎放射を撃ちこむ。

そしてすぐに引き抜いて距離を取る。

「グアア……グオ

何か鳴いていたが、途中でアイスフェンリルが破裂し、血肉が飛び散る。

「ったく、ちつと頭を使えばこんなもんか。汚染異常種つてのも大したもんじゃない。さて、あつちは……」

「グオオオオオオオオオ……」

「はあ、つく……」

「ラムちゃん……だいじよ、うぶ……？（おろおろ）」

エレメントドラゴンが断末魔を上げながら倒れる。

女神連中はボロボロだが、エレメントドラゴンの汚染体を倒したという事実ができた。

チツ、仕留め損ねたか。

……待てよ、よく考えれば私が倒したという証拠はなく、寧ろすべて女神の手柄となる……しまった、考え不足だったか……。

弾薬費はルウイーの教祖、そうだ、あの腹グロ教祖に大型手当も貰わないとな……。

とりあえず…帰るか。

「ちよ、ちよつと、待ちなさいよ、フロム…！」

「……。なんですか女神様。」

「あんだ、何で…！？防衛隊の人たちは…！？」

「あの連中ならちよつとお願ひして引いてもらいましたよ。それにしても、人間では太刀打ちができないと知っておいて放っておくとは。女神様は思慮深い。私には理解できませんよ。」

「あんだ、は……！」

「私は殺すのが仕事なんで、では。」

銃をしまって歩き出す。私は大した傷はついていないし、体力もそこまで減っていない。

殺し合いはブレインだよ、女神様。

「ちーつすフロム屋でーつす。弾薬費の請求に来ましたー。」

「え？あ、はい！？」

教会に入った私の第一声に戸惑う教祖。あ、面白い。

「汚染異常種、ぶつ殺したんで報告ついでに請求を。30000cr edit、これに書いてある口座をお願いします。」

「あ、は、はい。後ほど、振り込んでおきますね…。」

「どーも。じゃ、私は寝るんで。おやすみなさい。」

「はい、おやす……あ、そうだ。女神様方は…。」

「後片付けでもしてるんじゃないんですか？私は殺すのが仕事ですし、片づけに義務はありませんからね。では…。」



……まあ、特に空腹感もないし、寝ようかね。

~~~~~

「よう、デッド・ザ・ハード。」

……ジャッジ・ザ・ハード。またてめえかデカブツ。私の夢の中に住んでるのかお前は。

「両方だよ。てめえの中には俺が、俺の中にはてめえが住んでいる。」

……

「てめえも感じたんだろう？俺をよ。俺の鼓動、俺の意識、俺の意思、俺の憤怒がよお……！」

……お前の所為か。

「てめえの本性だよ。てめえは俺なんだ。俺のハンシンなんだから、当然だろう？」

何が目的だ。

「てめえか俺、どちらが本当の俺になるか競争するためだよ。」

……本当の、お前ねえ。

「何も俺だけに限った話じゃねえ。トリックやブレイヴの野郎にもハンシンはいやがる。あいつらは興味ないみてえだがな……。」

お前がハンシンを求めるのは、本当の自分になり、より殺すためか。

「よくわかってるじゃねえか。これは俺とてめえの勝負だ。勝った方が負けた方を取り込んで本当の俺になる。どうだ？」

…拒否権は無いんだろうな。乗った。今の私には女神を打倒する力が必要だ。戦略も地力が無ければたてられん。

「成立だ。まず俺たちが出会わなければ話にならねえ。暫くは手伝ってやるよ。仲良くしようぜ、デッドよお？」

私をデッドと呼ぶな。私はフロムだ。いいなジャッジ。

「じゃあフロム。手土産ついでにいいことを教えてやるよ。てめえの近場に、ブレイヴの奴のハンシンがいるぜ…。気をつけな…。」
ハンシンは、人間とは限らない】からよ…。」

……そうかい。精々気を付けるよクソツタレ。さっさと消えるデカブツ。

「ククク…」。楽しみだ、楽しみだぜえ、デッドオ…！…！」

……。

1 - 3 (後書き)

何かフロムの強化フラグが立ってますが、回収相当先です。具体的に言えば三章ぐらい？あまり正確ではない具体的な予想ですけど。

ああ、あと。【フロムは生粋の人間】ですよ。うん。

しかしこれは…叩かれるかもな…。

1 - 4 (前書き)

今回から大きく原作から外れる予定(今更)。

あ、あとメインキャラの一人(人間)の死亡が確定されました。

まだフラグもロクに立ってないんで予想は難しいでしょうが、

【まだ出てきてはいない】とだけ。

「……………最悪の目覚めだ」

朝。ふと目が覚めると、白い天井が目に入った。

それと同時に、夢の中のジャッジとの会話が鮮明に思い出され、なんとも気分が悪い。

軽い嘔吐感はあるが、特に問題はない。それより、もっと問題なのは……………

(よう…。聞こえるか、デッドオ……………)

頭の中からジャッジの声が聞こえたことだ。

何だ私は。厨二病かなにかか？厨二病患った傭兵って夕チが悪すぎる。というか何よりうるさい。

「おいジャッジ、勝手に人の頭の中に語りかけてくるんじゃないよ
反応する私のことも考えるド畜生」

(つれねえこと言うんじゃないよ…。仲良くしようぜ兄弟…?)

「誰が兄弟だ誰が……………。あと私は女だからな。」

(男だとか女だとかそんなくだらねえことを考えるなんて、らしくねえなデッドよお。)

「……………。少し黙ってるジャッジ。」

(ゲヒヤヒヤヒヤ……………!)

頭に響く声を抑え、ベッドから起き上がる。

……………とりあえず軽く着替えて教祖に依頼でも貰うかな。

飯は適当に……。

「おはようございます、フロムさん。朝早いですね。」
「教祖ってのはいつ起きていつ寝てるんだかね……。」

階段を下りて広間に出ると、完全に目が覚めている教祖に迎えられた。

なんとなく悔しいので悪態を吐いておく。

「そつだ、これからラムちゃん達を呼んできてくれませんか？朝ごはんはコーンスープとパンですよ。」

「…意外に庶民的だな、女神の食事ってのは。」
「女神も、そこまで大層なものではないんですよ。候補生なんて、普通の女の子とあまり変わりません。」

「……………」
「貴女が女神に対し何を思っているのかは私は知ることにはできませんが……。どうか、あの子たちを悲しませないでください。これは、西沢ミナという一人の人間のお願いです。」

「……善処するよ。」

少し前、腹グロみたいに話したくないタイプではないと思ったが撤回しよう。

教祖ってのは、食えない奴しかいないようだ。

正直、女神の部屋がどこかというのを知らなかったのだが、割とあっさり見つかった。

というか【ロムちゃんとラムちゃんのお部屋】とかわいらしいプレ

トの飾ってある扉が見つかったのだ。

(女神候補生ねえ……。あのガキじゃあないらしいが……。殺してもいいんじゃないか……?)

「頼むから黙っててくれジャツジ……。私がスパイしているような気分だ……」

(スパイだあ……?お前は全ての敵ですべての味方なんだろ……?)

「……言いて妙だよ。だから黙ってるジャツジ。女神様ーはいますよー」

ちょうど両手がふさがっていたので(嘘)、仕方なく扉を蹴り開ける。

部屋の中では女神候補生二人がコート姿で楽しそうにゲームしていた。早起きだなこの幼女共。まだ5時だぞ。朝の。

「あら、あなた、傭兵の……。」

「フロム。」

「そう、それで、フロム?何の用よ。」

「教祖が朝食の準備をするから女神様方を呼べと。」

「はい。いこ、ロムちゃん!」

「あ、うん……。」

ラムが嬉々として部屋を出ていくが、ロムが私を見て怯えている様子。

…私はそこまで表情に感情が出やすいのだろうか。

「……どうしました?」

「……! (ビクッ) こわい…… (ふるふる)」

「人の顔見るなり怖いとはまた失礼な……。私は強面のつもりはないんだが……。」

こわい、と言い残しロムもラムを追って部屋を出て行った。
……正直、私も女の端くれなわけで、突然顔みて怖いと言われると傷つく。若干。

(ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ！随分と嫌われ者じゃねえか、なあデッド？)
「……………。飯、食うか……………」

ジャッジを無視して広間に向かうことにする。こいつの甘言に付き合おうとロクでもないことが起こる気がするのだが……。もう遅いのもかもしれないな。

「はあああああ……………」

昨日来た時の謁見の間の雰囲気とは打って変わって、なんともアツトホームな雰囲気が目の前に広がっていた。

「ロムちゃん！私のちよつとあげるね！」

「ありがと、ラムちゃん……………」

「うん、ルウイーの料理も結構悪くないわね。」

「ルウイーの料理……………」と云っていいのでしょうか。割と有り合わせですし。」

「本当に庶民的だなおい……………」

(羨ましいねえデッドよお。俺つまらねえ反応しかしねえ女神共を見張ってなきやいけねえつてのによお。この女神共を殺したくて仕方がねエ。)

まあ、基本的に外食ばかりの私にとってこういった食事は割と珍し

い。

それ故か若干落ち着いていたりもするのだが……。そういつてもいられない。何より頭の中のジャッジがうるさい。

どうやら私以外には聞こえていないようだ。つまりジャッジに返事を返すという事は、傍から見れば痛い人だ。そんなレッテルは正直勘弁してほしい。

「……ごちそうさま。教祖、多少聞きたいことがあるのだがいいか？」
「あ、ふあい、どうぞ。」

「……。ネプギアの所在を聞きたい。元々私たちはネプギアにちよっかい出すために来たわけだしな。」

「あ、そういえばそうだったわね。」

「忘れてたのかその駄女神」

「ネプギアさん、ですか……。確か、街で宿を取っているはずですが今宿にいるかはわかりませんが……。そのうち教会に顔を出すと思います。」

「オーライ。私は少しギルドに顔を出してくる。その駄々つ子連中の相手は任せましたよ、女神様。」

「自分に苦手なことは一切ためらわずに私に投げるのね……。」

ユニやら駄々つ子連中が何か反論しているが聞こえない。

食器を教祖に言われたところに置いておき、さっさと教会を出る。

朝日が昇りはじめ、白い雪に反射して夕日とはまた違った味わいがある光景だ。

もっとも、あまりにも身近過ぎてルウィー国民は見飽きているのだろうか。慣れとは怖い。

街をぶらぶらしていると、先ほどまで延々と頭の中で響いていたジャッジの声が止んでいたことに気付く。

多少慣れかけたというのに。…まあ、いいか。

ギルドは万国共通……四国共通なのだろうか、ラスティションのものと対して変わっていたりはしない。

依頼契約の端末もラスティションのものと同型。通信機もだ。内外装はラスティションが黒っぽいのに比べてルウィーは白っぽい。国のイメージカラーの問題だろう。さて、手頃な依頼は……

【Title：連続殺人事件調査 Client：西沢ミナ

最近連続で起こっている謎の殺人事件の調査の依頼です。ある日から、ルウィー国内で5〜9歳ほどの女の子の物と思われる人片が何度も発見されています。その人片と、最近行方不明になっている女の子のDNAパターンが一致。誘拐殺人と断定できます。本来ならば女神や警察が管轄する仕事なのですが、女神候補生も幼い子供。そのターゲットの範疇内なのです。それに、警察は現在、街から出ることができません。そのため、此度の依頼をすることになりました。この事件に関連する調査、出来れば犯人の確保を依頼します。調査の結果、確保の是非で報酬は増減させていただくので、そのつもりで。】

……連続殺人事件、ねえ。

「ジャッジ、何か知っているか？」

（俺はお前の道具じゃねえよデッドお。）

「少し気になったものでな。人片ってことは、その元の部分がどこに行っただことになる。心当たりはないか？」

（……あの野郎だな。年齢一桁のガキが主食の変態野郎だ。）

「……知っている、となるとそいつもザ・ハードか。そいつのハンシン……少し気になるが……。」

(デッドは、あいつの眼中にはなさそうだが、な……。)

「それならそれで好都合だ。私が食われる心配はない。」

(頼むぜえ、デッドオ……。お前を殺すのは俺なんだからよあ……。)

「善処するよ。ジャッジ。」

自分のパスワードと依頼承諾のキーを入れ、ギルドを後にする。さて、今日はネプギアを探すつもりだったが、面白いことになりそうだ……。

1 - 4 (後書き)

アニメまで マ カ三話と公式キャラ紹介のページを一緒に見ていたら思いついてしまった話の流れ…。

あ、日本一はマミりませんよ。一応。

その代り……。

ではまた次回。

1・5 (前書き)

今回は短め。というか全体的に一話一話が短い気がする。

私の気力が一回に二時間しか持たないからなのだが…。まあ一話一回で書けるわけでもないから、どちらにする短いのは変わらないのかもしれない。

【むむむ。】

「教祖。仕事をもらいに来たぞー」

扉を蹴り開け、謁見の間（こう言うとか何か城っぽい）に入ると、まだユニがスープを味わい続け、教祖がその光景を微笑ましそうに観察していた。何やってんだこの駄女神。

「何やってるんだお前ら…」

「いや、ちよつとラステイションとは違った感じに感銘を受けていて……」

「まあユニはどうでもいいから進めよう。教祖、ギルドで連続殺人事件調査の依頼を見つけてな。受けに来た。」

「……そうですか。あなた方が…。」

「え、何？何の話？」

「少し黙っててくださいませんか女神様」

「依頼内容の通り、先日から行われている小さい女の子のみを目的にした誘拐殺人事件が多発しています。その犯行現場も統一性がなく、警察組織の人たちも操作が手詰まりになっています。あの子たちに頼むには、あの子たちが幼すぎますので…。」

「…で、破片に関しての情報は？」

「はい。残された部分は手や足ばかり。断面は全て千切れたような切れ方をしています。」

ジャッジの言っていた【ザ・ハード】。年齢一桁のガキを主食とする…の割には妙に不可思議な部分もある。何かを誘っている気がするな…。

「…件が件なだけに、囿を使うこともできないわけか。」
「はい……………」

「私やユニも犯人の守備範囲外だろうしな…。まあいい。こちらもこちらで調べることにする。ネプギアも見つける必要があるしな。」

「お願いします…。」

「ユニ、いい加減食い……………」

「終わってるわよ。話してる間にね。」

「そうかい……………」

いつの間にか準備万端だったユニを連れ、教会を後にする。

よくよく考えればユニがいるとジャッジと話せないわけか……………。

犯人を知っていそうなジャッジと話せないのは若干のハンデになるわけだな…。うまく分担させられればいいが…。

「それで、依頼ってどういうの？またビル壊すわけ？」

「そんなビルが周りにあって尚且つ壊す必要があれば壊すだろうがな。」

「うつ……………」

「単なる殺し屋探した。このあたりでたびたび変死体が発見されているからその犯人の手掛かり、できれば犯人の確保をしろ、とな。」

「へえ……………まあ、私はこれでも目がいいからね。まっかせなさい！」

「無い胸を張ると虚しく見えるぞ」

「うるさい……………ぐすん……………」

……………まあ、私も胸は大きい部類ではない。むしろまな板だ。

まあ胸が大きいなんてのはロボットにでも乗らなければ完全に邪魔な脂肪の塊だ。当たり範囲が増えるようなものだしな。

そう考えるなら、ユニは狙撃戦に秀でているのだろう。まな板とい

うことは、俯せの際に気付かれにくいからな。

つと、モノローグが脱線した。

とりあえず、街で情報を集めることにし、ユニを派遣する。

若干スルーしていたが、ジャツジは行方不明になった女神の【見張りをしている】と言っていた。

つまり、女神の場所を知っているということだ。

……本格的にスパイの気分だ。

「ジャツジ。少し聞きたいことがある。」

（ああ？なんだデッドオ。）

「お前、少し前女神の見張りをしていると聞いたな。あれはどういう意味だ。」

（そのままの意味だよ。対して反応もしやがらねえ女神共の見張りをしているんだよ。俺はできればこいつらを殺してえがな。）

「……やはり、女神はそこにいるわけか……。」

（目的なんざ俺は知らねえがな。）

「……女神連中は私にとっては殺してくれて構わないがな。それでお前が知っている犯人と言う奴を教えてくれないか、兄弟？」

（ハッ……！まあ、最終的に生き残るのは俺とお前のどちらかだけだ。教えてやってもいいな。トリック・ザ・ハードって奴だ。俺みてえに見りやすぐわかる姿してる。）

「……一つ思っただがジャツジ。お前と私で記憶の共有とかできないのか？」

（んなことできやしねえし興味もねえ。俺はてめえと殺し合いができりゃそれでいいんだよ……。）

「……期待はしていなかったさ。つと……。」

視界の隅に見覚えのある姿を見つけ、咄嗟に建物の影に隠れる。

正直隠れる必要は……あるな。うん。

紫色の紙とセーラー服…といえばネプギアか。面倒な時に面倒な奴を見つけてしまった。

(いるじゃねえか…あの時の女神のガキ……！)

「落ちてジャッジ。私が殺す理由はない。それ以前に……。」

そう。ネプギアと共にいる連中だ。

何か天然そうなセーター、見るからにサイズの合っていないコート、よくわからないスーツ(?)。

……完全に一致。ネプギアとユニの決闘を邪魔しようとしていた連中だ。

しかし、そんな連中がネプギアの身内だったとすると、何故邪魔しようとしていたのか……。

ネプギアは偶に毒を吐く以外はドが付くほどのお人よしとさえ言われている。

そんな奴がわざわざ身内に決闘の邪魔をさせるのだろうか……。

待てよ？女神は基本的にシエアのことを考える。人間は道具かシエア創造装置ぐらいにしか考えていないだろう。そして連中が身内で、ユニのメンタルが弱いことを知っていれば……。

……ネプギアの本性見破ったり、かな。

さて。まあ連中に見つかって敵対されたり…なんて面倒臭いことは正直勘弁だ。

なのでさっさとその場を離れることにしよう。

とにかく、どうにかして調査を進めないとな……。

トリック・ザ・ハード……ルウイーの女神候補生の始末程度にしか使えそうにないが…できれば確保したい。

そう考え、私はその場を後にした。

1 - 5 (後書き)

ジャッジが妙に大人しく感じるでしょうけど、あいつバルバトスみたいなの……あ、無理だ。原作だといつもあんなだ。

ちなみに、今のところ作者の脳内ではマジック以外のハンシンは確定しています。

原作の因縁やザ・ハード共の趣味を考えて予想してみましょう。当たっても特になにもありませんけど。

1 - 6 (前書き)

トリックさんはきつと真面目なぬいぐるみなんだよ。幼女が絡むと
我を投げ捨てるだけで、幼女が絡まなければ残念がるけど真面目な
ぬいぐるみなんだよ。主食幼女だけど。

ネプギア達から即行離れ、再度トリック・ザ・ハード（ついでにユ
二）を探す。

トリックの守備範囲は5〜9ぐらいまでの幼子……というか幼女。
ルウィーの女神候補生、ロムとラムならジャストミートだろうが……
……。私はもともと人付き合いが苦手だ。どうにも人探しと言うものは
苦手なのだ。なのに何故受けたのか？ ジャツジが挑発してきたか
らだよコンチキショウ。

現在地、森林っぽいところ。

……うん、迷った。

何分前からここに入り込んでいたのか。そんなことは知らん。とい
う知らなくてもいい。

何よりも問題なのは、出れるかどうかだ。

リンボックスとルウィーにはやたら自然が多い、と言われている。
まあ、確かに紫と黒よりは白や緑のほうは自然っぽさはあるだろう。

森林と樹海の違いは何か。個人的には木々の大きさだと考えている。
太陽光が入らないほどの森は樹海。太陽光が入り、空が見えれば森
林だ。私はそう定義している。

……さて。現実逃避もこれぐらいにしてまず脱出手段を考えよう。

まず、方角。……わからん。というかどの方向に街があるのかも
わからん。この森がルウィーのどっちにあるのかがわからん。

次、太陽。……どっちだ？ 恐らくまだ昼前だろう。多少空が見える

が、太陽は見えない。

周りを見渡せば、全体的に葉の緑と幹の茶色。そして何かよくわからないぬいぐるみっぽい黄色。

これでどうやって帰れば……ん？

「……………」

「……………」

今、私の目の前にいるのは私より大きいぬいぐるみ(？)。

ぬいぐるみ特有の肥満体かと思える腹のデカさ、人間とは思えない口と牙。

…うん、トリック(仕掛け)とは無縁の奴だな、こいつ。

「……………何だお前」

「なんだ、幼女じゃないのか……………」

私を見るなり見るからに(表情は無いようだが)落ち込む目の前のぬいぐるみ(極大)。

ああ、こいつがトリックか……。

「あんたがトリックか？」

「む？幼女でもなくせに話かけるとは、貴様、何者だ！」

「幼女にこだわり過ぎだろうに……………。デッド・ザ・ハード。あんたらの間で広まっている噂の存在、ハンシンの一人だよ。」

「……………ほう。ハンシン、ジャッジの与太話かと思っていたが…実在していたのか……………」

「急に真面目になりやがった……………」

「して、デッド・ザ・ハード。このトリック・ザ・ハード様に、何

か御用かな？」

「これでも人間の中で傭兵つつう仕事をしていてね。一つ手合せ、
どうだい？」

黄色い巨体、その口に向けてグレネードライフルを向ける。

口の中、つまり体内にダメージを与えるってのは対大型の基本戦法
だ、通常弾丸なら意味は薄れるが、爆発物なら効果は高い。

「ほう。ジャッジがあればほどまでに興味を占めるハンシン、試させ
てもらおう。」

「思う存分見るがいい、さ！」

即座に銃口をトリックの足元に向け、一発撃ちこむ。

安易な発想だが、座っているということは、安定が基本的に悪いと
いうこと。手短い。

一度倒せば起き上がるかどうか、の実験も兼ねる。

撃ち込んだ後、木々に潜り込んで様子を見る。

どがーん。トリックの足元で爆発が起こり、爆発の衝撃でトリック
の体が後ろに傾く。

…が、すぐに戻った。あの体勢の安定性すごいな…。

「どうした、ハンシン。まさかこのトリック様に傷一つつけずに逃
げ出すなんてことはないよな？」

「残念ながら女神やあんたらみたいなの化物と違って体は弱い人間
でね。絡め手しかできないもので。トリック様に策^{トリック}つてのを教えて
あげますよ。」

とは言ったものの、グレネードが至近距離で爆破して無傷とは。ザ・
ハードの体は何でできているのだから。

外殻強度は折り紙付。次は内部強度を試してみようか。

とりあえずスモークグレネードを装填、もう一度トリックの足元に撃ちこんでから火炎放射に変形させる。

「ぬおっ!？」

スモークが出てから跳び出し、トリックの口に火炎放射を突っ込み、撃ちこむ。

流石に、口の中まで固いつてのはそうはいないはずだ。

「おお、温い温い。人間の兵器の限界だな。」

「…ッ!？」

咄嗟に火炎放射を引き抜く。スモークが晴れると、トリックが咀嚼するそぶりを見せていた。

恐らく、銃をかみ砕くつもりだったのだろう。

危ない危ない。この銃は特注品で一丁120000creditはする。まあ予備はあるのだがな。

「どうやら、お前自身では何もできないようだな。その武器の威力も大したことはないようだしな。」

「チッ……。ザ・ハードの強度つてのはどうなんつてんだおい……。」

グレネードはどうか知らないが、口の中を焼いても対して効果が無い。となるとできるとすればどうにかしてグレネードを撃ちこむか、虎の子の近距離武器を刺し込むか……。レールガンは貫通せずに弾かれるだろう。

「それで？お前の言う策は^{トリック}終わりかな？」

「冗談。仕事もあってね、破片の一つでも頂きたいもので！」

グレネードを頭に向けて撃ちこむ。爆破して多少身体が揺れるも対してダメージは食らっていない様子。

だが、隙ができればそれでいい。

「右腕、貰う！」

トリックの右腕めがけて拳を振りかぶり、思いっきり殴る。

拳が当たると同時トリックの右肩が弾けとび、右腕が落ちる。

「ぬおおおっ!?!」

「ハッ、ざまあ。」

着地と同時にトリックの右腕を搔っ攫って離れる。正直これ以上戦う意味はない。

「人間の兵器の売りは多種多様性だね。全て見切るってのは無理だと思ってくれないかね。」

「……ほう。確かにハンシンを見誤っていたようだ。今日も幼女が食えて機嫌がいい。これで退散しよう。」

「まあ、また会うでしょうから、ジャッジのやつによろしく行つていてくれないかね。私、あいつのハンシンらしいんで。」

「…覚えておこう。」

そう言い残し、トリックは消えて行った。

残ったのはトリックの右腕。まあ、これだけで十分報酬はもらえるだろう。

さて、まあ一応依頼は達成だ。

あとは教会に帰って報酬を……

「ルウィーの町、どっちだ……？」

そういえば私、遭難していたっけ……。

〈視点【フロム】 【??????】〉

「よう、トリック……。良い様じゃねえか。俺のハンシンにやられたんだろ？」

「……悪趣味な奴め。わざわざ味方の敗戦を盗み見していたか。」

「ハッ。てめえより悪趣味な奴が存在するわけねえだろ。」

「……。まあいい。これから身体を修復してまた幼女を探さないといかん。」

「ちつたあ見張り変わりやがれボケ人形。」

「何のことかな？」

「帰還の挨拶！ただいまと言わせてもらおう！」

（（あー、うるさいのが来た……））

「ジャッジ、トリック！お前たち仕事はどうした？」

「みりゃわかんだろ、真面目にやってるよ畜生」

「腕が壊れたのでな。修理に来た」

「なんと……！始末書物だぞ、トリック！して、何にやられたのだ。」

「俺のハンシンだよ。」

「ほう……。噂に聞くハンシンか。トリックを撃退するとは……。好

意を抱く。」

「……はあ？」

「興味以上の対象ということだ。そのハンシン、私も会ってみたいものだな。」

「勝手にしろ。ルウィーでも探しゃいるんじゃないの？」

「ルウィーには幼女の女神候補生がいると聞く……クウ……！無い右腕が疼く……！」

「バーカ」

「ブレイヴ・ザ・ハード、出るぞ！」

1 - 6 (後書き)

多分、この小説のブレイヴはCVが中村悠一。

トリックさんを真面目にするとブレイヴとキャラが被る 正義馬鹿

馬鹿 ガン ム グ ハム。某ねぶ子さんもブシ仮面さんになつてたりするし。

こんなの絶対、おかしいよ。(いろいろな意味で)

1 - 7 (前書き)

今回、一番最初のキラーマシン(一戦目)でネプギア達との合流という予定、崩壊。

これより先、一話一話を8割ぐらいその場の思い付きで執筆していきます。(というか0 - 3からずっとそうだけど)

……こんな小説じゃ大丈夫、じゃないよねー。

「はぁ… やつと、ついた……。」

私がルウィーに到着するころには、既に夕方だった。

昨日とは同じぐらいの時間帯だが景色をみた感想は全く違うものになるのが人間の感傷の複雑さなのだろう。

ふと、自分の右手を見ると、手の甲が若干焦げている。恐らく軽度の火傷だろう。

袖に隠したもう一つの武器、パイルバンカー【NIOH】。赤熱した大型の釘射出機を手の甲に装着している。

当てればグレネードが効かないようなザ・ハードの体を弾け飛ばせるような威力を誇るが、射程が何と数？。しかも撃ちこむとほぼ確実に手の甲が火傷する。フィストショット（本来は腕に着けるショットガン。つまりは殴ると同時に発砲するもの。）の定めと言う奴だ。

しかしまあ、なんとというか、とにかく……腹が減った。

まあルウィーには着いたんだ。教会に戻って報酬貰って夕食でも…。おなかすいた。

「おかえりなさい。結果は出ましたか？」

「確保には失敗。まあ腕の破片とその他情報は得た。とりあえず食料を何でもいいから分けてほしい。干し肉でいいから。」

「えーっと… 保存食でいいなら、少しは用意できますが…。」

「それでいい。費用は報酬から天引きでもなんでもしてくれ。」

「構いませんよ。少し待っていてくださいね。報告はその後。」

「はい、どうぞ。」

教祖に渡されたのは、ラステイションでもよく売っている携帯食料だった。

チヨコレート味が…プレーン味がよかったがまあ文句を言う立場でもあるまい。

「では、結果を聞きたいのですが…あの、ユニさんは…？」

「さあ？では、報告を始める。」

報告したことと言えば、トリック・ザ・ハードという存在が犯人（？）であり、その腕の破片を奪取した。ぐらいだ。

まあそれぐらいしか報告することがないのだが、これぐらいの報告で十分だろう。

「以上だ。」

「トリック・ザ・ハード…どこかで聞いたことあるような…。とにかく、調査、感謝します。報酬金は口座に振り込んでおきますので。」

「毎度あり。」

「ただいま…。あーもう、どこいったのよフロムって…ば…。」

「……………」

この駄女神、まさか一日中私を探し回っていたのか…！？

いや、連絡を入れなかった私も私だが。つか女神に連絡ってどうすりゃよかったんだ…！？

「…依頼は終わったぞ。」

「え、嘘お！？すごい情報入ったから自慢しようと思ったのに……。」

「私に自慢してどうすんだ……。」

（おいデッドオ……。）

…嫌なタイミングでジャッジが話しかけてきやがった。

こちらそんなテレパシー的なことできないつつうのに……。

（テムエも気づいてるんだろぅが…あの黒い奴、ハンシンだぜえ…
？誰のかは、知らねえがな……。）

……ユニが、か……。

女神が敵対するザ・ハードの一人だとは、なんとも皮肉なものだ。

まあ、ユニなら……いや、いいか。

「もう依頼終わったから、とりあえず明日からはネプギアの搜索を始める。いいな？」

「う、う……了解……。」

ユニがとぼとぼと部屋に戻っていく中。私は、若干後悔していた。

ネプギアはまだいいが、その取り巻き連中と私は数日前に殺し合いをしている。

私は傭兵という立場上昨日の敵は今日の友、今日の友は明日の敵。

というのは日常茶飯事だと思っではいるのだが、女神みたいな綺麗な事の塊みたいな奴に付き従っているということは似たような思考と考えていいだろう。

そんな状態で会ってみる、最悪ユニまで離れてあつと言つ間に1対5の完成だ。

それは正直勘弁してほしい。

（おい、デッドオ……。気をつけなあ……。テメエんところに、ブレイヴの馬鹿が行きやがった。）

「……ブレイヴ……。新しいザ・ハードか。気を付けよう。それにしても、お前に馬鹿と言われるブレイヴとやらの知性が気になる。」

（ハッ、俺様は頭脳明晰だよ。殺すことしか考える気がねえだけだ。）

「……お前も十分馬鹿だよ、ジャツジ」

出来るだけ小声でジャツジと話しながら、私も部屋に戻ることにした。早寝早起きは割と基本。うん。

通路の扉をくぐり、閉めようとしたとき。聞き覚えのある声があった。

「ミナさん、大変なんです！」

あれは、ネプギア、と取り巻きの連中……？

「……そうですか。ホワイトさんが……。」

「キラーマシンの起動には大分手こずっていたわ。早くても侵攻は明日になるでしょうね。」

「明日……。」

「私たちは、これから少し休憩してからゲームキャラ修復後、夜襲をかけるわ。できればルウィーの女神候補生の二人の協力もほしいのだけど……。」

「……申し訳ありませんが、あの子たちは協力してくれるとは……。」

「手こずりそうじゃないか。手を貸そう。」

扉を開け、謁見の間に入る。

ネプギアの他には、知らない奴が一人混じっているが……。まあ、いいだろう。

「あんた……！」

「あー！何時かの悪者！」

「悪者とは非道い言われようだな。私は傭兵でね、敵も味方も依頼者次第ってこと。」

「ころころと敵味方を変えるなんて、卑怯者だー！」

「やかましい。それで、プラネテューヌの女神候補生様？私を雇ってみない？それなりの腕は保障するけど。」

「え、えつと……。」

「ネプギア。あまりこいつを信用しないほうがいいわ。いつ後ろから刺されるか。」

「そうです！日本一ちゃんだって刺されたんですよお！」

「あれは名誉の負傷だー！弔い合戦だー！」

「……………」

「外野うるせえうるせえ。あれはああいう依頼を受けてただけだったのわかりやがれド畜生。それで、ネプギア様？私を雇う？雇わない？」

「……………えつと……遠慮します……………」

ネプギアは少し頭をひねると、そう頭を下げながら断った。

……まあ、正直どちらでもよかったわけだが。

「そうかい。まあ女神に雇われるってのはこれ以上は正直願ひ下げにしたかったし、好都合ではある。私を雇いたかったら言っほし

いね。」

「…考えて、おきます。」

「じゃ、私はこれで失礼するよ。教祖、あとで聞きたいことがある。」

「あ、はい…。あとで、ですか？」

「私はこれでも臆病者でね。戦いでも敵が何をしてくるかを臆病なほど分析するタイプなんだ。たとえば自分と同じ隠し玉を持っているかもしれない、とかね。」

「……ッ！」

「それに私は傭兵稼業をやっているがメンタルが弱いほうで。これ以上敵意のこもった目で見つめられると…。」

カバーからライフルを取り出し、ネプギアに向ける。

それに合わせて、ネプギア以外の全員が各々の武器を取り出してきた。物騒な連中だほんと。

「実に腹が立つ。本当、殺意の衝動に目覚めてしまいそうだ。」

「…なに、やる気？今度は5対1なんだけど。」

「ああ、そうか…。あんたらはプラネテューヌの連中だったな。ならばルウィーの教会がどうなるうと知ったことではない、と。女神の権力争いとは恐ろしい。」

向けた銃をさつさと背中のカバーに入れ、部屋に向かうことにする。後ろから何か言われているみたいだが、私は一言返すだけに止めておいた。

「残念だが、女神を敬愛している人間がいると同時に女神を嫌悪している人間がいるってこと。覚えておいてほしいね。」

通路に入り扉を閉め、部屋に向かって歩き出す。
今はただ、寝て休みたい気分だ。

1 - 7 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ブレイヴ「朝昼晩全時間帯共通での挨拶！すなわちおはこんばんちは！」

ジャツジ「いつの時代だよおい」

トリック「それより、何故こんな男三人でむさ苦しく後書きに居座らねばならんだ！欲を言えば幼女がいいが、せめてマジックぐらいはいてもいいだろう！」

ジ「作者がまだマジックのキャラ決めてないんだから仕方ねえだろうがボケ人形。最悪ブレイヴみたいになんだぞ」

ト「むう…それは、できれば勘弁願いたい…」

ジ「お前に自尊心があつたことに俺は驚いてるぞ」

ブ「これから毎回、読者の君の視線を釘付けにする情報を私たち、

ザ・ハードがお送りする。メインパーソナリティーは私、ブレイヴ・

ザ・ハードが務めさせていただきます！」

ジ「とはいってもよ、トリックじゃねえが少しばかり華がねえよな。」

ト「全くだ。幼女受けしない黒ボット、幼女受けしないガオガイ

ガー。それに対して愛くるしいボディーのこのトリック様しか華がないというのは、ゆゆしき事態だ。幼女がないと。」

ジ「テメエが一番ガキ受けしねえだろうがなんだその口と牙と舌は、ああ？引きちぎんぞボケ」

ト「や、やめろ！この舌は幼女をペロペロするための大事な舌なんだ！」

ジ「だったら少し黙ってるボケ、話が進まねえんだよ」

ブ「では、ザ・ハード情報局第一回で解説するのは、ズバリハンシんだ。」

ジ「ハンシンってのは、俺たちザ・ハードに一人ずつ存在している鍵みたいなもんだ。俺たちとそのハンシンが殺し合い、殺した方が【真の自分】になれる。」

ブ「私は根拠のない戯言だとは思っていたのだが……。実際にトリックを撃退したとなれば、私も好意を抱かざるを得ない。」

ジ「もうお前も黙ってる変態野郎」

ト「グフフ……このトリック・ザ・ハード様のハンシンはそれはもう愛らしい幼女なのだろうな……」

ジ「テメエのそんな願望が叶うわけ……」

リンダ「失礼します。ジャッジ・ザ・ハード様、ディレクターからです。」

ジ「ああ？なんだよ放送中に……」

ト「どうしたジャッジ？まさか、幼女がここに来るとか！？」

ジ「……テメエのハンシン、本当に幼女らしいぞ……」

ト「……」ジ「……」ブ「……」

ト「イイイイイイヤツホオオオオオオオオオ！」

ジ「トリックはあのまま放置しておいて、ハンシンに関する説明は何回かに分けてやるつもりだ、今回はここまでしておくぞ。」

ブ「あえて言わせてもらおう。覚えておくがいい、読者諸君！我等マジエコノヌはいつでも君の入信を待っているぞ！」

ジ「詐欺には気をつけるよー」

「この放送は、犯罪組織マジエコノヌの制作でお送りしました」

ト「イイイイイイイイヤツハアアアアアアアアア！」

ジ「まだやってるし」

ブ「切り捨て、御免！」

1 - 8 (前書き)

今回、あの面倒臭い奴再登場。

とつかいいい加減女神勢を（自主規制）させてもいいんじゃないかな。

出番相当先だから自分でも待ち遠しい。でも途中の展開が思いつかない。

どうしよう。どうしよう。

「ユニ。戦闘準備して町を出るぞ。」

部屋に入るなり、ユニに一言かけてから装備の点検を始める。

ユニは「何事よ、一体…」とかぶつくさ言っていたがネプギアに一泡吹かせる、と言ったら俄然やる気を出した。まったくわけがわからない。

「キラーマシンの詳細、ですか…?」

ネプギア達が去った後。私たちは教祖から情報を得ることにした。偶には嫌がらせもいいたろう。それに、モノによっては特別報酬でも貰えそうだしな。

「ああ。先ほど連中が言っていたキラーマシン。あんたらがやけに危惧していたみたいだからね。賞金でもかけてくれれば喜んで破壊に行くのだが。」

「……。わかりました。貴女方にキラーマシンの破壊、及び再出原因の排除を依頼します。」

「受諾した。報酬は?」

「…一体に付き、10000credit。」

「……場所は?」

「ルウィーの北西、巨大なキューブ上の建物、世界中の迷宮です。」

「…お気をつけて。」

ルウィーからVOBで十数分。巨大なキューブの建物とは実に言
えて妙だったというのがよくわかる謎の建築物が目の前に存在して
いた。透けてるし。

「やれやれ。VOBが無ければどれほどかかるのか…。」

「……………」

「…ユニ？」

先ほどから妙にユニが静かだ。いつもは煩い……というわけでもな
いが、結構喋るタイプだ。…なんだろう。

「ユニー。」

「ひゃあっ！？な、何！？」

「何じゃねえよ。これから殺し合いが始まるんだから油断と驕りは
厳禁だからな女神様。」

「わ、わかってるわよ！ただ、フロムがいるんだからそれなりにな
んとかなるんでしょうなーとか、考えてるわけじゃないわよ！？」

「聞いてねえよ。複数いることは確定してるんだから半分は譲つて
やるから。」

「…………えっ」

「女神が人間に頼るなド畜生。」

「うゝ…わかつたわよ……………」

「まあ、なるようになるだろうさ。」

キューブの内側に入ると、まるでドット絵を超ズームしたような場
所だった。目に悪い光景だ。

その上、そこら中にドラ エのキラ マシン2のようなロボが大量
に蔓延っている。

見た目が2なのに1とはこれいかに。

「ユニ、この一帯のは任せる。恐らく20体程度だろう。見る限り関節が弱そうだ。気張れよ！」
「え、ちよつと、フロム!？」

グレネードライフルを構え、ユニを置いて走り出す。ああいうロボットの生体認識はどうせ程度の知れた体温認識だろう。ジャミングでもすれば……まあ、チャフグレネードなんて物は持ち合わせてはいないのだが。

軽くスモークを撃ち込んでとにかく奥に突き進む。

数分ほど走り続けると、遠くから銃撃音が聞こえた。恐らくユニが始めたのだろう。

眼前には大量のキラーマシン。視界内にも15体はいる。

…まあ、あれだけ(全長5mぐらいか?)大きければ、もしかしたら弾薬を使う必要すらないかもしれない。

「認識 認識 認識」

「確認 確認 確認」

「生体反応 断定」

「排除 排除 排除」

どつやら、あちらは殺る気満々なようだ。

「はあ……。人間だけを殺す兵器かよ。」

私は銃を構え、キラーマシンの群に向かって走り出した。

〈視点【フロム】 【ユニ】〉

「こん、っのおー！」

二挺の銃を連結させて、キラーマシンの腕の細い部分、間接を狙い撃つ。

自分の弱点をわかっているかのように他のキラーマシンがカバー。

あーもう、何よこいつら……！

「わかったわよ……。銃身が焼けつくまで撃ち続けてあげる！」

二挺拳銃をしまい、別にアサルトライフルを二挺取り出し、そのままキラーマシンに向け引き金を引く。

反動で手が痺れそうになるけど、そこまで気にはならない。

ひたすら撃ち続けると、偶然当たったのか一体が地面に落ちる。

……。あんだけ撃つて一体。私の持つてるのなんて、軽火器ばかり

……。フロムに対抗してこんな銃ばかり。愛用の女神化するときの

銃も持つてきてないし……。

銃撃が止んだと理解したのか、キラーマシンが突然近づいてきた。

リロード、間に合わない……！

「お姉ちゃん……フロム……！」

咄嗟にライフルを前にだし、目をつぶる。

……。あれ？

「斬り捨て、ごめええええん！」

目を開けると、目の前ではキラーマシンとは別のロボット（？）が、私に背を向けて、佇んでいた。傍らには、真っ二つにされたキラーマシン。

…何事？

「気配を探り、只管探し求めた……。まさか君に出逢えようとは……。乙女座の私としては、センチメンタリズムな運命を感じずにはられない……。」「

「…はい……？」

「私の名はブレイヴ・ザ・ハード……。君の存在に心奪われた男だ！」

179

……今、フロムの気持ちが少しだけわかった気がする。
その時、私の思考は一言しか浮かばなかった。

（何か変なのが出てきた……。）

そう、この一言だけしか。

「ザ・ハード情報局」

ジャツジ「ザ・ハード情報局二回目。メインパーソナリティー代理のジャツジ・ザ・ハードだ。ブレイヴの奴は本編に出てきたからこっちはいないぞ。」

トリック「ザ・ハード四天王が参謀、トリック・ザ・ハードである。全世界の幼女よ、ボクチンが君たちをペろペろしてあげ」

ジ「メエそんなにその舌干切られてえみてえだな、ああ？」

ト「ぎゃああああああ！痛い！痛いぞ！幼女がペろペろできないじゃないかあ！」

ジ「ああ、そうだ。マジックが女神共のうんたらかんたらが終わったって言っていたな。せつかくだからあいつらをゲストとしていれておくか。」

ト「ならば、ぜひ幼女を「黙ってる」……ハイ」

ホワイトハート「……… ホワイトハート、です」

ジ「しかしまあ、デッドの奴がシユールとか言いたくなりそうな構図だよなあ……。俺、トリック。そしてこの女神。なんだこれ」

ト「むむ…幼女………ではないようだが…クツ、惜しい女神だ…！」
ジ「お前の存在が惜しいぞ、いろいろとな」

ホ「……。」

ジ「さて、おい女神。せつかくだからメエがハガキ読め。あんな第一回なのに妙にハガキ来てるしな。」

ホ「…わかった。【R・N…これから毎日マジエコン買おうぜ？さんから。ザ・ハード情報局の皆様、こんにちは。マジエコン又信者として、ドゥンドゥン聞こうと思っています。質問なのですが、ザ・ハード四天王の方々は仲がいいのですか？悪いのですか？気になったので。これから楽しみにしています。】」

ジ「一言でいえば最悪だ。」

ホ「……。」

ト「まあ、話を聞かないブレイヴ、殺人しか考えないジャツジ。祈っているだけで何もしないマジック。そんな無能ばかりの中このトリック様という天才がいるのだ。なじめないというのも無理はない。」

ジ「テメエ、そんなに殺されたいみてえだな……。」

ト「ほう、右腕がないとはいえこのトリック。ジャツジ程度に遅れは取らん！」

ジ「そうかい……。おい女神。相手してやれ。」

ホ「……わかった。」スツ

ト「お、おい待て！女神は卑怯だろう女神は！」

ジ「トリックの名を持つお前が言うことかねえ……。？やっちなえ、女神。」

ホ「……テンツェリントロンペ」

ト「アッー！！！！！！！！！！」

「この番組は犯罪組織マジエコンヌの制作でお送りしました」

ジ「しかしまあ、マジックの奴もよくやるよなあ……。俺には殺しし
か思いつかねえ。」

ホ「……。」

1 - 9 (前書き)

興く(投稿が)遅かったじゃないか……

当初に予定していた【手こずっているようだな、手を貸そう】と遅かったじゃないか……。】の両方について消火し終えて若干満足。一本満足。

〈視点【ユニ】〉

「君を探し求めていた、フェイク・ザ・ハード……。ジャッジの話やはり真実であったか！私が乙女座であったことをこれほど嬉しく思ったことはない…！」

「えーっと……。」

突然、私の目の前に現れたロボット（？）、ブレイヴ・ザ・ハード。…何だろう、よくわからないのに妙な既視感を感じる。

「認識 認識」

「非生命体 非生命体」

「生命体破壊 生命体破壊」

「ちょ、ちょっと！？あいつら動きだしたわよ！？」

「ふっ…心配は無用だと言わせてもらおう。私とフェイクの間に水入りは無用！」

私から向き直し、キラーマシンの軍団に向けて大剣を振るうブレイヴ。

…何だろう。この既視感（二回目）

「敵対反応 敵対反応」

「迎撃 迎撃」

「向かってくるか…！ならば見せよう、この私、ブレイヴ・ザ・ハードの奥義を！」

剣を構え、飛び上がったかと目で追うと、視界にブレイヴは存在していなかった。

突然、ガキインと金属音が鳴った。その方向を見ると、キラーマシンが先ほどと同じように真っ二つになっていた。

その後現在進行形でキラーマシンが続々と斬られて行った。しかし、肝心の斬っているだろうブレイヴの姿がまったく見えない。

……身体が微かに震える。多分、恐怖なんだろう。

「ふっ……。これにて打ち止めか。」

突然、ブレイヴの巨体が目の前に現れた。

この男(?)はあの巨体で、目に見えないスピードであるキラーマシンを易々と殲滅してしまった。

恐らく、私では、こいつにはかなわない。戦いになるかどうかすら怪しい。

……でも。私は女神だ。お姉ちゃんの、女神ノワールの妹なんだ。身体の震えを抑えながら、ブレイヴに二挺のアサルトライフルを向ける。

「なるほど。やる気になってくれたか。その心意気やよし！」

先ほどと同じように、ブレイヴが飛び上がる。

目で追うと、今度はちゃんと空中に存在していた。何を考えているのか知らないけど、空中なら当てられるはず、と考えて、ライフルを乱射する。

「その手を読まないと思っていたのか……?」

「なっ……!?!」

ブレイヴが剣をしまつと、上半身を180°回転させて背中羽を開いた。

……変形!?!

「人呼んで、ブレイヴスペシャル!」

「名前ダサッ!?!」

名前に一瞬緊張感を失ったが、変形したブレイヴは本当に速い。目で追えないほどだ。
なんとかしないと、見失って……!

「アンドリバーズ!」

「えっ……」

いつの間にか再度変形し、大剣を向けていたブレイヴ。
後ろからで、間に合わな……

「……………。ここまでだ。」

「…何よ。情けのつもり?」

少し勢いをつければ私を切れそうな所を、ブレイヴは寸前で止めた。
……これで、三連敗。ネプギア、キラーマシン、ブレイヴ……。何よ、私、弱いじゃない……………。

「邪魔が入った。決着は後日。さらば!」

ブレイヴが変形し、空中を飛んで消えて行った。

……私の周りにはブレイヴが駆逐したキラーマシン。

なんだろう。この、変な感じ…全部、どうでもいいや……。

「…ニちゃ…？…ちゃん！」

〈視点【ユニ】 【フロム】〉

「これで12体、か。」

両腕関節を粉碎され、無力化されたのが7体、同士討ちで核を破壊されたであろう奴が3体。NIOHで貫いたのが2体。

攻撃手段が両腕の武器のみ、尻尾と思わしき部分は浮力装置かな。あれで攻撃したら衝撃でうけなくなる等の危険があるから使えないのだろう。私にとってはありがたい話だ。

視界にはまだ…最低10体はいそうだ。

弾薬の心配はないが、多少の疲れが出てきた。隠れ出での市街戦とは別に常に動き回る必要があるこんな奴らだ。気配も存在しない。駆動音が聞こえる程度に出ている本当に助かった。

「排除 排除 排除」

「ああもう、学習装置つてもんはねえのかよテメエら！」

大きく振った右手の斧を軽く避け、関節に向けてグレネードを撃ち込み、決る。

なんかもう、単調な作業になってきている。緊張感ねえなあ…。そこまで危惧するような…ものか。

スピードもそれなり、威力は抜群。強度も関節を除けばかなり強固だ。弱点を知らずにやれば、確かに勝てないだろう。ユニも7体ぐらいは破壊しておいてくれたほうがいいのだが…。

つと、14体目。

…若干行動パターンも読めた。破壊までの最適化手順もできている。
……少しペースを上げるか。

数分後。周りには大体30体前後のキラーマシンの残骸。

一体の上に座り、持ってきた飲料水（ペットボトル）を一気飲み。
あー、水分補給大事ホント大事。

飲み干したペットボトルを投げ捨て、周りに意識を割く。銃声はない。あっちも終わったみたいだが…。

こっちに向かってくる足音が複数。この状況でこんなところに来る集団と言えは……

「……キラーマシンが……こんなに……!?!?」

「まさか、たった一人でこの量を……!」

そう、ネプギア達だ。

「遅かったじゃないか……。目的は既に果たしたよ、私たちがな。」

連中に向け、銃を突きつけて、私はそう言い放った。

1 - 9 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ジャツジ(以下ジ)「ブレイヴの奴、大した活躍してんなあ。」

トリック(以下ト)「全くだ。さて、ザ・ハード情報局を始めよう。今回のゲストはどうするのだ?」

ジ「用意済みだ。おい!」

ブラックハート(以下ブラ)「はい……。」

ト「…前回の奴と大して反応が変わっていないぞ、ジャツジ!」

ジ「本編中にも言ってるんだろ、大した反応もしねエ女神を見張ってるってよ。」

ト「むむ…女神に幼女がいないことが悔やまれる……。」

ジ(候補生にはいるけどな)

ト「何か言ったかジャツジ」

ジ「さてね。さて、今回の説明テーマ、ハンシンその二だ。」

ジ「今回や少し前を見て思った奴もいるんじゃないか?俺たちが何時【ハンシンでの呼び名を知った】のか。」

ト「…ふむ。なんの疑問もなくデッドやフェイクと呼んでいるな。」

ジ「まあ大した理由もねえよ。見て、そいつが自分のハンシンだとわかって、自然と名前が思い浮かぶんだよ。……俺とデッド。ジャツジと黒ガキ。何か名前が繋がって…そうで対して繋がってないな。」

ト「はやくボクチンのハンシンもこないかなあ はやく思いっきりペロペロ「テメエまだ懲りてねえか」当然だ!幼女をペロペロすることこそが我が生きがい!」

ジ「何でそんなことを断言できるんだかね……。また女神に殺られてえか?」

ト「…すまない。それは勘弁してくれ。」

ジ「幼女幼女とド低能はこれだから困る。常にさまざまな殺し方を考えている俺様を見習えドボケ。」

ト「お前も対して変わらないだろっジャッジ！」

ジ「アゝアゝ!?!文句あんのか?」

ト「今日こそは堪忍袋の緒が切れたぞジャッジ!懲らしめてくれよう!」

ジ「おっしゃあ、一度ザ・ハードをこの手でぶっ殺してみたかったんだ!」

ブラ「……。」

「この放送は犯罪組織マジエコンヌの制作でお送りしました。」

パープルハート「なんでこいつらこんなことやってるんだろっ……。」

1 - 10 (前書き)

一章も地味に十話突入。でもまだ2/5ぐらい(のはず)。

徐々に暗くなっていく(ように頑張っている)ストーリー。常に支配ENDを見た時のテンションで読むことをオススメします(今更)。

……というか、もうメーカー云々関係ないよね、単なるフロムって名前オリキャラだよな。

「……あんたが、キラーマシン達を？」

コートの少女（アイエフと言ったっけか）が私に敵意をまき散らしながら話しかける。

どれだけ敵視されてるんだろうね、私は。

「まあね。教祖から依頼を受けて殲滅中。意外に弱かったな。ユニの奴もあっさり終わらせたようだし。」

「……ユニなら、さつき気絶していたところを保護したわ。周りには大量のキラーマシンの残骸があった。」

「なんだかんだであいつも殲滅したか。となれば、あとはあんたらの仕事だ。ユニを保護してくれた礼は言うが、まあそれだけ。これでも最近金欠気味でね。」

「……言っとくけど、少なくとも私はあんたを信用する気はないから。」

「依頼主でもない相手に信用される筋合いもないさ。じゃ、あとは任せた。まだキラーマシンがいたら関節や尻尾を狙いな。簡単に無力化できるからよ。」

「……………」

ネプギア達の横を通り、迷宮の外に向かう。連中も奥に向かうようだ。

通り過ぎる時、他が進むなか一人残っていたネプギアが私に声をかけた。

「貴女が何を考えているかはわかりません。でも、ユニちゃんと友達なら、私とも友達になれるですよ……？」

「さてね。私は傭兵だ。何時誰が何故敵かなんて依頼主次第さ。私を雇えば、友達にも戦友にもなれるだろう。」

「………… ジャッジ・ザ・ハード。彼のことを知っていれば、何時か教えてください。」

「…………。失礼するよ。」

VOBでルウィーに帰る途中。私は物思いに耽っていた。

三年前、行方不明になった女神達の中唯一生還した女神候補生、ネプギア。

………… ジャッジを知っていても不思議ではない。なら何がおかしいか。【何故私とジャッジに関連性があると思ったのか】だ。

デッド・ザ・ハードの名はそれこそジャッジ等ザ・ハード連中しか知らないはずだ。

…………。なんだ。ネプギア、何を知っている？

ジャッジの【ハンシンは人間とは限らない】。これはおそらくユニのことだろう。

…………。ネプギア。恐らく目下の最凶の敵。ゲームギョウ界のプラネテューヌシアアが圧倒的に増えていることも納得できる。ラストেশヨン・ルウィーもついでに回復しているようだが、どさくさに紛れてシアアを差し込んでいる。

…ダメだ。情報が少ない。とりあえず、ユニを迎えに行くかな。

「ちーっすフロム屋です。」

「おかえりなさい、フロムさん。ユニさんなら、部屋で休んでいま

すよ。」

「……依頼は失敗だ。報酬は貰えないよ。ユニを運んできた奴って誰かわかる？」

「…それは、がすとですよ。」

振り返ると、デカイ帽子(?)を被った少女が佇んでいた。

…何か、表情に憂いがある。……なんだろうか。

「がすとは、あなたとおはなししたかったです。少しつら貸しやがってほしいですの。」

「……ユニは大丈夫なのか？」

「もんだいなのですの。肉体的そんなしょうもなかったですよ。」

ルウイーのシンボル、教会兼……塔。

そのそれなりに高層部、展望台に私と彼女、がすとはいた。

「……傭兵、フロムでよかったですの？」

「ああ。依頼か？」

「すこし、相談にのってほしかったのですの。…フロムは、ザ・ハードというものをしているのですの？」

「……知っているとしたら？」

「だとしたら…がすとを、ザ・ハードに会わせてほしいですよ。」

「……………」

「……その様子だと、しっているみたいですの。……ハンシン、勿論、しっているはずですよ。」

「…あなたがハンシンだとして、私にそれを話してどうなる？私がザ・ハードなんてものを知らないかもしれないぞ？」

「そんなことはありませんの。がすとは、導かれてしまったので

すの。」
「……詳しく聞いじう。」

〈視点【フロム】 【がすと語り】〉

がすとは錬金術師、という職業をしています。その名の通り錬金術と言う、いわば一種の合成術で生計を立てているのです。

…がすとの故郷では、その錬金術が盛んで、国からの錬金術の依頼があつたりもするのです。

がすとは、ある錬金術の学校の生徒だったのです。所謂飛び級ですの。

がすとはもともと孤児で、生きるため、どうしても金が必要だと思つていたのです。そこで残っていた家、アトリエを使って錬金術を勉強しながら生きていたのです。

ある時、学校の錬金術の卒業試験で、アトリエで店を開くことになったのです。がすとは自前のアトリエの場所もよく、順調に、快調に進んでいたのです。

……でも、長くは続かなかつたのです。

ある日、がすとのアトリエに城の兵隊が押し入ってきたのです。何かと思えば、がすとが違法な商売をしている、と通報があつた、と。

がすとの故郷は錬金術を押ししているだけあつて、法律も結構きつちりしてるのです。

その通報は、がすとのクラスメイトからのものだったのです。

数か月前、そのクラスメイトが一度がすとのアトリエに来ていたのです。

がすとは、必死に無実を訴えたのです。でも、誰も信じてはくれなかつた。クラスメイトは一人も。

……がすとは国を追われ、放浪していたのです。

そしてある夜。夢で、女の人と会ったのです。あのひとは、【マジック・ザ・ハード】と言っていたのです。あのひとは、【ザ・ハード】を、我等を探せ。我等を見つけることができる、世界に自分を知らしめることができる、自らのあらゆる幸せを謳歌できる】と。

……そして、いつしかルウィーに流れ着いていたのです。

～【がすと語り】 【フロム】～

淡々と話すがすと目の目に光は無く、絶望という言葉がよく似合う状態だった。

…：そつえば、謁見の間で見た時も、私を光の無い目で見つめていたな。

「……私は、デスペア・ザ・ハード。絶望の名を持つザ・ハードですの。」

「…：デッド・ザ・ハード。死の名を持つザ・ハードだ。」

「絶望。私には、とても似合う響きだと思っているのです。……フロム。フロムは、希望とか、奇跡とか、魔法とか。そういう、自分に都合のいいこと、考えたりはするのですか？」

「…：しないとえば嘘になるが、そうすることは出来ない。傭兵つう工作上、現実と向き合わなければ生き残ることはできやしない。」

「……：そうですね。そう思っているなんて、フロムは大人ですの。私の錬金術を見ると、ルウィーの人たちはみんな奇跡だ、魔法だなんていうのですの。……でも、この世に希望なんてものは既に残ってはいないのですの。」

「奇跡も魔法も、ないんですの。」

見るからに幼い、トリックすら反応しそうなほど幼く見える目の前の幼女。

しかし今感じる風貌は、達観したような雰囲気醸し出していた。同時に、不思議と既視感を感じていた。信賴していた者の裏切り。何もかもに絶望し、希望を失う。

…信じられるのは、自分だけ。

……そう、か。私か。

1 - 10 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ジャツジ「大分一章も佳境に入って来たな。リーンボックスにすら行っていないのに」

ブレイヴ「帰還の言葉を述べさせてもらおう！ただいま！」

ジャツジ「うっせえ、静かに帰ってこれねえのかテメエは。」

ブレイヴ「あえて言わせてもらおう。不可能であると！帰った時にはただいまと言う、私は常識を重んじる人間だ！」

ジャツジ「テメエ人間じゃねえだろ。てか常識重んじるならまずうるせえ。黙れ。」

ブレイヴ「断固辞退する。」

ジャツジ「うっせえ……。まあいい、ザ・ハード情報局……。つと、トリックの奴どこ行った？」

ブレイヴ「トリックならば、先ほど【少女分が足りない！】と言いながら出て行った。」

ジャツジ「今度女神共にボコらせておくか。さて、今回のザ・ハード情報局もまあ、またハンシンだ。今回は【がすと】こと【デスペア・ザ・ハード】だ。」

ブレイヴ「これでハンシンも三人か。」

ジャツジ「そうだな。マジックの奴も何かちよつとだけ出てきてやるし。」

ブレイヴ「ああ、もうわかりきっているだろうが、デスペア・ザ・ハードはトリックのハンシンだ。マジックのハンシンは作者もいまだに考え付いていない。」

ジャツジ「瞬紫のガキ（ネプギア）つつう案も出ていたが黒ガキ（ユニ）がいる以上被るのはよくない、と判断して没。未だ決まっていない。」

ブレイヴ「常にその場しのぎしか考えない、か……。私も堪忍袋の

緒が切れそうだ。」

ジャツジ「放送終わってからにしろ。あ、そうそう。このザ・ハー
ド情報局で何か聞きたいことあったら感想か何かで言ってくれ。作
者ならば喜んで回答するだろう。」

ブレイヴ「勿論、今後のネタバレになる場合は控えさせていただきます。
」

ジャツジ「とは言っても一話一話が80%ぐらいその場の思い付き
だしな。ネタバレもなにもないんじゃないかねえのか？」

ブレイヴ「大筋（と言うより断片的）は考えている。皆が望んだま
ど　マ　カネタもやる予定だ。今回は別にしてな。」

ジャツジ「…さて。今回は割かし真面目にやったな。トリックがい
ねえと何だかんだで進むもんだ。」

ブレイヴ「全くだ。さて、私はフェイクを追うことにしよう。」
ジャツジ「ストーリーカーも程々になー」

「この放送は、犯罪組織マジエコノミの制作でお送りしました」

パープルハート（洗脳されると、三年以上パイプに縛られるの、
どっちがマシなんでしょうね……。）

1 - 1 1 (前書き)

今回、この小説の重大な分かれ目。

フロムという以上、所々に大きな分かれ道があるのは必定。

……どうしよう。

「【パープルハート】」

……このギョウカイ墓場でジャッジ・ザ・ハードに敗れ、囚われてから早三年。

この縛られた体勢にも慣れたが、一切変わらない景色に、徐々に精神も弱まってくる。

少し前。私の親友、アイエフとコンパが私達を助けに来た。がその作戦はほぼ失敗。ネプギアを連れ出してくれたのが唯一の望みだった。

……いつかネプギアが、助けてくれる。

……そう、思っていた。

「……よう、ムラサキ。」

「……何の用？私はまだ、絶望してはいない……！」

「俺としてはためえが絶望しようがしまいがどうでもいいんだよ。

ナニカを殺せればな。それに、あいつらのようになれば、楽になれるかもしれないぞ？」

ジャッジの斧が向いた先。

私の仲間、ブラックハート、ホワイトハート、グリーンハート。

彼女らは縛られることなく、ただ佇んでいる。ただし、目の光を無くして。

「私は、楽な喜びより苦難の先の喜びを取るタイプなのよ。いい加

減諦めてくれる？ネプギアを逃がした時点で、あんた達は詰んでい
る…！」

「ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ…！そうかい…。」

「…ジャツジ。手こずっているようだな。」

突然現れた、黄色いぬいぐるみみたいなマジエコンヌ又四天王のひと
り、トリック・ザ・ハード。

…私相手にザ・ハード二人。女神を手中に収めることはそれほど
までに重要、ということにはわかつているのだが…。

「プラネテューヌが女神はこのトリック・ザ・ハードに任せてくれ
たまえ。ジャツジ。貴様はほかの女神の監視でもしたらどうだ？」

「…チッ」

「…さて。直接対面するのは初めてかもしれんな。我が名はトリッ
ク・ザ・ハード。お前たち女神を絶望させることが今の役目。」

「ジャツジにも言ったけど、あんたたちがネプギアを逃がしてくれ
たおかげで絶望する気はないわ。いつかネプギアが助けてくれる。

私はずつとそう信じるだけよ。」

「…ふ、む。大した姉妹愛だな。実に気に食わん。それに比べて
ブラックハートとホワイトハートは実に薄情だな。妹がいるにも関
わらず、あっさりと絶望してしまった。女神の名折れだと、思っ
ているのではないかな？」

「…チッ」

「即答出来ないというのは少なからず思っているということだ。女
神は本来自らのシエアを賭けて戦いあう間柄だからな。疎ましく思
うのも仕方のないことだ。」

「そんなこと、そんなことない…！私は、ノワールも、ブランも、
ベールも…！ネプギアも、ユニも、ロムもラムも！私は、皆好きだ

から……!!」

「そんなことを無理して言う必要はない。事実、三年以上前には戦っていただろう？我らマジエコノアの侵略が始まる前までは。」

「それはっ……女神は、シエアがなきゃ生きられないから……!!」

「当然だ。女神はシエアがなければ生きられない。何よりも生きるためだ。生物なら当然の選択だ。例えば女神であっても、生存本能というものは存在するからな。仕方ないのだ。」

「なら……!!」

「そう。仕方がない。シエアは無限に有限だ。どうしても、どうしても他者より先へ、他者より上に行きたがる。仕方がないことなのだ。だから、例えば女神が死のうとも、仕方がないことなのだ。弱者は強者に食われ、吸収される。弱肉強食の摂理は女神のシエア争いにも勿論当てはまるのだ。」

「……」

「そうだ。一つ、いいことを教えてあげよう。この映像を見てくれたまえ。」

……これは、リゾート地……？ラストイションかしら……。

映っているのは私と同じ、紫色の髪の……ネプギア!?

「そう。これに映っているのは君の妹、プラネテューアの女神候補生ネプギアだ。そしてもう一人映っているのは、ラストイションの女神候補生ユニ。」

【彼女らは何故、戦っているのかな?】

トリックが見せた映像では、ユニと、ネプギアが戦っていた。それも、女神化するほどの、本気で。

ネプギアとユニ。直接会ったことはなかったけど、私やノワールのイメージが映っていたはず。

…何故、戦っているの……………？

「そう！君たち女神がいなくなつて、女神のシエアは激減した。勿論女神だけではなく、女神候補生もシエアが無ければ生きることができない。だから戦っている。生存本能の赴くままに、互いのシエアを奪い合っているのだ。」

「ネプギア……………ユニ……………」

「残念ながらこれは録画だね。この結末は撮ることができなかったんだ。もしかしたらこれでネプギアが敗北し、死亡。そしてラストイションにシエアが吸収されるかもしれない。逆もしかりだ。」

「……………」

「どうか？いつまでもなけなしのシエアを奪い合うより、我らの施しを受けてみないか？我らは寛大だ。求めるものには与えよう。望むものには叶えよう。我らが犯罪神マジエコンヌ。犯罪神だと臆することはない。とても慈愛にあふれるお方だ。君たち女神にも、施しを下さるだろう。」

「あ、あ……………」

徐々に、目の前が暗くなってくる。自分が、絶望しかけていることがわかる。

でも、何もできない。反論、できない。

……………ごめんなさ、い……………ネプギア……………。

〈視点【パープルハート】 【ジャッジ・ザ・ハード】〉

「ジャッジー！パープルハートの洗脳を完了したぞ。」

「お前、自分を参謀つつたりしてたけど本当だったんだな…。」
「やかましい！さて、あとは女神候補生たちを待つのみだ。再び女神たちを縛っておくのだ。」

「…あ？なんだってんなことしなくちゃなんねえんだよ。」

「頭の弱い奴め。信仰とは、畏れだ。恐怖だ。絶望だ。トリック・ザ・ハードの仕掛け（トリック）を信用したまえ。」

「……チツ。わかったよ。」

〈視点【ジャッジ・ザ・ハード】 【フロム】〉

「じゃあ、がすとは女神さま達のところに行くですよ。」

「ザ・ハード。あまり人に言わない方がいい。言ってもユニだ。それ以外には決して言うな。いいな？」

「わかってるですよ。がすとは口が堅くてとっても用心深いんですよ…それに、言って余計に敵を増やすのは私も望むところではないですよ。」

「…そうかい。」

がすと…いや、デスペアと別れ、私は部屋に戻った。…ユニは大丈夫だろうか。

「ユニ…いない？…どっかに言ったか、あの駄女神。」

部屋に入ると、ユニの姿がない。気絶らしいが、回復してどこかに行っただろう。

手のかかる女神だ。

「……あ、フロム…。」

「よう、女神様。生きてるか？」

待つこと数分。ユニが帰ってきた、が……。表情が暗い。

……最近暗い奴としか会っていない気がする。

「……その、ごめん、なさい。私が足引つ張ったから……」

「別に。女神様の落ち度ではないでしょう。」

「……！そ、そう、よね……！私は、ちょっと油断して、疲れちゃっただけで……」

「で、殲滅したのは誰だ。」

「……わ、わたしよ、当然！私は、女神よ！？」

「ユニの武器に斬撃ができるものがあるとは思えない。それにあれの装甲をバツサリ切るような筋力もないだろう。お前が倒せたのは精々1、2体だろう。」

「……」

「……」

「……ブレイヴ・ザ・ハード。って名乗っていたわ。」

「ブレイヴ……。あいつが……。」

「知って、いるの……？」

「多少な。……ユニ。何か言われたか？」

「……私を、フェイク・ザ・ハードって、呼んでいたわ。」

「……だろうな。なら、話すしかないだろうな。」

私は、ユニにほとんどのことを話した。

ジャッジ・ザ・ハードのこと。ハンシンのこと。マジエコンヌのこと。

……私が知る限りのこと。

「マジエコソヌの配下、四天王の半身……。私みたいな、女神がスパイみたいな存在だったなんてね……。」

「私もそう思っていたさ。まあ、私も徐々に慣れてきたんだけどな。ジャッジの奴の影響だとは思っているが。」

「……私も、そんな感じになるの……?」

「さてね。デッドの名を持つ私が殺しを楽しむように、デスペアの名を持つがすがすが希望を感じなくなるように。フェイクの名を持つユニも、恐らくは何か起こるんだろ。」

「……ごめん。少し、外の空気吸ってくる。」

ユニが出て行った部屋の中。

……。

私は、今思っているのはジャッジと出会い、殺し合い、真の自分になること。

……だったら、別のザ・ハードはどうするんだ?恐らく、味方ではあるのだろう。

なら私は、ユニに対して何をすべきなのか。

人間として殺すべきか。ザ・ハードとして味方すべきか……。

…人間には人生の分かれ目ってのが多くあるが、ここが私の人生の分かれ道か。

……どうしたものか、かね。

1 - 11 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ジャツジ「ザハードジョウホウキョク」

女神四人「ぱちぱちぱちぱち」

ジャツジ「……おい、トリック」

トリック「なんだねジャツジ。」

ジャツジ「あいつらに効果音をやらせるな、余計むなしくなる」

トリック「……次回はやめさせよう。」

ジャツジ「そんなわけで今回のザ・ハード情報局。感想なんて二人ぐらいしか来ないだろうけど緊急告知だ。」

トリック「正直嫌な予感しかししない。幼女は絡むのか？」

ジャツジ「お前関係ねえよ。今回の本編最後、【人間としてユニを殺すべきか】【ザ・ハードとしてユニに味方すべきか】の二つの選択肢がある。これをどうすべきか今作者は非常に悩んでいる。具体的に説明すると暴君ハバネロか激カラムーチョのどちらかの選択並だ。」

トリック「基準がわかりにくすぎるだろうに。いくなれば、女神候補生のあの活発な方と、大人しい方のどちらを（直接的な意味で）食べるかの悩みぐらい……」

ジャツジ「そつちもわかりずれえよ!」

ジャツジ「つつつわけで、暫く感想制限を投げ捨てる。次話を書くまでに……感想、来るといいな……」

トリック「わかりにくい遠い目をするんじゃない。」

ジャツジ「ちなみに、作者的な正規ルートは前者、【人間として殺すべき】だ。こつちだと超BADENDフラグが建つ。BADENDが正規ルートって結構ありそうだよな。」

トリック「後者、【ザ・ハードとして味方すべき】の場合、ユニ

とがすとちゃんにフラグが建つ。出来ることならボクチンががすとちゃんにフラグを建ててペろペろ…」
ジャツジ「やっちまえ」

パープルハート「エクスブレイド」

グリーンハート「シレットスピア」

ブラックハート「トルネイドソード」

ホワイトハート「テートラシューラク」

トリック「アツーーーーー!!!……!!!」

「この放送は、犯罪組織マジエコノミの制作でお送りしました」

フロム「またこのオチだよ（失笑）」

1 - 1 2 (前書き)

前回の感想が2：1だったのでユニルートになりましたードンドン
パフパフ！。

人間ルートと言ってくれた椿さんマジすいませんでした。

さて、ユニとラブラブさせながらダークにする方法を学ばなきゃな
……。

「……………」

ユニがない部屋。短期間でどうにも奴は私の頭の中に居ついでいるようだ。

私の頭には色んなのが居つくなあ、ったく。

「……………デッド・ザ・ハード……………」

ふと、自分の名を呟く。少し前まで頑なに否定していたというのに、何故ここまで違和感がなくなってしまったのだろうか。

デッド、死。死を冠する人間。

……………私は、人間のはずだ。

だが、私はザ・ハードになってしまった。人間が、人間でなくなっってしまった。

私は、女神に籠絡されたグズ共を人間とは認めていなかったのだが、まさか私自身が人間でなくなるとは。

ハッ、全く笑い話にもならない。

……………ユニ。ブラックシスター。フェイク・ザ・ハード。

女神候補生としての、女神としての、ザ・ハードとしての名前。

……………私は、ザ・ハードになってしまった。人間ではない。

人間を救うのはいつだって人間だ。人間ではなくなった私に、人間は救えない。

なら、ザ・ハードになった私は、何ができる。死の名の通り、殺すだけか。

……ああ、そうだ。殺すだけだ。殺すことで、何ができる。
一を捨て、二を救う。十を捨てて、百を救う。
……ダメだ。やめやめ。私に世界をどうするだとか見知らぬ人を助けるだとか正義感溢れる漫画のヒーローは不似合だ。私は殺し屋。
そこはどうしたって変わらない。

殺し屋ができること。ネプギアならば、殺さなくてもできる道はある、とでもいうんだろう。正統派優等生なんてそんなものだ。だとしたら、ユニ。癩だが、あいつに流れを任せるのもいいかもしれない。それに、私はあいつに雇われているわけだ。

【ユニの師匠及び世話】が依頼内容なら、あいつのメンタルケアも仕事の内か。あーやだやだ。そういうの苦手なんだよね。

起き上がり、備え付けの洗面台で軽く顔を洗う。

ルウイーの気候上、どうしても寒く、冷たい。
だが、頭は冷えた。

何時だつて必要なのは冷静さ。冷静さを失えば、待つのは死だけ。

……生き残るのは私と、ユニと、がすとだ。ド畜生のロボット共。

〈視点【フロム】 【ユニ】〉

さつきまで、フロムがいた展望台。

先ほど、私は意識を取り戻して身体ならし程度に歩いていたら、フロムを見つけた。誰か、大きな帽子をかぶった女の子と話していた。……その内容は、私が聞くべきことじゃなかったのかもしれない。

あの子の名は、デスペア・ザ・ハード。

フロムは、デッド・ザ・ハード。

そして私は、フェイク・ザ・ハード。

あの時はザ・ハードなんて何なのか知らなかった。だから、フロムと同じザ・ハードなんてって、少しだけ嬉しく思ったりもしていた。

フロムが部屋に戻った後、時間を見計らって部屋に戻り、フロムと話した。

ザ・ハード。マジエコヌ。ハンシン。

女神が敵対する犯罪組織マジエコヌ。その四天王と言っべき存在の、半身。それが、フロムたち。そして、私。

そんな話を聞いて動転した私は、部屋を出、走り続けた。ただ、認めたくなかったんだ。

女神候補生の私が、お姉ちゃんの妹の私が。知らずの内にマジエコヌのスパイになっていたなんて。

……。

寒い。ラスティションの気候は結構安定、どちらかと言えば若干暖かい。

それとは逆に雪地帯のルウィーだと、私の服はどうにも合わない。

…今更かもね。

今までは一切気にしていなかったけど、こうして落ち込むと余計に寒く感じる。

私、どうすればいいんだろう。

私がマジエコヌの手下だったのなら、お姉ちゃんにも、ケイにも顔向けができない。

……少し、街を歩こう。フロムには、悪いことしちゃったな。帰ったら、謝ろう。

街を歩くと、所々に見える子供たち。横目に、子供たちの集団が見える。

子供たちの手に持っているのは、マジエコン。女神が駆逐しなければならぬもの。

……でも、私は、女神じゃなくてザ・ハード。

自然と、子供たちに話しかけていた。

「ねえ、君たち。何してるの……？」

「おねえちゃん知らないのー？今日からマジエコンで新しいゲームが落とせるようになったんだよー！」

「そう……すごいわね……。」

無。今の私の感情を一文であらわすところだろう。少し前の私や、ネプギアなら、即座に取り上げるだろうに、今の私は、肯定した。マジエコンをだ。

「そうだ！おねえちゃん、マジエコン持ってないんでしょ？ひとつあげる！」

「いらないわよ。私、ゲームあまり持ってないの。」

「そっかー……。じゃあお姉ちゃん、またねー！」

「またねー！」

「ええ、またね……。」

……この世界、ゲームギョウ界。マジエコン又にも侵略され、世界のシェアの80%以上を奪い去って行った。

……そんな圧倒的勢力差を、どうして埋められるのだろうか。

「あ、あんた！こんなところで何してんのよー！」

「……あなた達……。」

「どうし、たの……？」

ロムとラムだ。恐らく彼女らも散歩なのだろう。

……彼女らは、この世界に希望を持っているのだろうか。

「……別に。何でもないわよ。」

とっさにいつも通りの顔をして、二人に対応する。

……こんな私を、誰にも知られなくなかったから。

「ほら、もうすぐ夜でしょ！あんたたちももう帰ったら？教祖の人、心配してるかもよ？」

「あ、確かに！いこ、ロムちゃん！」

「う、うん……。」

二人に手を振り、また一人ぼっち。

……がすとなら、フロムなら。同じザ・ハードなら。

こんな最低な私を、認めてくれるかな……。

……帰ろう。かえって、フロムに謝ろう。

〈視点【ユニ】 【フロム】〉

おかしい。

何がおかしいか。ユニも、ロムもラムもない。

この塔の中は割かし探し回った。展望台もな。

教祖にも聞いたが、「お散歩でしょう。遅くなる前に帰ってきなさいといつも言っていますし。すぐ帰ってきますよ。」と返された。何ともお惚け教祖だ。

結局、教祖以外ロクに見つけられずに部屋に戻ってきてしまった。

……暗い部屋。部屋を常時暗くしておけば、夜目が効くようになり、視界の幅も広くなる。言わば一種の訓練だ。

まあ、今考えたのだがな。

くだらないことを考えながら、適当に食料をだし、貪る。

……チヨコ味だ。不味い。

「フ、フロム……。ただいま……。」

数分後。ユニが帰って来たが、かなりおどおどしている。別人じゃないかこれ。

「おかえりなさいませ女神様。あと扉閉めろ」

「……もう、女神様なんて呼ばないですよ。ちゃんと名前で呼んで。」

「………どういう心境の変化……とは聞かないけど。世間体と言うものを考えてほしいね。」

「そんなの、私と貴女にはどうでもいいでしょ！？私も女神じゃなくなつて、あなたも人間じゃなくなつたのよ！」

「そうだな。……私たちは、ザ・ハードのハンシンだ。」

「なら、そうやって、余所余所しくしないでよ……もうネプギアと、仲直りなんてできやしない、ケイと軽口をたたきあうこともできない、お姉ちゃんに、顔向けできない……！」

ユニが、泣いていた。
あれだけプライドが高そうにしていたユニが、私の前で情けなく泣いていた。

……私は、何も言えなかった。

「ねえ、フロム……。ううん、デッド……。私たち、どうなっちゃうの……？」

「対応するザ・ハードと殺し合い、死ぬか、殺して【別の何か】になるか。」

「どちらにしろ、私たちが私たちでいられるのは短いのね……。」

「……ああ。」

「……デッド。」

「なんだ、フエイク」

「お願い……今、少しでも泣かせて……。そうしたら、もう、私を捨てるから……。」

ユニが私の胸に抱き着き、泣いた。

私には、抱きしめることも、頭をなでることもできなかつたけど、ただ黙ってユニの泣き声を聞きながら、窓越しに空を見ていた。

……自分を、人間を捨てるっていうのは、私にもまだできていないの
だろう。

そうすれば、今までの自分は全てなかったことになるのだから。

……私たちは、どうなってしまうのだろうか。

それはきつと、神でも知りえない。

1 - 12 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ジャツジ「おい。chapter1終わったぞ」

作者「いや、ノリで書き続けていたらいつのまにか…。」

ジャツジ「いつの間にかじゃねえよ、chapter0と対して長さ変わらねえじゃねえかよ、話数に至っては一話しか違わねえのかよ！」

作者「一話も多ければ十分だろ！」

ジャツジ「開き直んな！」

作者「さて、ユニルートに入ったことによりこれ以降ユニとイチヤラブすることが多くあるかもしれませんが、が！まあ暗いです。最近まで マギ に嵌ってねー。」

ジャツジ「おい、その言葉何回目だ」

作者「数えてない」

ジャツジ「【死の審判】」

作者「アッー！！！！」

「この放送は、犯罪組織マジエコンヌの制作でお送りしました」

「次回予告」

突きつけられた現実。ザ・ハードのハンシン。

ユニ、フロム、がすと。

三人の未来は二つに一つ、殺されるか、殺すか。

これは、人間でも、女神でもいられない。ただハンシンという存在の彼女らの、円舞曲……。

次回、超次元ゲームネプテューヌmk2+、chapter2。【

絶望奏でる彼の怨嗟】。

ユニ「もう、私にはあたししかないのよ……だから……。」

あなたは、信じられますか？

2・0（前書き）

今回、深刻な地の文不足注意。

地の文より会話文の方が思いついてしまっ。表現力不足びくん
びくん

「……………」

朝だ。いつの間にか寝ていたのだろうか。

今日は珍しく夢にジャッジが出てくることもなく、良い目覚め……

「う……フロムう……………」

じゃなかった。そうだ、こいつがいた。

恐らく女神の中で最もプライドとプレッシャーが強いであろうこいつが、受けた衝撃。

そんなものは私の知る余地はないのだが、まあ今のこいつにとって
は同族が最もほしい所なのだろう。

……ザ・ハードとして生きると決めてしまった以上、これに付き合
うことになるんだろうなあ……。今からでも憂鬱だ。

「おい、ユーニ。人の胸で泣きながら眠るんじゃないぞねえこちとら着替
え少ないんだ」
「ううう……………」

多少揺すってみるが、どうにも起きる気配がない。

……仕方がない。寒さは我慢しよう。

ユニが掴んでいるジャケットを犠牲に、布団から抜け出す。

……………寒っ。

替えの……………ない。……ふむ、どうしたものか。流石にワンピース（っ
ぽいの）だけだとどうにも寒い。本来ジャケット一着で何とかなる

ようなものでもないのだが意外になんとかなるのが私の（色々仕込める）ジャケットだ。

無いとどうにも寒い。むしろこれから布団に入りたくなくなるような寒さだ。朝の寒さって本当に怖い。

…やっぱジャケット着よう。流石にベッドから落とせば起きるだろう、こいつも。

ユニが掴んで離そうとしないジャケットを持ち、思いっきり引く。

「ひいえっああああー!？」

……物凄く奇妙な悲鳴と共にユニが転げ落ちた。

とりあえず奪い取ったジャケットに腕を通す。あー、寒さにも暑さにも対応できるって本当素敵。

「あ、つたたた……。あ、あれ、フロム？」

「何だよド畜生。こちらら朝から微妙な思いして機嫌が若干悪いんだが」

「あ、えーつと……。べ、別にいいじゃない!ほら、ね!？」

「疑問符付けんな、正直疑問持ってるのはこっちなんだから」

……おい待て、何でそこ照れる、何で顔を赤くする。

「とりあえず、これからやることを整理するぞ。」

「まず、私とユニの今までの目的。これはいわばネプギアのストーリーカーだな。」

「別にストーリーカーって言わなくてもいいんじゃないかな……」

「いいんだよわかりやすいから。そして、問題はその取り巻きだ。」

私の持つ端末から、画面が現れ、ネプギアやその連中の画像が出る。

「このアイエフ、コンパ、日本一とは私は過去に殺し合った仲でな若干嫌われている。」

「殺し合ったのに嫌われているもないでしょ……。」

「傭兵なら殺し合った次の日に味方つてのもよくある話なんだよ。」

それで、次にネプギアが向かうと思われる場所は、リーンボックスだ。」

「リーンボックス……。確か今は女神が存在しない国なのよね。」

「何故か女神候補生が存在しないことで三年前の女神失踪から即行でマジエコンヌの属国化した。現在ではルウィーより治安が悪いと言われているな。」

「でも、女神がいなくても教祖がいるでしょ？」

「教祖が何と言おうが宗教には偶像つてのが必要なんだよ。消えた偶像なんて何の価値も存在しない。」

「そう考えると、プラネテューヌもよく持ちこたえたわよね。」

「それはおそらく教祖、イストワールの手腕だろうな。プラネテューヌの教祖イストワールについてはお前のほうが知っているだろう。」

「まあ、それなりには……。」

「さて、リーンボックスへの定期便にVOBは乗せれたっけか……たしか違法改造してるんだよなあれ」

「ああ、違法改造してたんだ……。あれ、フロム。着信来てるわよ。ケイから。」

「……絶妙なタイミングだな」

『やあフロム。ユニもいるね。仕事はどうだい？』

「知らん。恐らく順調じゃねえの？ネプギア連中にはひどく嫌われていてね。」

「おや、また君も嫌われることをしたのかい。」

「白々しい……」

『先ほど西沢ミナから連絡が来てね。ネプギアが今日ルウィーを発つたらしいんだ。依頼は成功だよ。』

「そうですかい……。報酬はいつもの口座に。」

『振り込んでおくよ。とにかく、帰還してほしい。次の依頼が待っているんでね。引き続きネプギア達のストーリーカーをしてもらおうから。』

「……おい教祖、もしかして私らに盗聴器か何か仕掛けてないか？」

『流石にそんなことはしないさ。あまり余計に疑いをかけないでほしい。次の依頼に関しては帰還してからにしてほしい。』

「そうかい……。」

端末の通話を切り、一息。

… あー、私に安息の地はないのか、ない（自問自答）。

とりあえず立ち上がり、荷物を纏める。

次に行く場所はリーンボックス、ゲームギョウ界の南国だ。火山もあるしな。

ユニも急いで手荷物を粒子化させている。羨ましい機能だよド畜生。

ルウィー教会、謁見の間。珍しくロムとラムもいる。

「つつわけで、私らも依頼は終わったんで帰ることになったんで。」

「そうですか…寂しくなりますね。」

「ネプギアちゃん……ユニちゃん、また会える……？」

「当然でしょ。女神候補生同士なんだから。」

いつの間にかユニとロムは仲良くなっていたようだ。

しかしまあ、あんだだけ泣いて、絶望していたのにここまで立ち直るとは……。

フエイク（偽り）……ああ、そういうことが。

「それで、次にどこにいるかとかは……？」

「ま、ネプギアのストーカーが仕事なんだからリーンボックスだろ
うな。」

「リーンボックス……。」

「じゃあそういうことで。行くぞユニ。」

「はい。またね、ロム、ラム。」

「ばいばーい！」

「ばいばい……。」

ユニがロムとラムに手を振るのを横目に、教会を出る。

恐らくまた来ることになるんだろうが、この雪景色も今は見納め。

教会前に置いてあるVOBを起動させ、ユニを載せる。

……。

「おいユニ」

「……何？」

「……いいや、後で聞く。つかまってる」

「うん……。」

ユニが自分に抱き着くのを感じ、VOBのアクセルをかける。

騒音一歩手前の音と共に、一気に走り出す。

VOBで大体……どれぐらいだっけか。まあいい。速度第一で走って行くっ。

はい、とーちやく。

こういう移動って何かあればVOBの武器も使えるんだけど、出ないんだよね、ほんと。バイクに対してはモンスターも驚くのだろうか。

いつもの駐輪場にVOBを止め、近場のエレベーターで上層部にかかる。

数日ぶりのラステーションだが、ルウイーのイメージカラーが白に対してラステーションのイメージカラーが黒だからか、妙に視界が黒ばかりだ。

ルウイーに着いた時もこんな反応してたような、私。

エレベータの金網越しの海も久々に見る。

…そんな感傷に浸りたいのだが、その障害がここに一つ。

「……………」

そう、ユニだ。

ラステーションについてから、ユニが私の腕から離れようとしなない。ここはラステーションで、その女神候補生（ ）のユニが抱き着いている相手なんて、通常姉の女神ぐらいだろうに、これは若干視線が痛くなりそうだ。主に教祖の。

「……………」

私の腕に抱き着いてはいるようだが、視線は私を…というかおそろく何も見ていないのだろう。目に光がない。

ザ・ハードに浸食された奴らはどうしてこつ目に光がなくなるのだろうか。

もしかしたら私も目に光がなくなっていたりしているのだろうか。むむむ……。

つと、最上階。教会もある最上層だ。本来なら私は縁がないはずだったのだがね。

「…おかえり。まず状況の説明をお願いできないかな？」

「寧ろ私が説明してほしいんだが、こいつの心境を」

教会に着いても、ユニは相変わらず目の光を失ったレイプ目で私の腕に抱き着いている。

ツンデレなんてなかった。

「ラストイションについてからこんな感じ。恐らく何言っても無駄だろう。」

「一体どんな方法でユニを落としたんだい？興味を抱くよ。」

「抱くな。頼むから、このまま依頼の話をしてくれ。」

「ふむ、じゃあ始めようか。」

「これからの君たちの仕事は、リーンボックスでのシェアの差し込みだ。以前ネプギアがラストイションのシェアを回復させていたとき、こつそりプラネテューヌのシェアを差し込まれていてね。どうやらルウィーでも同様の出来事が起こっているようだ。なかなかやつてくれるよ。」

「それで、先に取っておくと？」

「そう。リーンボックスのシエアを軽く落としておくために、移動の際、船にこれを仕掛けてほしい。」

そういつて教祖が私に箱のようなものを手渡す。

リーンボックスのシエアを落とす、移動、箱……つまり…

「そう、爆薬だ。あの定期船はラストイションとリーンボックスの協議でできたものなんだけど、それをリーンボックス側の不手際と見せかけて事故を起こすんだ。できればそれなりに人数は犠牲にしてほしいね。昼の便に爆発するように朝の便に乗り、そうだね…降りるときに1時間でセットしておいてほしい。その便にラストイションの重役は乗らないように手配しておいてあるから、犠牲になるのは一般人だ。」

「…ハッ、まだド畜生のような依頼をしてくれる。人の命を何だと思っているんだか。」

「傭兵の君が言うのかい？傭兵の君にとっては金は命より重いのではないかな？」

「……完敗だ。あんたに口では勝てる気がしない。」

「光栄だね。じゃあ、頼んだよ。これからすぐの便だ。運が良ければネプギアにも会えるかもね。」

「…それだけは勘弁願いたいね、ストーカーが見つかったら洒落にならない。」

「そうかい。」

爆弾をしまって、席を立つ。結局ユニは一切喋らず私の腕に抱き着いたまま。何があった…とは言えないよなあ。

色々と混乱しかけている頭のまま、私たちは教会を後にした。

2 - 0 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ジャッジ「さて、chapter 2 いわばリーンボックス編だ。」

トリック「本来ならば未だ登場したことあるのはジャッジのみだな。」

ジャッジ「そういえば、今回にあった依頼、どこかで聞いたことがあるような……」

トリック「詳しくはアーマードコア3をやってみてほしい。マジエコンで落としてもいいぞ!」

ジャッジ「俺はどっちでもいいけどな」

トリック「しかし、あのタイプのゲームは本当に幼女がないから困る……」

ジャッジ「あの世界観やシステムでどう幼女を絡ませるんだボケ」

トリック「言っておくが! 幼女は全面的に認めるがロリババアだけは認めんぞ! 見た目幼女でもババアだからな!」

ジャッジ「基準がわからねえよ……。さて、今回のザ・ハード情報局だが…何を説明するか若干ネタ不足だ。」

トリック「意外に早かったな。」

ジャッジ「前々回あたりから情報局というよりただの楽屋裏みたいな雰囲気だったしな」

トリック「一度質問を募集していたが、あれはどうなった?」

ジャッジ「一回に付き感想は1〜2個しかつかないのにそんな質問が来ると思っか?」

トリック「すまなかった」

ジャッジ「さて、まあ次回までには時間稼ぎの説明ネタも考えておくかな……。」

トリック「では、今回はここまで。撮影終わったら幼女ぺろぺろしに行こう……」

ジャッジ」そういうことは放送終わってからほざけ」

「この放送は犯罪組織マジエコンヌの制作でお送りしました」

フロム「今回オチもなく終わったな……。」

chapter 2のメイン人物、というかハンシンの三人について(前書き)

今回のメイン人物は登場人物というより、本当に中心人物を抜粋。
まあフロム・ユニ・がすとだけなんだけどね。

chapter 2のメイン人物、というかハンシンの三人について

フロム（デッド・ザ・ハード）
殺し屋の半身。その性質は殺戮。

つまりはいつもの主人公。

最近ユニにデレデレになられ若干困惑しながらも徐々にデレ始めている。

人間を救うのはいつだって人間、の持論は今も持っているようでもう自分には人間は救えないと逆に開き直っている部分も。

今まで以上に残酷になるかもしれない。大体ジャッジの所為。

使用（予定）武器

基本的にグレネードライフルが変形したものの。弾薬は別途に持っている。

どんな変形だよ、と感じたらヴァンキッシュで検索してみよう。あれフロム作品じゃないけど。

グレネードライフル：いつものグレネード。通常・スモークの二種類の弾頭が存在する。

レールガン：ダイトウリヨウ愛用の強力レールガン。多分コインよりは強い。

ミサイルランチャー：四発装填と十六発装填の二つが存在する。

火炎放射・冷凍ガス放射器：別に一機で両方吐けるわけではなく、別個の物。まあどちらも変形であるのだが。

月光（レーザーブレード）：鋼鉄だろうとなんだろうと焼き切る高出力レーザーブレード。隠し玉として使えるように小型化しすぎた結果数十秒しか展開できなくなった。本当に奥の手用。

NIOH（パイルバンカー）：グレネード直撃も効かないザ・ハー

ドの装甲も貫くほどの超火力超低射程の超浪漫武器。殴ると同時に使えば多分必中。使ったびに右手の甲が火傷する。

NEW!

フロムキャノン：最近ラステイションで開発されている兵器使用に特化したある粒子をチャージ、濃縮してぶっぱなす代物。人体や植物に大きな害をもたらす。

ユニ（フェイク・ザ・ハード）

銃撃の半身。その性質は虚勢。

ザ・ハードのハンシンという現実を突きつけられ若干精神が崩壊しているため、情緒が不安定気味。

フロムに対してはデレデレを超えて依存しかけているが、他人には元の気丈な様子。

フェイク（偽り）の名の通りである。

使用（予定）武器

武器を素粒子化して持ち運んでいる。弾薬はエネルギー弾なので充填を怠らなければ弾切れは基本的に起こらないそう。

ハンドガン（デザートイーグル）：本来なら反動がヤバい拳銃。ガンタの如く使いこなせるように修行した時期もあったらしい。
アサルトライフル：本来なら一丁を両手で持つものだが、両手に一丁ずつという離れ業でよく使われる。反動は何とかなっているようだが照準はブレまくり。下手な鉄砲数撃ちやあたる。

ガトリングガン：六本バレルの殲滅用機関銃。流石に反動が強く走ったり跳びながらは撃てないらしい。

ショットガン：近距離用散弾銃。これも両手に一丁ずつで乱射する。散弾だけあつて意外と当たる。
スナイパーライフル：遠距離用狙撃銃。ユニはもともと狙撃の才能がある（フロム談）らしく、命中精度は高い。問題はユニがやりたがらないこと。

ビームライフル：戦艦の主砲並の出力があるらしいライフル銃。近
く中距離ようだが速度・威力は折り紙つき。連射能力は高くない。

がすと（デスペア・ザ・ハード）
創造の半身。その性質は絶望。

故郷を追われ、すべてに絶望しきった少女。常に目の光がなく、達観しているように話す。

自らに幸せをくれるというザ・ハードを探し、ネプギアについていくことにしたようだ。

座右の銘は「奇跡も魔法もないんですの。」

使用（予定）武器

その場で武器（道具）をつくりだして攻撃する。

調合には20秒ほどの隙ができるが、同じ道具ならば一気に複数作
ることも可能。

テラフラム：傍から見れば十尺玉。火力を濃縮しているため、ヤバ
い威力を誇る。

ラングレヘルン：ぶつければ即座に凍りつくほど冷たい爆弾。どう
やってがすとが握っているかは不明。

爆雷針：これが刺さると晴れだろっが屋内だろっが問答無用で雷が

落ちてくる。雷の威力は本当にヤバいから注意。

アルトネリコ：ある塔を模して作られたという超危険な爆弾。1
00階建てぐらいならこれ一つで木端微塵に吹き飛ばさるう。

がすとの武器はまだあるかも？

chapter 2のメイン人物、というかハンシンの三人について（後書き）

若干魔女っぽい説明が出ている？気にしたら負けだよ。割とあつてるし。

今回三人だけだけど、この三人が主役だとわかってくれれば幸いです。割と本気で。

2 - 1 (前書き)

……なんだろう。最近ユニのキャラがわからなくなってきたような
情緒不安定になったというか…純粹にキャラがわからなくなったよ
うな……こまけえことはいいんだ(r y

「船が出られないだあ？」

リーンボックスやプラネテューヌに続く船が集まるラストেশション最下層の港。

現在、リーンボックス行き定期船が全線欠航という異常事態が起きているらしい。

「はい。現在リーンボックスで定期船の故障が相次いでいる、と情報が入っています。事態の確認、収束まで定期船は全線欠航になっています。」

「先を越されたか……ネプギアもおそらくはまだ行ってはいないだろう。VOBで先回りするか。」

とりあえずユニを連れて駐輪場でVOBを拾い、港まで軽く走る。海が太陽光を反射してやたら眩しい。そして潮臭い。

「ねえ、フロム……？これって、水上走行できるの……？」

「多少無茶ではある。水上走行に必要なのは本来浮力と推力だ。一応ホバーもついているがそこまで期待はできん。だから純粹に推力だけで走る。舌を噛まないように……ん？」

視界に、一隻の帆船が。というかゲームギョウ界にあったんだな、あんな時代に投げ捨てられたような船……。

「ユニ。スナイパーライフル。誰が乗ってるかわかるか？」

「待って……。」

「…ネプギア。」

「ハア!？」

「それに、ほかの三人と…デスペアもいる。」

「定期船がないからで自前で用意するか普通…?？」

「……撃つ?？」

「撃つな。とりあえず接近する。しっかりつかまってる。」

「…うん。」

ユニがスナイパーライフルを消し、私に抱き着く。……ユニが振り落とされなければいいが。

VOBのホバー（気休め）を付け、アクセルを吹かして飛び出す。少し着水したが、そのままアクセル全開で走り、水上数mを走る。おお、意外にいけるもんだ。

そのまま速度を上げ、視界にある帆船に合わせ並走する。どうやらネプギア連中もVOBに気付いたようだ。

「あんだ……!」

「よう、デスペアとプラネテューヌの女神候補生とその他大勢。定期船ではなく自前で船を使うなんて、お急ぎかい?」

「えっと、何の用でしょうか?」

「別に、ただ女神候補生様がそんなお急ぎとはね。」

「……用はそれだけ?」

「連れないこと言ってくれ。まあ、私たちは先回りさせてもらうよド畜生とも。じゃあデスペア、また。」

「……。」

遠目に大きな陸地が見えたため、アクセルを吹かして帆船を追い抜く。

「ユニ。少し飛ばすぞ。」
「……………」

ユニからの反応は抱き着く強さが強くなる程度だったが、返事として受け取り、全速力で走り出す。

水飛沫も置き去りにして、水上を走る。視界の端にいる海豚のような奴も……………ん？

「キユエエエエエエ！！！」

「……………こんな時にかアアアアア！！！」

ぬいぐるみのような体色から、おそらくドリームドルフィンだろう。こんなときに襲われるとは…。VOBの武装は横には対応してないんだよド畜生。

「ユニ、牽制射撃！」

「了解……………！」

ユニが返事をした直後、後ろで発砲音が。

…あれ、でもユニ、私に抱き着いたまま……………？

まあ、それは後でいいだろう。あと数分で陸地だが、完全に敵視されたようだ。ぬいぐるみみたいな姿しやがって。

「ユニ、近づかれないように牽制。もしくはVOBの前方に追い込め。それで片が付く。」

「了解……………」

VOBの主兵装、ビームマシンガンを起動し、そのままリンボックスに向かって走る。

後ろでは銃撃戦が続いているようで、どうやら牽制を選んだようだ。徐々にドリームドルフィンの声が遠ざかる。巻いたかな？

っと、ちょうどリーンボックスの陸地が見えた。

「歯食いしばれユニ、着陸する！」

軽いウイリーと同時にアクセル全開。軽く跳び上がって陸地に乗り上げる。

あーあ、潮だらけだド畜生。往復耐えられるのかねえ。

手頃な場所にVOBを止め、備え付のカバーをかける。多少のカムフラージュにはなるだろう。

「さて、あとはリーンボックスに向かうだけか。」

「……………」

降りると同時に、ユニがまた私の腕に抱き着く。

……………はあ、これに関しては諦めるしかないかな。

リーンボックスの方向は多少わかっているが、……………まあ、そのうち着くだろう。

そう考え、ユニと共に海岸線を歩き出した。

2 - 1 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ネ「プテューヌ」ヒヤッハー！生放送だー！」

フロム「馬鹿が増えた……おいジャツジ、こいつ洗脳したんじゃないのか」

ジャツジ「俺が知るか、トリックに聞け」

ネ「ふっふっふ…このねぶ子様に洗脳なんてものが効くと思ってくれては」

フ「……」(無言でレールガンを頭に押し付ける)

ネ「すいません……後書き補正です……」

フ「というわけで、たびたび後書き補正でこいつらの洗脳が解けるが、まあ本編に影響は出ないから大丈夫だろう！きつと！」

ジ「適当だなおい……。」

ネ「えーっと、今回の解説は、私たち女神についてだよーん！」

フ(ウゼエ……)

ネ「今、私たちは三年前のギョウカイ墓場侵攻時にマジエコンヌに敗北。ずっと縛られてたんだよねー。まあ、その上洗脳なんてされちゃったんだけど。」

フ「本人に解説されると何かシユールだな……。」

ネ「実は、作者自身もずっと謎に思っていることがあるんだよね。」

フ「と言うと？」

ネ「何で三年間もずっと縛られてたのに女神化解けてないんだろ。短くないとはいえそれなりに稼働制限時間ってのはあるんだけどね。」

「

フ「ゲーム本編とイベントの補正だろ」

ネ「メメタア！」

フ「おいジャツジ、女神チェンジできねえのか。」

ジ「しても、次アレだぞ？」

ノワール「……（チラッ）」

フ「ああ、アレが来るならこいつのままでもいいや」

ノ「……（がーん）」

ネ「おおよ、フロムたんノワールが嫌いだったの？」

フ「…過去にいろいろあった。つかこれ後書きの漫才コーナーで話すようなことじゃないからな、ほんとに。本編のシリアスな場面で話すようなことだからな」

ジ「ほんとにな……。どうでもいいが作者の順位では白女神（プラン）>ムラサキ（ネプテューヌ） 黒い奴（ノワール） 緑の奴（ベール）だ。ゲームギョウ界大選挙でも一切戸惑わずに白いのに入ってたしな。」

ネ「プランがこの放送来るのってノワール考えると次々回だよな。」

…… 次回のフロムたん嫌な予感しかしないけど」

フ「十年來のこの恨みはらさしておくべきか……」

ネ「なんかヤバいこと言いだしてるし…こ、今回はここまで！」

ジ「つかザ・ハード情報局だよなここ、デッドならまだしもなんで女神がいるんだ」

フ・ネ「…今更!?!」

「この放送は、犯罪組織マジエコンの制作でお送りしました」

ユニ「私たちも出ることになるのかしら…」

がすと「だとしたら、めがみ様ときょうえんはかんべんですの。まぶしすぎてがすとがかすむですの。」

フロム「こいつも女神嫌いだったんだ……」

2 - 2 (前書き)

みんづぶのサブイベみたいなのをやりたいけども、ネプギアPT加入が未だ未定……。ゼロは私に何も教えてはくれない……。

「うわぁ……………」

「……………」

なんたららの緑の大地、リーンボックス。私も度々行くのだがどうしてもこのよくわからない形の建物は理解し難い。わけがわからないよ。

港の方向を見ると、先ほどの帆船がかすかに見えた。どうやらネプギア達も到着しているようだ。

…………… そうだ、一応教祖に連絡しておくか。

『やぁ、フロ……………惚気なら切るよ。僕も暇じゃないんだ。』

「嫌味だろ、ゼツタイ嫌味だろオイ」

『冗談だよ。君がそんな周りに自慢するタイプとは思えないからね。だがユニを落としたのは事実だろう？』

「ウゼエ……………いいから本題だ。ラストイション〜リーンボックス間の定期船が全部止まってるらしいが、どういうことだ。」

『さて。それは僕にもわかっていないんだ。リーンボックスでも何が起こったかわかっていない。恐らくマジエコンヌだろう。爆薬は取っておいてくれ。先払い報酬にしておくよ。』

「へいへい。やることはネプギアのストーカーね。」

『ああそうそう。一つ注意があるんだ。先ほど君たちやネプギアが行く旨をリーンボックスの教祖、箱崎チカに伝えようと思ったんだが……………どうやら不在のようなんだ。教祖が教会を開けるといのはよっぽどのがないかぎりありえない。女神ベールに相当ご執心の彼女とはいえ、何かあったかもしれないよ。気を付けてほしい。』

「…了解。」

「教祖が不在、か……。面倒事にならなければいいが…無理だろうな。」

「……。」「…おいユニ、いい加減立ち直れ。ネプギア達と出くわす可能性もあるんだ。」

「そうね…ネプギアと、仲直りするチャンスだもんね……。」

あ、こいつ仲直りする気ないな。というか諦めてるな。豆腐メンタルな女神だ……。

それはともかく、教会に向かうことに。

リンボックスの教祖、箱崎チ力。当然私も会ったことは無い。はあ、ここ数日で三人の教祖に雇われることになるとは…嬉しいやら悲しいやら。

リンボックスの街中を歩くなか。何か見たことのあるような奴が出てきた。うん、会いたくなかった。

「お早い到着だなネプギア。女神不在のリンボックスにシエアを差し込みに来たか？」

「随分嫌味つたらしいこと言ってくれるじゃない。そういうあんたはユニを連れて何故リンボックスに来たの？」

「何だつてネプギアではなくあんたが返事するんだかね…。私はこいつの護衛だ。傭兵らしい任務だろ？」

「……………何を企んでるの？」

「さて、何を企んでると思う？」

「それが思いつかないから聞いてるんだけど」

「ネプギアが私を雇ってくれるんなら、味方と判断して教えられるかもしれないけどなあ。」

「……くっ」

「そこまで敵視する必要もなからうに。それとも何か、お前たちはユニと敵対でもしてるのかね？」

「そんなわけないでしょ。……私は、ネプギアとねぷ子を守りたいだけよ」

「自らの手に余るとは思わないのかねえ？」

「……」

「ユニちゃんー！」

「……何よ、ネプギア」

「私ね、私ね！ユニちゃんと仲直りしたかったんだよ！」

「……そう。」

ネプギアとユニも何やら話しているようだ。

……なんだこの感じは。

「ねーユニちゃん。」

「……」

「ユニーちゃんー！」

「何よ……」

「えっと、私と仲直りしてほしいなー、なんて……。」

「別に、どうでもいいわよ。」

「あ、えっと、じゃあ、仲直りしてくれるんだーやったー！」

「子供かおい。」

「ねぶ子の例を考えると、どうにも言い返せないわ……」
「それで。あんたらはこれからどうするつもり？ シェアを回復するのは楽だろうけど厳しいだろうね。」
「どっちよ……！ ネプギア！」
「あ、はい。」

アイエフがネプギアを呼び、何やらひそひそ話を始めだした。人の前でやるなそんなこと。

「…フロム、だったわね。」
「なんだい？ 私を雇うとでも？」
「……雇う気はないけど、少しついてきてほしいのよ。」
「ほう？ それは私に得のある話かな？」
「教祖に会うのだから、得になるとは思っけど。」
「ほう、教祖に……。ん？ 待て。リンボックスは女神どころか教祖も不在と聞いたぞ？ 教祖の居場所でも知ってるのか？」
「へ？ チカさんなら、教会にいましたよ？」
「……ふむ。聞き出すか。ユニ、行くぞ」
「…了解」

「え、ちょー！？」
「ま、待ってよユニちゃん！」

ネプギアとアイエフの制止を投げ捨て、教会に向かう。
これは、何やら嫌な予感がするな…。

「ちーっすフロム屋でーっす。」

教会の扉をいつもの如く蹴り開け、ずかずかと中に入る。そこには、長身の女性。恐らくこいつが教祖だろう。

「なっ！こんな時に……な、何の御用でしょうか？」

……おい、何だこの溢れる偽物臭は。

「何の御用とは、ケイの奴も随分杜撰な連絡をしてくれたものだ。箱崎チカに連絡しておくと言っていたのに。」

「あ、ああ、そう！ケイさんから、も、もちろん聞いていますよ。」

(ユニ、銃を貸せ)

(……はい。)

「ケイから聞いているのでしょうか？なら早く情報をもらいたいものだが。」

「あ、はい、えーっと、ちょっと待っててくださいね。」

「急いでほしいね。ネプギアもあまりノロマではないだろうから。」

「な、何故そこでネプギア……さんの名前が出るのでしょうか……？」

「ケイはどこまで適当な説明をしたんだか。私の依頼はネプギアのストーリーだぞ？ネプギアにそんなバレルわけにはいかないだろうに。」

「あ、ええーっと……。」

「さて。そういえばおかしいな。何故あなたはケイから連絡を受けているのかね？」

「……へ？」

「先ほど、ケイから連絡があつてね。箱崎チカと連絡が取れなかった。と言っていたよ。」

「あ、えー……。」

「連絡が取れなかったのに、何故私の話に合わせてるように話をして
いたのだろうね？……おい、【箱崎チカ】。私の名を言ってみる。」

ユニから渡されたショットガンに向け、【箱崎チカ】に聞く。

「ぐぬぬ……！チツ！」

「煙幕……。」

突然、教祖が何かの玉を叩き付ける。それと同時に白い煙が立ち上
がり、視界が封じられる。

……。だが、先ほどの髪の毛のデカい影が見え、それに向けショットガ
ンを数発撃ち込む。

「……………逃げられたか。」

数回パスト、という着弾音が聞こえたが、悲鳴は聞こえなかった。
声は耐えたのだろうか。地味にタフな奴だ。

「……………」

「さて、どうしたものか……。まあ、ネプギアに手柄をやるのも癪
だし、偶には私が解決しますかね……。。」

ユニにショットガンを返し、教会を後にする。

ふむ……どこもかしこも面倒くさいことになっている。

ここはひとつ、マジエコノヌの奴に協力を取り付けてみるか。つい
でにこの問題も解決して金も貰おう。

2 - 2 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

「ノワール」ザ・ハード情報

「フロム」チェンジで。」

「はやつ！？せめて言い知らせなさいよ！？」

「ジャツジ」肩身がせめえ……………」

「喧しい、女神の中で唯一女神化で逆に幼くなる奴が」

「それ何も悪くないわよね！？ネプテューヌやブランよりかはマ

シでしょ！？」

「白いのは元からあんなだろうが」

「ううう…本編で女神嫌いの理由が開かされるまで私ずっとこんな扱い…………？」

「理由明かされてもそんな扱いだろうな。ジャツジ、フェイクを呼んでくれ」

「俺は小間使いじゃねえんだぜデッドオ……………」

「でも素直に呼びに行くお前は嫌いじゃない」

「はあ、来たわよ……………」

「きょうせいとびいりさんかとはずいぶんな扱いですの。」

「うっせえうっせえ。ザ・ハード情報局なんだから本来ザ・ハードがいるべきだろ、コレじゃなくて」

「コレ扱いなんだ…………。てかそんなこと言うなら前回言いなさいよ！ネプテューヌの方が邪魔でしょこれ！？」

「そこは認める。だが私のトラウマ補正というものがある、異常だ。」

「あ…………お姉ちゃん、どんまい。」

「弱者は投げ捨てるものですの。しかたないですの。」

ノ「ユニまで……。とりあえず、ザ・ハード情報局、始めるわよ…
…。テーマは【武器】。」

フ「私もあまり人のことは言えないが、女神共はどっから武器を出してるんだ？」

ユ「恐らく、全員素粒子変換してると思っわ。できる量には個人差も大きいと思う。ダントツは私よ。」

ノ「収容量としては、ユニ>ネプテューヌ>ブラン>ネプギア>私>ベール>ロム&ラムかしら。」

ユニ「私が一番使う武器多いからね…。本来なら一種類なんだけど、フロムに影響うけてこんな感じに……。」

ノ「ネプテューヌも刀を二本出して滅多切りとかやってたわね。」
が「それ以降は基本的に武器一個分しか収容できないのですの？」

ノ「そういうわけじゃないわ。私もこんな感じの剣だから、それなりに出して投げつける、って戦い方もできるわ。エネルギー消費が半端じゃないからそうできないんだけど。」

フ「ふーん……。っと、珍しく情報局らしいことしたな。今回はここまでだ。」

ノ「次回以降来てもいいわよね!？」

フ「ユニ次第だな。」

ノ「ユニ!」

ユ「フロムがいいなら。」

フ「じゃあ無理だな。では、また次回。」

「この放送は、犯罪組織マジエコノヌの制作でお送りしました」

ノ「そんなあ……。」

女神三人「……。」「」（肩ポン）

(2 - 3 + おまけ) - たくさん (前書き)

今回書ききった直後に戻るボタンの要因で書いたのがすべて消え、心が折れたので内容をなくなつた気力のまま書いたので全体的に内容が半分ぐらいに薄くなつております。許して。あの書き終わった後消えた時の喪失感とか絶望感とかヤバいの。色々。三時間が消えたの。三時間の結果。

(2・3 + おまけ) - たくさん

「さて、どうしたものか……。」

教会を出ても、先ほどの人影はなかった。意外に逃げ足が速い。さて、手掛かりもなしにどうやって探せばいいか……。

…おや、ネプギア達だ。私たちを追ってきたのか？

「み、見つけたわ…！」

「どうやら私の予感当たっていたようだ。教祖は偽物。今さっき逃げてった。」

「偽物……やっぱり！」

「あんたらと敵対したくはないんだけど、私はあの偽物にちょっとした用がある。ま、そこで待ってな。」

「そもいかないわよ。」

「教会にいたのが偽物のチ力さんなら、どこかに本物のチ力さんがいるはずです！探さないと！」

「どうやら、あっちも引く気はないようだ。あー頑固者って嫌だねほんど。」

「……じゃあ、ここで一つ提案だ。共闘しない？」

「共闘……？」

「雇うってわけじゃない。ちょっと共同戦線でも張らないか、とね。」

「はい、もちろん…！」

「ちょ、ネプギア！？決断早すぎない！？こいつ敵よ！」

「何時まで引きずってるんだよ」

「でも、ユニちゃんが認めるひとなんですから、きつといい人ですよ！」

「そんな単純な……コンパもなんか言ってるやいなさいよ。」

「あいちゃん。ぎあちゃんを信じてあげてくださいです。」

「コンパまで……ううう……わかったわよ。」

「交渉成立。まあ、少しの間よろしく。」

「よろしく願います！」

「はあ……。」

「……ねえ。デスペアと……あのスーツの子。どこいったの？」

「あれ？そういえば、日本一とがすとがないわね。」

「日本一さーん、がすとちゃん？」

……デスペアが行方不明？あいつがそんなはぐれるような奴とは思えないが……。

「あーもう、どこ行ったのよあいつら……！ネプギア、コンパ！今すぐ探すわよ！」

「は、はい……！」

「りょーかいです〜！」

「あーあ、行っちゃった。」

ネプギアじゃなくてアイエフが仕切ってるんだな……と無駄な思考はこれぐらいにして、

ネプギア達が視界から消えてから、私は適当に歩き出す。情報収集なら人の多いあっちが適任だろう。

そういえば、ユニが抱き着いてこない。後ろからついてきてはいる
ようだが……。まあ、いいか。

くおまけ ティ ススキットのな会話集

【今までなにを？（ネプギア・ユニ）】

「そういえば、ユニちゃんはいままで何してたの？」

「何……って、ずっとフロムの傍にいたけど。」

「そうなんだー……。今度、フロムさんのことも教えてほしいなっ
」

「…機会があればね。ほらネプギア、行くわよ。」

「あ、待ってよユニちゃんー!!」

「……言えるわけ、ないじゃない」

【ムカツクあいつ (アイエフ・ネプギア・フロム・コンパ)】

「あゝ…もう!」

「アイエフさん、不機嫌ですな……。」

「あいちゃん、何があったでしょうが……」

「あんにやるー、いつもいつも人の邪魔ばっかして…あーイラツク
」!

「過度なストレスは体に悪いぜー?カルシウム取れカルシウム。」

「あんたがストレスの原因でしょうが!」

「酷い言われようだ。いつ邪魔をしたんだか。」

「そんなの決まってるでしょうがー!」

「…フロムさんだったみたいですね。」

「もう少しすれば、あいちゃんもわかってくれるです。」

「だいいいんですけど……。」

【女神嫌い1（ネプギア・フロム・ユニ）】

「お姉ちゃん、大丈夫かな……。」

「……」

「おや、姉の話題に乗らないのか。」

「判つてて言ってるわよね」

「勿論。」

「…あの、フロムさん。」

「ん？」

「フロムさんって、女神が嫌い、って前言っていましたよね…。どうしてなんですか……？」

「……そうさねえ。しいて言えば、口が手より長いから、かな？」

「……？」

「女神ノワールも、どうして手が短かったようで……。私みたいな奴を生み出してしまったわけだ。っと、おしゃべりが過ぎたな。先に行くぞ。」

「ま、待ってよ、フロム……。」

「どづいう、ことなんだろう……？」

(2・3 + おまけ) - たくさん (後書き)

「ザ・ハード情報局」

「ブランチザ・ハード情報局。」

「フロム「結局四女神全員やんのか……?」

「ジャツジ「知らねえよ。」

「ブ「大丈夫、ネプテューヌやノワールの二の轍は踏まない。」

「フ「さいですか……。」

「ブ「じゃあ、今回のザ・ハード情報局。テーマ【ザ・ハード浸食】。

」

「フ「本編で私やユニの性格が安定しない理由だ。デッド・フェイク・デスペアとそれぞれのザ・ハードの本質に徐々に浸食されているわけだ。」

「ジ「浸食度は結構まちまちだな現在(2・3時点)だとデッド:50% フェイク30% デスペア:75%ってところか。」

「フ「デスペアはザ・ハード浸食を喜んでいる節もあるからな。浸食が速いんだろう。では今回はここまで。一回書いたのをもう一回書くって心労がマツハ」

「ジ「まあ、言ってるな……。」

「この放送は、ザ・ハード情報局の提供でお送りしました」

「ブ「そういえば、ロムとラムは……」

「フ「トリックに食われた」

「ブ「何イ!?!」

「フ「嘘だよ。」

「ブ「て、つめえ……殴られてえか!」

「フ「戦いたいならジャツジとやってる」

「ぐぬぬぬぬ……」

2 - 4 (前書き)

今回、あの伝説の変態武器登場。

あとハンシン三人のザ・ハード浸食100%の妄想が止まらないんだがどうすればいいんだろうか。

デスペア達を探すアイエフ達。

それについていく私とユニ。いつのまにか町を離れ、草原地帯を進んでいた。

……って、何で!?

「日本一とがすと、それだけじゃなくてネプギアとコンパにも発信機をつけておいてあるわ。その結果、南の火山地帯にいたことがわかったの。」

「用意周到だなおい……。」

「は、発信機!?! あいちゃんはわたしが迷子さんになると思っていたんですかあゝ!?!」

「今までコンパが迷子になった数、教えてあげようか?」

「あ、あううゝ……。」

「漫才はそれぐらいにしておけ。囲まれたぞ。」

周りをザッと見ると何もいらないように見えるが、草に擬態したモンスターが周囲360°に存在している。

まあ、リーンボックスの環境を投げ捨てるようなまねをするならばあっさりかたずけることはできるのだが…。

「さて、どうする?」

「行く方向は南よ。突っ切るしかないでしょ!」

「オーライ。全員、10秒稼げ。私が道を開く。」

グレネードを変形、全体的に刺々禍々しいキャノン砲を出す。

…数秒後、照射が収まり、強制的に変形、グレネードライフルに戻る。

目の前は森ごとモンスターが薙ぎ払われ、火山まで緑色の粒子溢れる道ができていた。

「…っけほ、けほ……。」

突然息苦しくなり、咳が出る。むむむ、やっぱり自分への影響もあるか……。

「ふ、フロム！大丈夫……！？」

「問題はない。急ぐぞ…！汚染度は低いはずだ……！」

火山地帯。火山なんて、街から遠目でしか見たことはなかったが…意外に使われていたような跡がある。

「けほっ……。」

先ほどから、妙に咳が出る。何かしらの影響は出ると思ったが、さすがに顕著だな…。

「ねえフロム……。」

「……問題ない。アイエフ達は先行したか……。」

「火山深部、って言っていたわ。フレイルフェンリルには気を付けて、って。」

「オーライ……」

視界が緑色のフィルターをかけられたようだが……まあ、大丈夫、だろつ。

重い足を上げ、歩き出す。何だ、頭、というか身体が重い。

「……ユニ、先に行け。私は役に立たなそうだ。」

「あ……りよ、了解……」

ユニが先に走りさるのを見てから、周りの壁に寄りかかり、座る。かなりの嘔吐感、不定感覚で出る咳、おそらく高熱……。

フロムキャノンに使われている粒子。環境と人間に多大な影響があるというが……チャージ半分でもこの影響か……。フルチャージできるのはいつの日か……。

……少し、寝るか……。

「……。」

「あんたは……」

2 - 4 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ベール「ザ・ハード情報局。四女神最後の一人。グリーンハートとベールですわ。」

フロム「本当に全員来やがった……。」

がすと「事実上死亡が確定しているくせに、無駄にでしゃばると死期が近づくですの。」

フ「死亡確定してるのって…… (台本確認) …… ああ、そうだな」

ベール「さて、今回は【ザ・ハード浸食】パート2ですわ。」

フ「前回、私たち三人は徐々にザ・ハードの本質に浸食され、果てにはジャッジやブレイヴ、トリックと完全に同類になる。具体的にどうなるかは…… 絵師がいないから説明できない！ すまん！」

ベ「投げ捨てるのぉー!？」

フ「作者は本格的に絵ができないんだから仕方ない。メイン三人のザ・ハード浸食100%に関しては何となく考え付いている。が。

登場なんて最悪しねえ。」

が「それはなんのいみがあるんですの？」

フ「自己満足。」

が・ベ (えええ……))

フ「まあ、魔文化と似たようなことになると考えてくれて構わない。要望があれば詳しく (ボスモードで考えて) 説明する回を設けよう。本文でな！」

が「需要は皆無だとはわかりきってはいても、つい言ってしまう性分みたいですの。」

ベ「……では、今回はここまで。次回でお会いいたしましょう。」

「この放送は、犯罪組織マジェコンヌの制作でお送りしました」

「フ、そういや、何だかんだで一番円滑に進んだな。」

「が、そりゃあ、見かけ一番年増だからですの。」

「べ、………（、・、・、）」

2・5（前書き）

需要はなかったけど出る予定があんまりないザ・ハード浸食100
%の三人の説明を近々やる予定。やる意味？自己満足（ドヤア

あ、あとありえないほど短いので注意。

〈視点【ユニ】〉

「っは、はあ、はあ……。」

私は、ただ只管火山内部を走る。

火山というだけの気温や湿度が徐々に私の体力を奪う。なのに、何故だろう。息が切れる、と思っっているのに、何かおかしい。

何か、自分がここにいないような、そんな感覚……。

……ううん、そんなの気にしてる場合じゃない。

とにかく、走り続ける。最奥へ。

数分、走っただろうか。周りに進む道も見当たらない。少し見渡すと、火口付近に、ネプギア達の姿が見えた。

咄嗟に銃を二挺出し、走りだす。

ネプギア達は何やら苦戦しているようだ。敵は前に見たことある下っ端っぽい奴。

……あれ、私、どっちの味方をすればいいんだろう……。

……決まってる。私は……私は……。

足の動きが止まり、立ち止まる。

……目の前で戦っているのに。

自然と両腕が上がり、銃を構える。
二挺の銃が狙うその先に向け……引き金を引いた。

〈視点【ユニ】 【フロム】〉

……ここはどこだ。

屋内……リンボックスか…？

「……あ、起きた……。ケイヴちゃん、おきたで〜。」

…人の声。聞いたことのある声だ。

「目を覚ましたか。」

「つつあ……。」

目の前には、長身赤髪の女性と、青髪の少女。

……。この青髪、どこかで見たような…。

「プラネテューヌとラストেশヨンの女神候補生が南へ向かうのを見た、と連絡があつてな。最初に見つけたのが君だ。」

「…ネプギアとユニのことか……。」

「そうだ。知っていることがあれば教えてほしい。」

「……その前に、自己紹介ぐらいしてもいいんじゃない？」

「…そうだな。私はケイヴ。」

「うちは、5pb. 聞いたこと、あるかな？」

「5pb. ……リンボックスのカリスマアイドル歌手か。」

「知っててくれたんやな。感激やあ〜。」

「……で、ネプギア達について、だな…。」

言われるまま、私は簡単に事の詳細を話した。(まあ、マジエコン又の手先が教祖に化けていて逃げたのを追いかけた、ぐらいだがな。)

「教祖に化けていた、か……。だとしたら、あのことも納得だな…。」

「どのことかは知らんが、連中はどうするんだ。私に構ってばかりでいいのか？」

「何を強気な……。私が保護しなければ貴様は死んでいたぞ？見るからな高温、異常な動悸。持病というわけでもないのだろうか？」

「…まあ、そうだけだな。だが、今頃ユニ達がどうなっているかわからん。私はここで休ませてもらう。」

「…そうだな。行くぞ、5pb。」

「りょーかいやあー。」

二人が去り、静かになった部屋。

「…けほっ。」

未だ、不定期に出る咳。

なんたら粒子の汚染とは恐ろしいものだ。もう一度、撃てるのだろうか…。

先知れぬ汚染の不安。そして、ザ・ハードへの畏怖。

……私は、今は何もできない。

そう自嘲しながら、静かに眠りについた。

2 - 5 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

フロム「女神共も出番終わったし、ようやくまともなザ・ハード情報局になったな……。」

ユニ「……まあ、そうね。」

がすと「ここから先はザ・ハードの聖域ですの。人間、女神、その他諸々はかえりやがれですの。」

フロム「さて、対してネタもないしさつさと情報局始めるか。今回は【ザ・ハードの特殊能力】についてだ。」

ユニ「私たち三人の中では現時点では恐らくがすとしか使えないだろうけど、ザ・ハードにはそれぞれ特殊能力を持っているわ。」

フロム「私(デッド)は無条件即死(ゲーム的な意味ではない)、ユニは本物が存在しない、つまりは疑似不死身。デスペアは、いわば幻覚だな。相手を絶望させることに特化した、な。これは浸食率が増すごとに使えるようになる。ユニの場合、まあ勝手になるわけだがな。」

ユニ「流石に、不死身ってのは堪えるわね……色々……。」
がすと「まあ、絶望を与えるのがしごとながす……私にはぴったりですの。」

フロム「ユニやがすととはもかく、私に至ってはおそらく浸食率100%近くないと使えないだろうがな……。」

ユニ「浸食率が100%になるってことは、魔女化すると同じように考えてもらっていいわ。……これ言っただけ?」

フロム「まあ、いいだろ。では、今回はここまで。また次回。」

「この放送は、犯罪組織マジエコノムの制作でお送りしました」

フロム「今回、色々と地味な放送だったな。」
ユニ「ジャッジヤトリックがないからじゃない？」
がすと「まあ、いちおうしゅじんこうはがすとたち三人だからいい
んですの。」
フロム「…それでいいや。」

2・6（前書き）

ついに今回、原作キャラ死亡に。正直当初の予定にはなかったんだけど……。

私の予定は基本的に投げ捨てられるものだからなあ……………。

ここからガリガリ堕ちていく（予定）なので、色々注意？

〈視点【がすと】〉

「ね〜がすと〜。一体どこまで行く気〜？女神様たちとはぐれちゃ
うよ〜？」

「……。日本一は女神様ががすと達がいないと誰かにやられるほど
貧弱だと思っているのです？」

「そういつわけじゃないけど……。」

今現在、私と日本一がいるのはリンボックス中央部、ガルガン平
原。

日本一は私の見立てでは最も頭が弱い。私の目的からすれば、一番
簡単に洗脳、いや懐柔できるだろう。

万が一、できなかつたとしても。絶望させ自殺でもさせられれば、
仲間意識の強い女神達なら強く哀しみ、まあ軽く絶望はできるだろ
う。

絶望が存在意義の身としては、これは一種の食事。食物連鎖とは実
に恐ろしいものです。

「ねー、がすとー。」

「……。日本一。少し、話があるのです。」

「話……？」

「そうですね。か弱い人間の悩みを聞き、解決するのもヒーローの
役目とはよく言うのです。」

「……！そういうことなら任せて！このゲームギョウ界のヒーロー日
本一に、何でも話してちょうだい！」

「頼もしいですよ。」

なんとも、単純バカだ。

「がすとは、人助けというものの意義がわからないんですの。」

「人助けの意義？そんなの、困っている人がいるからに決まってるじゃん！」

「……………。なら、その人助けによって迷惑する人間がいるとすれば？」

「そんなのはただの悪役って言うんだよ。人助けをして嫌がるなんて、そういるわけない。ね？だから、人助けってのはいいことなの。」

「……………わかりやすい説明。日本一は流石ですよ。」

「へへーん。」

人助けをしていやがる……………か。

人間に【助ける】ことが目的の奴なんてそうはいない。いるとするならばこの日本一みたいな単純な奴ぐらいだ。

大半の目的は、【助けることでの見返り】だ。その見返りを独り占めしているような奴がいるならば、当然拳つてつぶしにかかるだろう。過去そうして潰されたのが私。がすと。

悪く思わないでほしいですよ、日本一。人間なんて、結局は絶望にまみれるのがお似合いなんですの。

「あ、日本一。あれを見るですよ。」

「へ？」

私が指を指したのは、エレメントドラゴン。と、それに襲われているスライヌ。

割と普通にある、食物連鎖の光景だ。

「へ……危ない！助けないと!？」

「何を言っているのですの、日本一？あんなのはにちじょうふうけい
ですの。」

「そんなこと言ってる場合じゃ！あの人、食べられちゃうよ!」

……。日本一には、スライヌがスライヌに見えてはいないみたいで
すの。

単純馬鹿には本当によく効く。

「ああもう、とにかく助けるよ!」

「まあまあ、そんなに焦ることないですよ。」

走り出した日本一の足を払い、転ばせてその背中に座る。じたばた
しているようだけど起き上がれない様子。随分と非力ですの。

スライヌが食べられる間、優雅にティータイム。

あ、この紅茶結構いけるですの。

「日本一も紅茶……。っと、食べられちゃったみたいですよ。」

目前数十m先では、スライヌが無残に食いちぎられてしまったよう
だ。

まあ、日本一の目にどう映っているかはわからないけどですの。

「あ、ああ……。！がすと、何で、何で……。!」

「がすとには日本一が何を言っているのかわからないですよ。」

「何がよ！あんな、人が殺されたのよ!」

「……。だから?」

「えっ……。!?!?」

「一人殺されたからなんだというのです？がすと達の人生は何一つ変わることはない。」

「う……うううううううー！」

「と、ととと。」

突然日本一が力を入れ、私を振り落とす。危うく紅茶もこぼしかけたが、なんとか無事だった。

「がすと、あんた、あんたはあああああ……！」

日本一が涙を流しながら、私に愛用のプリニーガンに向け、走り出す。

徐々に刃が迫るなか、私の思考は、レヘルンの如く冷静だった。

「……人殺し。」

「……ッ！」

目前で、黄色い刃が止まる。

悪役は成敗しても、ヒーローは【殺さない】。そんな時代遅れな考えが、日本一の中には存在するのだろうか。

「……。この世は、勧善懲悪とはいかないのです。それを来世で学ぶといいですの。」

今、日本一の目には何が映っているのやら。そんなこと私にはわからないけど、きつと身動きもできないようなものなのだろう。

取り出したテラフラムに火をつけ、日本一の足元に転がす。

どうやら、彼女にはそれも見えていないようだが。

「さようなら、悲劇のヒーロー。」

その場から立ち去った数秒後、激しい爆音が響いた。

〈視点【がすと】 【ユニ】〉

「あ……あ、あ………！」

本当に自分の声なのかと思うほど掠れた声。

私の撃った銃弾は、ネプギアを掠り、アイエフに、あたった。

「ユニ……ちゃん……？」

ネプギアの声が、遠くに聞こえる。

数mぐらいしかない距離が、ネプギアとの距離が、本当に、永く感じる。

「何で……ユニちゃん……」

「私は！わたし、は………。」

「コンパさん……アイエフさんの手当を……」

「わ、わかったです！あいちゃん、しっかりするです………！」

「……どうして撃ったのか、言ってくれないの、ユニちゃん……」
「……。」

言えるわけ、なかった。私が、マジエコンの手先になっていたなんて。生まれた時から、運命付けられていたなんて。

「何の理由もなく、アイエフさんを、撃つたの…ユニちゃん…！」
強く怒りの籠った声。

ネプギアが光を纏い、女神化する。
その手に持つ剣を、ネプギアは二つ、持っていた。

「だというのなら…アイエフさんを…私も殺すというのなら…！」
「ハッ、隙有りイ！」
「私が…！私が…！」

突然ネプギアに後ろから跳びかかった下っ端。ネプギアに鉄パイプを振り下ろす。

ネプギアはそれをわかっていたように片手で受け、もう片手の武器で下っ端を吹き飛ばした。

「私が、ユニちゃんを殺してしまうかもしれないの…！」
「……。いっそ、そのまま斬りかかってくれば……。いや、もう引けないか。」

もう、後には引けない。ネプギアに持っていた銃を向ける。

後戻りはできない。私は、女神ユニを捨てた。私は、化物フエイク・ザ・ハードになってしまったんだ。

2 - 6 (後書き)

「ザ・ハード情報局」

ジャッジ「……なんだかんだで、久々だよな、このメンツ」

ブレイヴ「うむ。」

トリック「いい加減マジックも出てきていいだろうに。前回の青いの5pb.のように大幅に変わっているのだろう、どうせ。」

ジャッジ「……」

ブレイヴ「……」

トリック「……なんだね、その目は」

ジャッジ「お前、ザ・ハードと幼女以外にも名前覚えられたんだな……。」

トリック「ぬあんにお！ボクチンはザ・ハード1の戦略家だぞ！」

ブレイヴ「さて、彼らはそのまま遊ばせて私は仕事と行かせて頂く。今回の議題は、【ザ・ハードの能力2】だ。」

ジャッジ「前回、デッドたちがザ・ハードには各々特殊能力を持つ。って言っていたな。それは勿論俺たちにも存在する。それに最初からザ・ハードだからもちろん具現している。トリック」

トリック「では、順番に説明しよう。ジャッジ（審判）の特殊能力は、二極化だ。」

ジャッジ「白か黒か、赤か青か。それを完全に分ける、そして当てるのが俺の能力だ。生死の二極化ぐらいしか俺はやらないがな。」

トリック「次はブレイヴ（勇気）だ。ブレイヴの能力は、肉体状態の精神依存。つまり、ブレイヴの精神が砕けたりブレイヴ自身が負けと認めない限りブレイヴは不死身というわけだ。」

トリック「そしてこのボクチン、トリック（仕掛け）だ。能力は罠の自由設置。自由と言っても、使えるものは限られているし設置から発動まで時間もかかる。だが、さまざまな罠をその場で設置できるわけだ。その気になれば、幼女だって好きにペロペロ放送中ぐらいは……な？」…コホン、すまなかつた。わかりにくい、と思つたら【影牢】や【刻命館】で検索してほしい。」

トリック「マジックはハンシン自体が不明なため今は伏せておく。さて、これぐらいだな。」

ジャッジ「途中で我を忘れなければ100点だったのにな」

ブレイヴ「だが、あくまでも真面目にやるその意志。私は認めたい。」

トリック「褒められるならば幼女に褒められたいものだな。では、今回はここまでにしよう。」

「この放送は、犯罪組織マジエコンヌの制作で、お送りしました」

トリック「そつえば執筆中に携帯で感想欄見ていたが、質問が来ていたぞ」

ジャッジ「何イ！？だったら次回にでもやるしかねえな！」

ブレイヴ「なら何故途中でそれに関してのテーマにしなかつたんだ？」

ジャッジ「続いているんなら、終わらせたいだろ？」

トリック「なるほど……。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0773w/>

超次元ゲームネプテューヌmk2+ LastGoddess

2011年10月26日03時10分発行